

---

**最強チートで異世界無双！ ~ 勇者召喚に巻き込まれた  
けど気が付けば世界最強。美少女ヒロインに囲まれて英  
雄認定されました~**

---

水辺野かわせみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強チートで異世界無双！ ～勇者召喚に巻き込まれたけど気が付けば世界最強。美少女ヒロインに囲まれて英雄認定されました～

### 【Nコード】

N5658EO

### 【作者名】

水辺野かわせみ

### 【あらすじ】

「ようこそ勇者様方、我々はあなた方4人を歓迎します、つてあれ？ 1人多い？ 4人じゃなくて5人？ え？ ええええ？」

と言いついで、勇者召喚に巻き込まれ、異世界に転移してしまった高校生明日見僚。

勇者たちが強大な魔力とスキルによって、日々強くなってゆくのに対して、魔力無し、スキル無し、加えて称号無しの僚は、早々と

成長の限界に達してしまい……。

そんなある日、勇者を取り巻く重大な出来事により、僚は勇者たちの元から排除され全てを失ってしまいます。ところが、その事件をきっかけに僚の秘められた能力が開花、比類なきチートを手に入れた、戸惑いながらも生き延びる為、人助けの為に無双します。やがて気が付けば、美少女系ヒロインさんたちに囲まれハーレム状態。そのうえ勇者と並ぶ英雄認定。

そして、時に勇者と反目し、時に共闘し、この異世界を襲う大災厄に挑みます。

H30/03/03タイトル変更しました。【旧：異世界の果てで正義の味方はじめました】

## 【第1話】振り向けば異世界？

「くっそ、やられてたまるか！」

【ターゲットスコープ（光学照準システム）がストライク・アイ（統合目標指定システム）に変化しました。複数のターゲットを同時にロックオンする事が可能です】

視界の中に、軍事的な響きを持つ文字が表示される。

「え？」

またしてもスキルの変化だ。

ただ、呆けている暇は無い。

15体の魔物が牙をむき、堰を切って襲い掛かって来る。

【ストライク・アイ、起動】

視界に映る全ての魔物達に赤いマーカが表示される。

【ターゲットロックオン、マルチブロー（同時複数発射）での魔法

発動可】

迷っている場合でも無い。

シリューは即座に魔法を発動させた。

「いっけえええ！ ホーミングアロー！！」

シリューの頭上に15の光が輝く。

「ファイアー！！」

一斉に放たれた魔法の鏃がミサイルの様な軌跡を描き、それぞれ捉えた獲物をほぼ同時に屠ってゆく。

そして静寂。

「……ここまで来ると、もう戦闘機かイージス艦ってとこだな……俺ってホントに人間？ だよな……」

シリューは、自分でも信じられない光景に、茫然と佇むしかなかった。

「ご主人さまああ」

透き通る様な碧の髪を風に揺らし、身長20cmほどの美しいピクシーが、透明の羽をばたばたと羽ばたかせシリューの目の前に飛んだ。

随分と興奮している様子だ。

「すごいのっ、すごいの、ご主人さまあ！こんな初めてえ！」

「うん、ヒスイ。誤解を与える言い方はやめようか。あと、ご主人様呼びも」

「ダメなの、ご主人さまは、ヒスイのご主人さまなの、です！」

シリユーは大きな溜息を零しゆっくりと顔を上げた。

「……なんだろう、この状況……」

見上げた先には、この世界に召喚された日と同じ、紺碧の空が広がっていた。

その日。

ふと 気がつくと、いつもの交差点だった。

もう、半年も通っていなかった、半年前までは毎日通っていた道。

いつもの交差点で、いつもの様に待っていてくれた、幼馴染の少女。

6歳の時に両親を亡くし、養護施設にやって来た美亜。

産まれてすぐに捨てられ、養護施設で家族を知らずに育った明日見 僚にとつて、彼女は世界で最も大切な存在だった。

17歳で一つ年上だった美亜は今年の春、18歳の誕生日を迎える事なくたった一人で逝ってしまった。

それから半年以上が過ぎた今でも僚は現実を受け入れる事が出来ず、だから意識してこの道を通らなかつた。

それなのに。

今日は何故か考え事に気をとられ、無意識の内にも美亜と待ち合わせた、この交差点に来ていた。

交差点には信号待ちの学生たちがいて、楽しそうにお喋りをしている。

「美亜と同じ制服か…」

その四人のグループは美亜の通っていた、この近くにある県内でも有名な進学校の生徒らしかった。

背の高い男子一人にあとは女子が3人、そしてその一番後ろに立っている女子生徒に目をやった時、

「美亜？」

僚は足を止め、思わずその名を口にしてしまった。

勿論、そんな事があるはずがないのは分かっていた。

分かっただけに余りにもその後ろ姿が似ていたのだ。

「ん？」

はつきりと聞こえる程の声では無かったはずだが、その女子生徒は振り返り僚の顔を一瞬いぶかしげな表情を浮かべて見つめた。

「……いま……？」

“なんて言ったの？” 女子生徒はそう言おうとしたのだろう、そこにはすでに疑るような表情は無かった。

よく見れば顔が似ているわけでは無い。だが、どこことなく雰囲気  
が美亜に似ていた。

「ごめん！人違いだった」

僚は咄嗟に謝って、相手の言葉を遮った。

「何？ナンパ？」

「へえこんな所で」

前にいる3人が振り返り、少しからかう様に笑った。

「違うんだ、ホントごめん！」



別に逃げる必要も無かったのだが、気不味さに耐えきれず僚は今来た道を駆け出した。

そして、丁度5歩目を踏み出した時。

「うわっ」

周りの一切の音が消えた。

それだけではない、身体が宙に浮かんだまま固定された様に動かなくなり、周囲一帯が停止していた。

自分の思考だけが進み、全てが時を止めている。

「なんだ、これ……」

その直後、目を開けて居られない程の光に包まれる。

いや、包まれるというより投げ出されるといった感覚だろうか。

「うっ」

熱くも冷たくも無い、が、目を閉じていても身体全体で感じる、息が詰まる程の光の圧力。

堕ちているのか昇っているのかさえ分からない浮遊感。

「くっそ、どうなってるんだ」

僚は、唸る様に声をあげる。

そして、身体に感じていた圧力が唐突に消える。それと同時に浮遊感も無くなり、身体を支えきれずに冷たい床に尻餅をついた。

「冷たい？ ……」

今は10月、夕方とはいえアスファルトは日中の日の光で温められ、かなりの温度になっているはずだ。

僚はゆっくりと目を開き床を見た。

「大理石？」

白く艶のある床材は、いつか行った美術館のものとそっくりだった。

周りに目をやると、そこはかなりの広さがあるホールの様な造りで、壁も床も同じ石材が使われているようだった。

少し薄暗いのは、目が慣れていないせいでもあるだろう。

「ようこそおいで下さいました」

透き通る様な女性の声が背中の方から響いた。

「召喚に応じて頂きありがとうございます、勇者様、従士様」

勇者？召喚？。気になるワードが聞こえ僚は片膝立ちで振り返った。そしてすぐにその女性の言葉が、自分に向けられたものでは無

いと気付いた。

僚がいる場所から5m程の所に、スポットライトにでも照らされたかの様に4人の男女がこちらに背を向けて立っていたのだ。4人共制服姿で背の高い男子が1人に女子が3人、先ほど交差点にいたグループのようだ。

よく見ると彼らの足元には、円形の紋様が金色で描かれており淡い光を放っている。

「これって……」

“ 異世界召喚 ”

成績は常にトップで本を読むのが好きだった森崎美亜が、頻繁に貸してくれた彼女お薦めの本。その本の内容の多くが所謂異世界召喚ものだった。

「まさか……本当に？」

チートな能力をもった勇者の冒険に、異世界への召喚や転生。それらは全て本の中の物語であり、現実を忘れ、ひと時の間主人公になりきり夢の世界を楽しむ。

そして本を読み終えれば、また現実へと戻る。

実際であれば面白いだろうとは思いますが、それはあくまでも創造の産物であり、現実を起こりえるはずはない。

そつ、起るはずがない……。

今日まで、いや今この時まで僚はそつ思っていた。

【第2話】えっ？ 4人じゃなくて、5人？

白い大理石の床に描かれた、金の魔法陣から淡い光が立ち昇る。

その神々しい光は一気に強さを増し、家一軒がまるごと入るほどの広さがあるホールを明るく照らす。

「成功……です」

パーティーユはその美しい顔を僅かに歪めよろめいた。

勇者召喚の儀。

それは人並み外れた魔力を誇る彼女にあっても、そのほとんどを使い果たしてしまう程の術であった。

「姫様！」

後ろに控えた4人の女官と、護衛とおぼしき男2人が、慌ててパーティーユを支えようと手を伸ばすが、彼女は気丈にも差し伸べられたその手を制した。

「大丈夫です」

碧く煌く腰にまで届く髪が魔法陣から溢れる光に揺れる。

髪と同じ色の丸く大きな瞳を見開き、パーティーユは目の前の魔法陣をまっすぐに見つめた。

立ち昇る光の中に、ぼんやりと影が浮かぶ。

影は徐々に輪郭を表し、ゆっくりと減衰してゆく光とは逆にやがてはつきりと人の形をとる。

そして立ち昇る光が完全に消えた時、魔法陣の上には4人の男女が立っていた。

「な、何だっ」

4人の中でただ1人の男である少年が、目の前に立つ人影に気が付き咄嗟に3人の少女達を庇うように前に出た。

「ちょっと、なに此処？」

緩くウェーブのかかった髪を短く纏めた少女が、その勝気な瞳に不安げな表情を浮かべながらも、少年の斜め横に立ち両拳を握り半身の構えをとる。

「恵梨香ちゃん、私たち交差点にいたよねえ」

その2人の後ろで、肩にかかる髪をかきあげながら、少し垂れ目気味の少女がおっとりとした声で呟いた。

「この状況でも、マイペース……ですか。流石ほのかさんですね」

切れ長の目を細め、長身でポニーテールの少女が半ば呆れた様に、

隣りに立つほのかの顔見る。

「直斗、どうなってんのこれ」

「俺にも分からないよ、有紀」

直斗は空手の構えをとる有紀をちらりと見やり、正面に立った者達に向き直る。

パティールは警戒心をあらわにする直人達に向け、ドレスの裾を両手で摘み、にっこりと微笑んでお辞儀をした。

「皆様、ようこそ……」

「姫様、言葉が」

「あ、そ、そうでした」

害意が無いことを示すため挨拶を交わそうとしたパティールだが、女官の1人に声をかけられ、そのままでは言葉が通じない事を思い出した。

「例の物を」

パティールの指示に、1人の女官が銀製の箱を両手で持ち、直人達の前にゆっくりとした所作で進み出た。

「指輪？」

直斗が捧げる様に差し出された箱の中を確認すると、そこには4

つの指輪が並んでいた。

訝し気に箱の中を覗き込む直斗に、パーティーユは身振り手振りでそれをはめる様促す。

「これを付ければいいのか？」

「直斗……」

心配そうに見つめてくる有希の声に、伸ばした手を一瞬止めた直斗は目を閉じ、大きく深呼吸をした後。

「迷ってても仕方ないか」

指輪の1つを取り左の中指にはめた。

「言葉が……分かりますか？」

「え？日本語……、ってこの指輪が翻訳してるのか？」

今まで何を喋っているのか全く分からなかった相手の言葉が、いきなり日本語で聞こえて来た事に直斗は驚き、付けた指輪を掌を返しながらじっくり観察した。

振り向くと3人も同じように、目を丸くして指輪を見つめている。

「改めてご挨拶を。私はパーティーユ・エメラーダ・エルレイン。勇者様、従士様方、ようこそ我がエルレイン王国へ。我々はあなた方4人を歓迎いたします」



パーティーユは優雅な所作でお辞儀をした。

「勇者？一体どういう……」

「詳しいご説明させて頂きます。ですが場所を変えましょう、どうぞ……」

その時。

「あの……」

「え？」

パーティーユの言葉を遮る声が聞こえた。

「4人じゃなくて、5人みたいなんですけど」

全員が一斉に声のした方に顔を向けた。

直斗たち4人の後ろ、少し離れた所に確かにもう1人。

「え？」

パーティーユは大きく目を見開いて、もう一度その声の主を見た。

「ええええつ？」

それは、想定外の5人目の召喚者だった。

その後、落ち着きを取り戻したパーティーユによって、僚たち5人は召喚の間とは別の部屋へと案内された。

「これは賢者の石板と言って、自分のステータスを開示する事ができます」

パーティーユは、テーブルに置かれた石板を手で指し示した。

それはA3サイズより少し小さい大きさで、石で出来ているとは思えないくらい美しい艶があり、全体が黒く輝いていた。

「なんか、タブレットみたいだな……」

直斗の漏らした感想は、それほどの外れでは無かった。

「この石板に手をかざしてみてください」

パーティーユに促されて、直斗が石板に手をかざした。

“ 日向 直斗 ”

称号 勇者 世界に勇気を与える者 魔法剣士

年齢 18歳

魔力 1500

魔力量 4770

固有スキル バーニング：味方の全ステータスを一定時間5〜10倍に上げる

スキル

魔法：火、水、風、土、雷、無、空間、光

属性攻撃：火、水、風、雷、光

剣術、槍術、聖剣技

身体能力補正

アビリティ：魔力、霸力、理力

「す、素晴らしい能力です……文献で見ましたが、実際に目にする……」

パーティーは石板に映し出された直斗のステータスに、驚きを通り越し茫然となる。

「やっぱり直斗が勇者かあ、ま、そうだよな。じゃ次はあたしね」

“ 高科 有希 ”

称号 従士 勇者と共に在る者 闘士

年齢 18歳

魔力 880

魔力量 3010  
固有スキル バースト：敵一体の魔法効果を無効化  
スキル  
属性攻撃：火、風、土  
拳闘術、棒術、？術  
身体能力補正  
アビリティ： 魔力、霸力

「なんか、直斗に比べるとしょぼいなあ」

「いえ、そんな事は有りませんよ。現在この国で最も高い魔力を持つ者でさえ160なのですから。それにあくまでも初期値です、成長すれば更に増えるのですから」

感嘆の声をあげるパーティユに、有紀は表情を緩める。

「次は、わたしですね」

“ 穂積 恵梨香 “

称号 従士 勇者と共に在る者 弓術士  
年齢 17歳  
魔力 1050  
魔力量 3000  
固有スキル バスター：敵一体の攻撃力、防御力を下げる  
スキル

属性攻撃：風、水、火  
弓術、短剣術  
アビリティ：魔力、霸力

「へえー、恵梨香は弓道部だから弓術士なんだ」

有希が横から石板を覗き込み、自分よりも背が高い恵梨香の顔を見上げた。

「有希さんは空手部だから闘士で拳闘術なんですね」

「俺は野球部だから、剣士とは関係ないけど」

2人の会話に直斗が首を捻る。剣と野球では共通点など無いように見えるからだ。

「あ、でも直斗の場合バット振り回してるじゃん」

「い、いや、振り回してはいないけど……」

「直斗君、アブナイ人みたいだねえ」

ほのかが全く悪びた様子もなくなっことこりと微笑む。

「ほのか、なんか違うぞ」

彼らの後ろで聞いていた僚も思わず噴き出した。と同時に微妙な違和感を覚えて眉をひそめる。

「じゃあ、次は私がいくね」

“ 葉月 ほのか ”

称号 従士 勇者と共に在る者 魔導士

年齢 18歳

魔力 1800

魔力量 5820

固有スキル バリア 任意の味方に一定時間、物理・魔法による攻撃を完全に無効化する障壁を展開する

スキル

魔法：火、水、風、土、雷、無、空間

身体能力補正

アビリティ：魔力、理力

「アビリティっていうのはどういう意味なんですか？」

僚はそれまで誰も言わなかった疑問を口にした。

「あ、それ。あたしも聞こうと思ってたんだよね」

有希がそう言うと、残りの3人を大きく頷いた。

「アビリティは、そうですね行使できる能力といったところです。魔力は魔法や属性を武器にのせる力、覇力は肉体を強化したり身に

纏わせる事で、攻撃 力を大幅に上げる力で闘気とも呼ばれます」

「理力は？」

「少し難しいのですが、物理的に作用する力です。例えば物に手を触れず動かしたり、目に見えない盾を出現させる事が出来ます」

パティールはそこで一旦区切り、皆の顔を見渡した。5人は頷いて理解した事を伝える。

「ただ、それぞれの力を同時に使う事は出来ませんので、注意して下さいね」

と、そこまでは良かった。

問題は、僚が石板に手をかざした時。

“ 明日見 僚 ”

称号 ？？？ 想定外の異世界召喚者 \*\*\*

年齢 17歳

魔力 0

魔力量 0

固有スキル

スキル

身体能力補正

アビリティ:

「あーなんか、ツッコミどころ満載って言うか、色々問題ありって言うか……」

僚は石板に表示された自分のステータスに、思わずツッコミを入れたくなった。前の4人と比べてあまりにも酷い。が、ここまで酷いと逆に冷静になるものだ。

「名前があるだけでもマシか」

明日見僚という名前は親が付けたものではなく、児童養護施設の経営者が後見人となって付けてくれた名前だった。

だからひょっとしたら名前が表示されないのではと、もしくは本当の親が付けた名前が表示されるかもしれないと思っていた。

特に気に入りも嫌いもしていない名前だったが、普通に表示された事になぜか安心してている自分が可笑しかった。

「そ、そんな……あり得ませんっ、魔力0なんて」

代わりに焦った声をあげたのはパティークだった。

「この世界に生きる者は全て、魔力を持っているのです、それなのにっ」



「ま、俺この世界の人間じゃないし、大丈夫なんじゃないですか」

僚は極めて冷静に対応した。昔からあまりものに動じず、冷静に状況分析を行う性格なのだ。

「あいつ、ご自分のステータスなのですよ」

パーティーユの真剣な慌てぶりと表情を見て、僚は思わず口元を緩めた。この人は本気で心配してくれているのだろう。

「ステータスといっても馴染がないですから。それに他にも、称号が？とか\*とか」

「それに固有スキルとアビリティがーだしね」

僚の右から覗き込んだ有希が腕を組み首を傾げる。

「でも皆には無いギフト生々流転と覚醒つてのがある」

直斗は石板に間隔を開けて表示された文字を指さした。

「ギフト、というものも初めて目にしました、一体どういう能力なのか……」

パーティーユは眉根を寄せ真剣な顔で考えこむ。

「生々流転……世の中の全ての物は次々と生まれ、時間とともに常に変化し続ける……という意味だったはずですよ」

「さっすが恵梨香、よく知ってたねそんな言葉」

恵梨香の淀みない説明を聞いて、有希は目を丸くして少し大きさに驚いて見せた。

「もしかするとこの生々流転というギフトが、ステータスに影響しているのかもしれませんが。明日見様だけが指輪無しで言葉が通じるように」

パーティーユはまだ心配そうにしていたが、僚はそれほど気にしていなかった。

身体や精神に影響が無ければ、心配する必要は無いだろう、そう思っていた。

### 【第3話】協力しよう

「……で、どう思う？」

直斗はゆったりとしたソファーに腰掛け、他の4人に問いかけた。

ここは召喚の間から程近い、応接室の1つ。パティークから一通り状況の説明を受けた後、5人だけで相談したいと彼女には席を外してもらった。

「なんか信じられないけど……現実なのよね」

有希は顔を上げずじっと自分の手にある指輪を見つめていた。

ひとつ。この世界には魔力が存在し、その源となるマナで満たされている。

ひとつ。この世界に存在する無機物以外の全ては魔力を内包している。

ひとつ。この世界の生物は活動する為に魔力を使い、マナを消費する。消費されたマナは魔素（瘴気）として排出され、その魔素が魔物を生む要因となる。

そして数百年に一度、世界中を覆いつくす程の魔素が一つに集まり、この世界を滅ぼしてしまう規模の大災厄が発生する。

「そしてその大災厄に対抗する手段が、異世界からの勇者召喚……  
ですね」

恵梨香の言葉に全員が頷く。

「でも、俺の場合は……どうなのかな」

僚の疑問はもつともだった。

自分のステータスに勇者や従士の称号も、おおよそ戦闘に必要と思われるスキルも全く無かった事から、僚はこの世界での自分の立ち位置を把握出来ずにいた。大災厄に対処する力があるのかと。

「大丈夫さ、皆で力を合わせれば何とかなるって、ええと、明日見……君だったっけ。俺は日向直斗、聖稜高校の3年だ、よろしくな」

先ほどはステータスを覗き込む形で名前を見ただけだ、お互いきちんと自己紹介くらいはしておいた方がいいだろう。僚には、直斗のそうした配慮を拒む理由などももちろん無かった。

「明日見僚です。江南工業の2年です」

「へえー、いつこ下だったんだ。落ち着いてるから同い年か大学生かと思っちゃった。あたしは高科有希、よろしくね」

有希は顔を僚の方に向けたまま、直斗を指さした。

「直斗はさ、こう見えてこの間まで野球部のキャプテンだったの、だからまあ割と頼りになるよ。で、あたしも空手部の主将だから、かなり頼りになると思うよ」

有希は直斗に向けていた右手で、自分の胸をぽんつと叩いた。

「俺は割と、でお前はかなり、かよ」

「間違ってないでしょ」

そう言って有希はいたずらっぽく口元を緩めた。

「明日見君って、部活やってるの?」

「一応陸上部で短距離やってます」

「陸上かあ、俺も足にはそこそこ自信あるんだけど。因みに1000m何秒?」

直斗が興味深々といった様子で聞いた。というのも聖稜高校には陸上部が無かったからだ。

「ええと、ベストは10秒98ですけど……」

「はやつ!?!」

直斗と有希の声が被る。

「日向さん、今度一緒に走ってみたらどうですか」

「い、いや、遠慮しとくわ」

恵梨香はただ野球部と陸上部の対決を見てみたいだけだったのだが、直斗は何度も首を振り即断で否定した。

恵梨香は右手を口元に当ててくすりと笑った。

意外にも直斗はイジラレキャラらしい。

「初めまして、わたしは穂積恵梨香といます。一応弓道部の部長でした。宜しくお願ひしますね」

「あ、はい」

恵梨香は切れ長の瞳でまっすぐに僚を見つめた。穏やかな表情だが、その視線には射貫く様な迫力がある。

「恵梨香ちゃんは誰にでも敬語なんだよねえ」

おっとりとした話し方で、ほのかは丸く黒目がちな瞳を細める。

「私は葉月ほのか、えーと、吹奏楽でフルートをやってるの。よろしくね明日見くん」

交差点で美亜と見間違えた少女。もう一度見直してもやはり顔が似ているわけでは無いが、雰囲気はそっくりだ。

僚は咄嗟に言葉が出ずに、目を反らし頷いた。

「明日見くん、照れ屋さんなのかな？」

僚の仕草を見てそう感じたのだろう。

「すみません、そう……かも」

実際、女の子と話すことにあまり慣れていない。美亜とは普通に話ができるのだが、ほかの女の子だと緊張してしまいうまく言葉が出ないのだ。

そのせいで、クラスの数少ない女子生徒からも、ぶっきらぼうとか無愛想とか言われていたが、ほかはいい方に捉えてくれたようだ。

「ねえ明日見くん。さっきの交差点で……たしか、みあつて言ったよね」

ほかの問いかけに、全員の視線が僚に集まる。

「あの、それは……」

小さく呟いただけのはずだと思っていたが、ほかには聞こえていたらしい。

「……知り合いによく似てて、顔が、じゃなくて後ろ姿とか、雰囲気とか」

「それって、森崎美亜ちゃんの事？」

僚は目を丸くして顔を上げた。まさか森崎美亜の名前がほかから出てくるとは思わなかったからだ。

「美亜を知ってるんですか？」

よく考えてみれば、美亜も直斗やほのか達と同じ、聖稜高校の生徒だったのだ。

彼らが知っていても不思議では無い。

「私たち、仲良かったんだよ。それにね、今みたいに雰囲気似てるって、よく言われてたの」

ほのかは首をちょこんと傾げて微笑んだ。

「じゃあ、美亜の言ってた彼氏って、明日見君の事だったんだ……」

何処か遠くを見るような目で有希は呟いた。

「美亜さん、最後まで名前は教えてくれませんでしたけどね」

「誕生日に貰ったストラップ、嬉しそうに見せてくれた事あったな……」

「そう、それに……」

僚は4人の話を聞きながら、そっと目を閉じてそのストラップを渡した時の事を思い出していた。

新聞配達バイトで買った、初めてのそして最後の誕生日プレゼント



ント。

大した金額では無かったが、美亜は弾けるような笑顔で受け取ってくれた。

僚の口元がふつと緩む。

「明日見くん？……あ、ごめんね辛い事思い出させちゃった？」

下を向いた僚の表情は、向かいに座るほのかには見えなかったのだろう。その声音にはいたわる様な優しさがあった。

ほのかだけでは無い、他の3人の話し方からも本当に仲の良い友人達だった事が伺えた。

「そうじゃなくて……、美亜の事を大事に思ってくれて、覚えててくれる人が俺以外にもちゃんとしたんだって思ったら、なんか嬉しくて……」

死んでしまったとしても、誰かが忘れずにいれば、その人の存在が消える事はない。僚は今ようやくその言葉の意味と、そして美亜の死を受け入れる事が出来た様な気がした。

「大丈夫、誰も忘れてないさ」

隣のすわる直斗が僚の肩に手を置く。僚が顔を上げると、直斗は笑顔で頷いた。

「……ありがとう」

僚の素直な気持ちだった。

「う、あたし泣きそう」

有希はそう言いながら、すでに溢れんばかりの涙をためている。

「有希ちゃん、気が強いけど泣き虫だもんねえ」

「ほのかさん、そこは涙もろいと言ってあげましょうね」

「どっちも変わんない！」

涙を溢れさせながら笑う有希と、それにつられて笑う直斗、恵梨香、ほのかの3人。

その様子を見て、僚の顔にも笑みが浮かんだ。

「今回の事は、森崎が引き合わせてくれたのかもな……」

直斗はソファーからゆっくりと腰を上げた。

「うん、あたしもそう思う」

涙を拭いた有希が、直斗につづいて立ち上がる。

「明日見さんとわたし達が一緒に召喚されたのは、決して偶然では無いと思います」

「きつと私達だけじゃなくて、明日見くんも必要だったんだよ」

恵梨香とほのかが立ち上がって僚を見つめ、頷いた。

直斗は有希達3人を見渡した後、困惑した様子で座ったままの僚に右手を差し出し。

「だから皆で協力しようぜ。そして皆で大災厄ってやつを乗り切って、皆で元の世界に戻ろう。俺たち5人で……な」

「……はい」

僚は立ち上がり直斗の手を取った。

## 【第4話】 オンユアマーク！

「明日見様？」

それは、召喚の儀から1週間程たった夜の事だった。僚たち5人はこの世界に関する講義を何度か受け、一般的な常識や知識、文化といったものをある程度知る事が出来た。

例えば時間や暦。正確な時計などを作れる文明レベルには無いが、元の世界とほぼ同じで1日が約24時間、1年が365日と考えて良かった。

距離の単位はKm。これは過去に召喚された勇者の1人が伝えたものらしい。

一通りの知識が身についたところで、いよいよ戦闘の為の訓練が始まった数日後の事。

その日の夜、なんとなく目が冴えてしまったパーティーユは、少し夜風に当たろうと宮廷の庭へ足を向けていた。そこで、庭の反対側を通り1人訓練場へ向かう、僚を見つけたのだった。

声をかけるべきか迷ったが、結局パーティーユはこっそりについて行く事にした。

「覗きのようで、少し気が引けますね……」

そんな事に気が付いていない僚は、バッグの中からスパイクを取り出した。（高校2年の僚は現役だった為、部活用のウェアやスパ

イクの一式を持っていた)

100mの距離は、昼間のうちに道具を借りて測っておいた。  
決めておいたスタートラインの手前に立つ。  
深く深呼吸。一回、もう一回。  
心の中で合図の声。

“ On your mark ”

腰を落としてラインに手を添え、足の間隔を最もしっくりくる位置へ。

“ SET ”

一呼吸置き、そして……。

自分にだけ聞こえるピストルの音。

全身が爆発的に躍動し、その一瞬世界が弾ける。

“ 足を上げすぎるな ”、“ 前傾姿勢 ”

…… 1 …… 2。頭の中でカウントをとる。

“ 身体を起こせ ”、“ 加速、加速 ” 風がうなりを上げる。

…… 3 …… 4。

“ 足が流れないように、接地時間を短く ” 今までに感じた事  
の無いスピードで景色が流れる。身体の重さを感じない、まるで空

を飛ぶような感覚。

……5……6。

思い切りゴールへ飛び込む。

「6秒ちょい……」

僚は信じられないタイムに声を出して笑った。世界記録を軽く、大幅に上回ったのだ、もう笑うしか無かった。

「10秒9だつて切った事ないのに……これタータンでスタブロなら5秒切るんじゃないか……」

昼間の訓練で、身体能力が強化されているのは分かっではいた。直斗と2人剣の扱い方を教わったのだが、鉄製の剣がまるでただの定規の様に軽いのだ。

また、個人の得意分野については更に上積みされているとの事だった。直斗はパワーとスタミナ、僚はスピードと俊敏性という様に。

「このまま元の世界に戻れば、金メダル確定だな……」

僚は息を整え、スタートラインを振り返った。

本当は剣の練習をするつもりでここへ来たのだ。

実際、訓練でも剣術スキルを持つ直斗と、何のスキルも持たない僚では、僅かな時間の訓練でも、大きく差が出てしまった。

足を引っ張る訳にはいかない……そんな思いでここへ来たのだが

……。

「剣は……明日からでいいか。今日はとにかく思いっきり走ろう」  
僚は夜空を見上げた。

きれいな月が銀に輝いている。

「こつちにも月があるんだな」

月明りに照らされる中を走るのもいい気分だ。

そして訓練場の片隅の木のかげで、そっと見つめる1人のギャラ  
リーがいる事に、僚は最後まで気付かなかった。

「……美しい……」

それは、早いでもなく、遅いでもなく、パティエユの口から自然  
にこぼれた言葉だった。

兵士や騎士達が走る姿を見た事は勿論何度もある。が、たった今  
目にしたのはそのどれとも違う、ただ走る為だけに、全ての無駄を  
排除した究極の姿がそこにあった。

まるで風さえ追い抜き、彼以外の時間が止まったかの様なスピー  
ド。

「はあ……」

パティエユは無意識のうちに溜息を漏らしていた。

目が離せない。

だが、声を掛けて邪魔をしてはならない。そんな気がした。

結局僚が練習を終えるまで、パーティーユは静かなギャラリーでいた。

「さあ、参られよ」

訓練用の木剣を正眼に構えた僚の正面で、レスターは構えをとる事も無いままで、開始の声を掛けた。

レスターは僚たちの剣術指南役を担当する近衛騎士で、エルレイン王国でも5本の指に入る剣士である。

背が高くがっしりとした体形で、短く刈られた栗色の髪に顎鬚を蓄え、一見すると厳つい感じの男だが、いつもまぶしそうに細められた目は微笑んでいる様子にも見え、実際極めて温厚な人物であった。

本人曰く、“こうして笑った様にしていると、子供に泣かされてしまう”のだそうだ。

しかし今は双眼を開き、温厚さは影を潜める。

「いきますー！」

僚は掛け声と共に間合いを詰め、レスターの左肩を目掛け木剣を



振り下ろす。

レスターは木剣を持った右手をだらりと垂らした状態だ。彼の剣からは、そこが最も遠い距離である事を見越しての一手だった。

だがレスターは、その攻撃を体捌きで左に躲すと同時に、がら空きになった僚の右脇腹目掛けて振り上げた。まるで最初から僚の動きを知っていたかのように。

僚は剣が当たる一瞬前、左に跳んでそれを辛うじて躲し、振り向きざま横薙ぎに振りぬく。

レスターは一步身を引き、事も無げに躲す。

直ぐに切り返し右から左へ。それも躲される。構わず連撃。

下から切り上げ。

上から袈裟懸け。

右、と見せかけフェイント。

だがレスターは、それをことごとく躲して見せる。

そう、一度も剣で受ける事無く、体捌きだけで僚の攻撃を躲しているのだ。

そして攻撃の後、大きく出来た隙に対して繰り出される突き。唸りを上げ切っ先が迫る。

“ まずい？ ”

僚は後ろに転がり、何とかそれを躲す。

“ 追撃が来る ”

僚は立ち上がりもせず後ろに跳び、大きく距離を取った。

「参ったな……」

これまで何度も訓練を続けてきたが、未だにレスターから一本取る事はおろか、彼に剣で受けさせる事さえ出来なかった。

一方、直斗は既にレスターとほぼ互角に対峙し、剣に属性をのせた技を幾つも習得していた。

称号とスキルを持つ直斗たちとの、圧倒的な差。

それは絶望的とも思える、乗り越える事の出来ない大きな壁。それでも僚はあきらめたく無かった。

……何かあるはず……。

「そつだ……」

一瞬の思考の後、僚はレスターをキツと睨み無言のまま。

“ SET ”

全身のパワーを両脚に掛け、一気に爆発させる。

土煙が上がり、瞬く間に距離が詰まる。

一直線に迫る僚の速さに、レスターは顔を歪める。右か左か、考えている暇は無い。

次の瞬間、僚の視線が僅かに右に動くのをレスターは見逃さなか

った。

“ 右か！ ”

僚の身体が右に揺れる。

“ 来る ”

レスターは左へ。

だが。

「 なにつ？ 」

視界から僚が消えた。

ガキイツ！！

木剣同士がぶつかる激しい音。

レスターが反応出来たのは、ほとんど偶然、いや本能と言えるだろう。幾多の実戦経験が可能にした、無意識のうちに繰り出された反射的な対応。

「 ……ダメか、いけると思ったんだけど…… 」

僚は真つ二つに折れた木剣を見つめ肩を落とした。

「 いえ、そうでもありませんぞ 」

振り向くとレスターがゆっくりと近づいて来ていた。  
もう訓練は終了、そんな表情だ。

「御覧なさい」

レスターは口元を緩め、右手に持った自分の木剣を見せた。

「あ……」

それは僚の物と同じく、真ん中からポツキリと折れていた。

「初めて私に剣で受けさせましたな……」

だが僚の表情は浮かない。

「でも……一本取る事は出来ませんでした」

レスターの剣を折ったとしても、自分の剣も折れたのだ、それに勝てたわけでも無い。手放して喜ぶ気分にはなれなかった。

「もしや、日向殿と御自分を比べておられるのですかな」

完全に見透かされていた。

「確かに日向殿は剣士として、魔法戦士としての才がおりだ。それは途方もない大きなものでしょう」

レスターは僚の肩にばん、と手を置いた。

「ですが、人は一人ひとり違うもの。明日見殿は明日見殿の高みを

目指されればよろしいではありませんか」

僚は顔を上げレスターの目を見た。

「俺は俺の高みを……」

「ええ、先程の攻撃は見事でした、一瞬目の前から消えましたからな。どうやら明日見殿は打ち合うよりも距離をとり、スピードを生かした動きで翻弄する戦い方が向いておられるようだ」

僚は、下を向いて考えこむ。

「スピードを生かす……」

僚の中で、何かが弾けた気がした。

【第5話】お姫様は魔女？

その日の夜。

僚は昼の訓練で閃いた感覚を確かなものにしようと、いつもの様に訓練場に一人立っていた。

剣の訓練に使う、打ち込み用の立ち木が等間隔で並んでいる。一本一本の距離はおよそ5m。これは並んで稽古しても、お互いの剣がぶつかからない為の配慮らしい。

数は6本、合わせた距離は25m。

僚は右端の立ち木から、更に10m程の位置につま先で線を引く。

「こんなもんかな……」

刃引きされた剣を抜き逆手に持ちかえる。

未だぼんやりとしたイメージが頭の中にあるだけだった。

「……とにかく、やってみるか」

僚は立ち木に背を向けその場で2〜3回ジャンプした。

そして……。

矢庭に振り向き立ち木へと走り出す。

1本目を右に躲し切り返す。

速度を落とさないよう2本目を左へ。僅かに身体が流れる。

「くっ」

3本目、右へ。

4本目左。大きく膨らむ。

無理やり体勢を立て直し5本目。スピードが落ちる。

そして6本目、すり抜けざまに剣を振りぬく。

「痛っ」

タイミングが合わず、思わぬ衝撃が右手に走り剣を落としてしま  
う。

「……ま、初めはこんなもんか……」

剣を拾い一旦鞘に納める。

そのまま剣を下げた位置を眺め、暫く考える。

思っていた以上に邪魔だ……。

剣は太目のベルトに鞘を固定するようになっていて、それ程ぶれる事は無い。だが、それはあくまで戦闘時においての事で、走る場合は左手で抑える必要がある。

実際に全力で走ってみると、何度か鞘が踵にぶつかった。

それだけでは無い。靴もこちらで支給された騎士用のブーツで、これもまた走りずらかった。

「鞘をそこらに放っておくってのもなあ……」

僚の脳裏に有名な剣豪の台詞が浮かぶ。

「……ま、後で何か考えよう」

僚はもう一度剣を抜き、今度は反対の方向へ軽めに走る。

歩数を数えようとして、重要な事に気付いた。

「ハードルじゃ無いんだから、ここで歩数を合わせても意味無いな」

実戦では、敵や障害物の間隔は常に違っているだろう。ここでの練習はあくまでも切り返しのスピードだ。

「もう一回！」

折り返して徐々にスピードを上げてゆく。

それから何度も、立ち木の間をジグザグに走り抜ける動作を繰り返す。だが何かしっくりこない。

そして、思い切り蹴り足に力を籠め左に跳んだその時だった。

「うわっ」

着地したと同時に蹴りだした左足が大きく滑り、そのスピードのまま派手に転がってしまった。

「痛たた……」

受け身は取ったつもりだが、2、3回は転がったのだろう。肩と背中を地面にぶつけた様だ。



僚はゆっくりと立ち上がろうとしたが、左足首に激痛が走り身体を支えきれずに倒れこむ。

「うぐっ」

思わず呻き声が漏れる。

この痛みはかなり不味い。しかもブーツの中にどろっとした感触がある。

出血しているとすれば、解放骨折の可能性が高い。

見たくは無いが確認しないわけにもいかず、ブーツに手を掛ける。少し動かしただけで激しい痛みが全身を貫き、その度にうづくまり息を止めて耐える。

「大丈夫ですか!」

不意に背後から声が聞こえた。

僚が振り向くと、息を切らし慌てた様子で駆けて来たのはなんとパティールユだった。

「え?」

僚は予想外の人物の登場に、驚き戸惑ってしまい言葉が出てこなかった。

「動かないで、すぐ治療します」

パティールユは僚のすぐ脇にかがみ込み目を細めて頷く。

「大丈夫、これでも私治療師なのですよ」

「あ、はい……」

「生命いのちの輝きよ、かの者の傷を癒したまえ……ヒール」

パティールユが囁くような声で呪文を唱えると、かざした両手から柔らかな光が生まれ、僚の全身を包んだ。すつつ、と痛みが消えてゆく。

「治療魔法……」

ある程度の説明は受けていたが実際に見るのも、もちろん自分で体感するのも初めてだった。

「立てますか？」

パティールユは、僚の背中にそつと手をまわし優しく支えてくれた。

「ありがとうございます、あの、もう大丈夫です」

少し気恥しくなつて離れようとするが、パティールユは僚の左腕をしっかりと握りしめ、にっこりと微笑んだ。

「そちらのベンチで暫く休みましょう、ね」

身体をびつたりと寄せ、パティールユは上目遣いに僚を見つめた。

僚の左腕にふんわりと柔らかい感覚。

「あ、あの……」

「はい？」

「いえ、すみません」

パティールは気付いていない。

僚は何の疑いも無く見つめてくるパティールに対して、本当の事を口に出せなかった。

顔が火照っているのがわかる、多分真っ赤になっているはずだ。幸い月明りの下では、それをパティールに気付かれる事はなかった。

二人は寄り添いながら、訓練場の端にあるベンチへ歩いた。

「痛くありませんか？」

「もう少しゆっくり歩きましょうか？」

ベンチまでのそう長くない距離の中でも、パティールはたびたび気遣いの言葉をかけるのだが、僚の返事はその都度、いえ、はい、など素っ気ないものばかり。

「……すみません」

もう少し気の利いた事を言えないものかと、自分が情けなくなり結局出た言葉はそれだった。

二人並んでベンチに腰を下ろす。何気ない様子で、間を開けずに座ったパーティーユを見て、僚はそそくさと一人分の間隔を開けて座り直した。

「そんなに慌てなくても……」

パーティーユは右手を口元に当て、くすりと笑った。

「そ、確かに……」

僚もつられるように笑った。女の子と触れ合う機会が無かったとはいえ、あまりにも慌て過ぎて、自分で思い返しても滑稽だ。

「……でも何で王女様が、こんな所に？」

ふと思いついた疑問を口にしただけで、全く他意はなかったのだが、その言葉に今度はパーティーユが慌てる。

「あ、え？そっそれはそのっ、……た、たまたま？」

まさかの疑問形である。

パーティーユは引きつった笑顔で小首を傾げている。

「……もしかして、ずっ……」

「よ、夜風に当たろうと散歩していたのですっ、そうしたら明日見様が倒れるのが見えまして！それでこれは大変と思い駆け寄ったのですっ」

何故か慌てぶりが凄い。

「たまたま……ですか」

「たまたまです」

パーティーユはこくこくと何度も頷いた。

よく分からないがこれ以上追及しない方がよさそうだと僚は思った。

「……」

「……」

しばらく続く沈黙。

話題を変えようにも、二人とも肝心の話題が思いつかない。

「……痛みはありませんか？」

沈黙を破ったのはパーティーユだった。

「はい、もう大丈夫です。助かりました」

痛みはすっかり引いているし、触った感じも異常は無い。

これが元の世界だったら、手術してその後、何か月も治療とりハビリが続いていただろう。

これならすぐにも練習を再開出来る。

「でも、今日はもう無理をしてはダメですよ」

パーティーユは人差し指を立て、諭すような口調でじつと僚をみつめた。

その顔は完全に僚の考えを見透かしているものだ。

「な、なんで分かったんですか？」

「何となく分かりますよ、ずっと見ていたのですから」

パーティーユは朗らかに笑った。

朗らかに。

「……ずっと？」

「ええ、ずっと……と……」

パーティーユは両手で口元を隠した。が、意味は無い。

「いつからですか？」

「……多分、最初の日から……」

パーティーユはがっくりと肩を落とした。

あの夜、僚の走る姿にすっかり引き込まれてしまった。

次の日も同じ時間に僚はやって来て、訓練を始めた。そして次の日も、また次の日も。訓練の内容は違ってても、僚のそのひたむきな姿は見ていて気持ち良かった。

そして毎夜訓練場へ通うのは、パーティーユにとっても日課となっ

た。

「声を掛けてくれれば良かったのに」

僚の言葉は予想していたものとは違った。

「え？」

「あ、えっと、声を掛けてくれればって思って……」

僚の言う通り、何度か声を掛けようと思った事はあった。だがその度に思いとどまった。

邪魔しては悪い、という相手を気遣う思いと、この時間を壊したく無い、という自分の中の思いと。

“ 迷惑だと言われたら…… ”

結局、今夜まで声を掛ける事が出来なかった。

「面白くないでしょう？ 練習なんか見せても」

責めるわけでは無く、僚は不思議そうに尋ねた。

「そんな事はありません、とても素……興味深かったです……でも、迷惑でしたか？」

迷惑も何も、実際パティエーユがいる事に気付いていなかったのだ。それに見られて不味いものでもない。ここで夜訓練をしている事は誰にも話していないが、特に秘密にしたい訳でも無い。

「全然、迷惑じゃないです」

「……本当に？」

さっきまでは、自身に満ちてあれほど朗らかな表情だったのだが、今は眉をひそめ何処か不安な様子で見上げて来る。

「ホントです。でも見てて楽しいかどうかは分からないけど、今度からは声を掛けて下さい」

何気なく言っただけだったが、パティールはその一言に反応し、弾ける様な笑顔を見せた。

「また見に来てもいいのですか？」

僚は目を細め大きく頷いた。

「はい、それに今日みたいに怪我した時とか、治療してもらえればありがたいなあって」

王女に対して少し、いやかなり図々しい望みだがパティールなら、案外聞き入れてくれる気がした。

「も、勿論ですっ、任せて下さい！」

パティールはぴんつと背筋を伸ばし、右手を自分の胸に置いた。



## 【第6話】初めての实战

「いたぞ、みんな隠れる」

直斗は小さな声で、全員に身を低くするよう左手で合図した。後に続く4人が、直斗に倣って低木の陰に身を潜める。

「……あれ、ゴブリンですかね？」

直斗の隣に進んだ僚が前方の生物を見て囁く。

「わ、キモっ」

二人の後ろで、思わず声を漏らした有希は慌てて口を両手で塞ぐ。僚と直斗は人差し指を口元に当て、全く同じタイミングで振り返った。

“ 静かに…… ”

有希は口を塞いだまま、何度も頷く。

今見つかるのは避けたい。

ここにいる五人全員がそう思っていた。

この世界に召喚されて二週間。剣術や魔法の訓練を受け、戦う為の基本は習得した。そしていよいよ次のステップへ進む。

実戦訓練である。

エルレイン王国、王都の北に位置するシャルルと呼ばれるこの森は、出現する魔物もゴブリンやフォレストウルフといった低級のものも多く、駆け出しの冒険者たちにとって格好の狩場となっている。

初めて見る魔物。

直斗達は緊張の面持ちで息をひそめる。

目の前にいるのはゴブリン、身長120〜130cm程の人型の魔物だ。

皮膚は緑で張り艶が無く、真ん中に窪みのある歪な禿た頭に尖った耳と顎。顔の大きさに比べ異様な大きさの鉤鼻。真赤な目に牙の覗く口。

その姿は、元の世界では目にする事のない醜悪なものだった。

「……………どうやる？」

直斗がゴブリン達から目を離さず言った。

敵の数は5体、それぞれこん棒や、鎧の浮いた剣を手にしている。最下位にランクされているゴブリンだが、戦う術を持たない一般人にとって、出会えば命の危険のある魔物だ。

勇者といえ実戦経験の無い直斗達ならば、油断していい相手では無い。

「……………まともに行かない方がいいでしょうね」

僚が応える。

初めての戦闘で誰にも怪我を負わせたくは無い。僚は、相手との位置関係を観察しながらそう思っていた。

「穂積さんと葉月さんに先制してもらって……」

「俺と明日見と有希で接近して殲滅……」

「二人の射線を塞がない様に」

「だな」

僚と直斗が頷きあって剣を抜く。

「恵梨香、ほのか、奴らの真ん中を狙って弓と魔法をぶっ放してくれ」

「わかりました」

恵梨香が静かに矢筒から矢を取り出す。

「うん」

ほのかは囁く様な声で呪文の詠唱を始める。

「俺は左から、明日見と有希は右から頼む。タイミングを合わせてな」

「オッケー」

有希が手甲を装着した拳に力を籠める。

ゴブリン達はまだこちらに気付いていない。

「3……2……1……いくぞ！」

直斗の合図とともに恵梨香が矢を放つ。

「疾風！」

風の属性をのせた一撃。

「闘志の炎、十六夜の空に飛散せよ……フレアバレット！」

ほのかがか叫び拳大の火球が飛ぶ。

同時に直斗、僚、有希が左右から飛び出す。

一体のゴブリンの頭を恵梨香の矢が貫く。

火の魔法がもう一体の胸を穿ち燃え上がる。

「うおおおお！」

持前のスピードで先行した僚が、残りの群れに飛び込み一体を切り伏せる。

残り二体。

「こっちもいるぞー！」

直斗が叫び二体のゴブリンの意識を向けさせる。  
振り向いた一体を横薙ぎに両断する。

あと一体。

混乱し逃走を図ろうとした残り一体の腹に、有希が走りざま炎の属性を乗せた突きを叩きこむ。

吹き飛んだゴブリンはぴくりとも動かない。

終わった。

「はあはあ……」

僚、直斗、有希の三人はその場で座り込み激しく息を切らした。

「うっ」

有希が蒼白な顔で口を押え木の陰へ走っていく。

「有希ちゃん」

ほのかが、うずくまった有希のそばへ駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

恵梨香は僚たちの前に屈みこんだ。

「まだ……手が震えてる……」

「俺もです……」

僚と直斗は剣を置き、お互い震える自分の手を見つめていた。初めて生き物を殺した。

しかも魔物とはいえ人型の生き物だ。

戦闘中はそれこそ無我夢中で、ただ相手を倒す事だけしか考えていなかった。

しかし……。

手には肉と骨を断つ感触が明確に残っている。

敵を倒した高揚感と、生き物を殺した嫌悪感がないまぜになって酷く気分が悪い。

「俺も吐きそうだよ」

「……分かります……」

木の陰にうずくまり、ほのかに背中をさすってもらっている有希。剣を使う僚や直斗と違い、有希はミスリル製とはいえ手甲を付けただけの拳で直接殴ったのだ。

「大丈夫かな、高科さん」

僚は有希をちらりと見たが、すぐに視線を戻した。

あまり見ない方がいい、有希も見られたくは無いだろう、そう思っただけの判断だった。

「大丈夫、何日が夢でうなされるぐらいだよ」

「……それって俺たちも、でしょ」

僚が口元を緩め、直斗が頷く。二人は声を殺して笑った。

「本当に大丈夫ですか？ 青い顔をしてたと思ったら、いきなり笑い出して……」

恵梨香は眉をひそめて首を傾げた。

「俺たちはもう大丈夫だ、それより恵梨香は平気か？ あと、ほのかも……」

直斗は目の前の恵梨香と、有希の隣にしゃがんだほのかを交互に見た。

「わたしたちは……平気です。日向さんたちと違って直接……」

「ああ、距離があったからな」

言い淀んだ恵梨香をフォローするように、直斗が応える。

実際直斗の言った通り、弓と魔法で離れた距離からの攻撃だったため、あまり実感が湧かなかったのだ。

「なかなか、見事な戦いぶりでした」

低木を掻き分けて現れたのは、僚たちの剣術指南役のレスターだった。

レスターは他の教官役の者たちと共に、一定の距離を保ちながら付いて来ていたのだ。

勿論、直斗たちもその事を知っていた。

「冷静な判断、的確な作戦、さらに全ての敵をそれぞれ一撃の下に屠る……初めての戦闘でこれ程とは……いや、たいしたものです」

レスターは、細い目を更に細め何度も頷く。

多少心に引つかかるものは残った。が、誰も怪我をしなかったのだ、及第点以上と言っていていいのだろう。

「我々はまた、少し離れた所で付いて行きます、では」

レスターは軽くお辞儀をして、現れた時と同じく低木を掻き分け去って行った。

「じゃあ俺たちも行くか」

胃の中をすっかり空にした有希が戻った後、僚たちは再び森の中へと進んだ。

途中、何度か魔物の群れに遭遇したが、どれも危なげなく対処出来た。

ゴブリン以外にも、湿気の多い場所に生息するスライム（僚たちが想像していたのは、ぷよぷよの丸いやつだが、実際は巨大なアメーバといったところ）。

アルミラージと呼ばれる一角ウサギ。これは中型犬ほどの大きさに額に長く尖った角があり、ウサギと名が付いているが、肉食で非



常に獰猛な魔物である。

ただし、二種ともゴブリンと同じく最下級のランクで、襲撃方法も単純なため戦うというよりも狩りに近かった。

そう考えると、魔物を殺す、という嫌悪感も徐々に薄れて軽くなり、初めの頃よりは冷静に戦えるようになった。

ただ、一度ゴブリンに不意を衝かれた時、有希は焦ってしまい咄嗟に動くことが出来なかった。それは恵梨香とほのかも同じで矢を番える暇も、呪文を詠唱する暇も無い状況に陥ってしまった。

この時は、ほぼ条件反射で動いた僚が有希を庇い、僚の作った僅かな好機をついた直斗が、襲ってきた二体のゴブリンを倒し事なきを得た。

「さっきはありがとう」

森の少し開けた場所で昼食をとり終え、車座に雑談を交わしている時、有希が僚の隣に座りぺこりと頭を下げた。

「あ、はい」

勝気な見た目と違い、有希は意外に素直だったり涙脆かったりする。

「怪我……大丈夫だった？」

有希を庇った時、僚は左腕に傷を負った。大して深い傷でもなく、随行していた治療師からすぐに治療を受けたので、心配するほど

の出血も無かった。

「大丈夫、気にしないで」

僚は傷のあった左腕を軽く叩いて見せた。

「袖は破れたままだが、生活魔法（洗浄）によって血の跡もきれいに洗い流されていた。」

「うん、ホントありがとう」

あれからずっと俯いていた有希の顔に、やっと笑顔が浮かんだ。

「明日見君って、けっこうたらしだったりする？」

有希が横目で見る。

「え？ なんですか？」

僚は意味が分からず聞き返した。

「ぶっ」

直斗が嘔き出すと、それにつられて恵梨香とほのかもくすりと笑った。

「明日見くん、自覚ないんだねえ」

「咄嗟の判断力はずば抜けているみたいですけど……」

僚は眉を細め首を捻る。

「……咄嗟の判断力……ですか？」

僚の問いに直斗が頷く。

「うん、冗談抜きにそれが明日見の能力じゃないかな。瞬間的な洞察力と判断力、スキルとか関係無しにね」

直斗の言葉は、その後すぐに実証される事となった。

【第7話】天然君とお姫様のサンドウィッチ

僚が森の変化に気付いて足を止めたのは、昼食の休憩からさらに奥へと進み暫く過ぎた頃だった。

「何か、おかしくないですか……」

僚の言葉に直斗たち4人も立ち止まる。

全員が耳を澄まし、辺りの様子を窺う。

「……静かだな……」

木々の上方を注意深く探っていた直斗が、視線を落として呟いた。

「鳥や虫の音がしないんです」

僚は剣に手を掛け、直斗もそれに倣う。

確かに、さっきまではあれほど聞こえていた鳥や虫の鳴き声が、今はぴたりと止んでいる。

正面の草木が揺れ姿を現したのは、子牛ほどもある灰色の体毛を持ったフォレストウルフだった。

「後ろにも！」

ほのかがか叫んだ。

「待つて、こつちも！」

「こちらもです……」

左右から現れたフォレストウルフに有希と恵梨香が身構える。

「こいつら、ゴブリンより強いんだよな……」

「……それにかなり素早いって話でしたよ」

直斗の問いかけに、森に入る前に受けた説明を思い出しながら、僚が応えた。

フォレストウルフはゴブリンよりも上位の魔物で、動きが早く群れで狩りをする。

6頭のフォレストウルフがゆっくりと包囲網を縮めてくる。

「快速の矢、瞬け……マジックアロー！」

ほのかが魔法を発動する。手のひら大の透明な魔力の鏃が一頭のフォレストウルフ目掛け飛ぶ。

マジックアローは無属性の初級魔法で、威力は無いが発動が早く速度もあり、敵を牽制するのに用いられる。

ほのかが放ったのは3発。

だが、フォレストウルフは高く跳躍し全て躲す。

恵梨香が別の個体に弓を射るが、それも躲される。

「反応が早いです、気を付けて！」

近づいてきた1頭に、直斗が横薙ぎに切りつける。フォレストウルフは後ろに跳躍し剣が空を切る。

「こいつら、俺たちの動きが見えてるのか」

一連の動きを窺っていた僚は、ある事に気が付く。

フォレストウルフたちは一斉に襲って来ず、交互に仕掛けている。それは僚たちの陣形を崩すためと思える動きだった。

ならば……。

「日向さん、ちょっと試したい事があります。そこを動かないで」

「え？」

僚は直斗たちから一歩二歩と離れて行く。

そして一頭だけ距離を置き動いていなかった、群れのリーダーと思われる個体に向け走る。

「明日見！」

別の個体が後ろから追いかけて来る。

“ 思った通りだ ”

僚が速度を落とした瞬間、フォレストウルフが飛び掛かる。

それはまさに、逃げる獲物を後ろから襲う狼そのもの。

だが、僚の狙いはそこにあつた。

振り向きざま逆手に持った剣を突き立てる。

大きく口を開け飛び掛かって来るフォレストウルフ。だが、いかに素早いといっても空中では身を躲す事は出来ない。

口から後頭部を剣で貫かれそのまま絶命する。

背を向けた僚に、群れのリーダーが襲い掛かる。

だがそれも僚の読み通りだった。

「だあああ!」

噛みつかれる間際、ガントレットを装備した左腕を水平に構え、フォレストウルフの口の奥へ押し込む。

「ほら、噛み千切ってみなよ」

僚は剣をくるりと回し、フォレストウルフの腹に突き刺しそのまま切り裂く。

フォレストウルフは内臓をまき散らし崩れ落ちる。

「日向さん! こいつらの武器は牙です、攻撃を仕掛けて来る瞬間を狙ってください!」

「分かった!」

フォレストウルフは動きは早いが、個々の攻撃方法は単純だ。

その武器は長く鋭い牙で、獲物を襲う際は必ず噛みついて来る。

習性が分かれば、直斗たちの敵では無かった。

「旋光！」

直斗は襲い掛かるフォレストウルフの口に、光属性の剣技を衝きこむ。

「大地の怒りよ、仇なす者を撃ち碎け……メタルバレット！」

「双牙っ」

ほのかが土系魔法で、金属の弾丸を飛ばす。

ジャンプして躲したところを恵梨香の風属性弓術が撃ち落とす。

「火燕！」

有希の貫手突きがフォレストウルフの喉を貫く。

仲間を悉く倒され、残った一頭は逃走を図る。

「魁偉の風刃、阻害なる敵を断罪せよ……ウインドカッター！」

二枚の風の刃が走り去るフォレストウルフを切り裂いた。

「何とかなっ たな……」

剣を鞘に納めながら直斗が呟いた。



「やっぱり、大事なものは連携だね」

有希はまだ少し青い顔で笑った。

「それにしても……」

ほのかが眉をひそめて僚に詰め寄る。

「明日見くん、無茶しすぎ！」

「えっ」

いつもおっとりしたほのかが、大きな声を出した事に僚は驚いた。

「自分の腕を噛ませるって、怪我したらどうするの」

その気迫に一瞬美亜の姿が重なる。

「す、すみません、あの……」

じっと僚を見つめた後、ほのかはいつもの様になっこり笑った。

「ま、明日見くんのお陰で皆ちゃんと戦えたし、……うん、分かれ  
ばよろしい」

「は、はあ」

僚はほっと胸をなでおろす。これ以上叱られる事は無さそうだ。

「明日見君、天然系のたらしかな……」

有希の眩きは、誰にも聞こえなかった。

「お疲れ様です」

いつもの様に一人特訓を終えた僚に、パーティーユがそつとタオルを渡す。

「あ、ありがとうございます」

僚はタオルを受け取り額の汗を拭った。

「おやすみになる前に、少しお話をしませんか？」

パーティーユは笑顔を見せ、ちょこんと小首を傾げる。

「はい、そうですね」

あれからパーティーユは、毎晩僚の訓練に顔を出すようになった。

そして訓練が終わると、二人でベンチに座り暫くの間話をするのが日課になっていた。

お互いのその日の出来事。この世界の事や僚たちの世界の事。

パーティーユは特に、魔法の無い世界での人々の暮らしぶりを興味深く聞いていたのだった。

いつもの様にベンチに腰を下ろすと、パティーユは脇に置いた包みを開いた。

「あの、お夜食にどうかと思って……」

そう言って包みの中身を膝の上に乗せた。

「わ、サンドウィッチですか」

「……お口に合うといいのですが……」

そつと、遠慮がちにサンドウィッチを差し出したパティーユの顔は、ほんのりと赤くなっている。

「もしかして、王女様が？」

パティーユはこくりと頷いた。

「じゃあ、遠慮なく頂きます」

僚は一つを手に取り口に運ぶ。ローストされた肉と刻んだ野菜を挟んである。

パティーユはその様子を心配そうな顔で見つめていた。

「あ、おいしいです」

パンは日本の物より少し硬めだが、具材との相性も抜群で口当たりも良い。

お世辞抜きで美味しかった。

「本当ですかっ」

パーティーユは声を弾ませ、弾ける様な笑顔を浮かべた。僚は大きく頷いて、二つ目に手を伸ばす。

「明日見様、こちらもどうぞ」

携帯用のティーポットを取り出したパーティーユは、紅茶をカップに注ぎベンチに置いた。

「ありがとうございます……」

カップに伸ばした僚の手が逡巡して止まる。

「……あの、紅茶はお嫌いでしたか？……」

「ああ、いえ、そうじゃ無くて……、その明日見様っていうのは……」

そもそも現代の一般的な日本人、しかもただの高校生が様付けで呼ばれる機会などほとんど無い。レスター達は明日見殿と呼ぶが、それもしつくりこない。

どうにも現実感がなく、自分が呼ばれている気がしないのだ。

パーティーユは、暫く俯いて何やら考えたあと、意を決した様に顔を上げた。

「では、私の事も王女様、では無く名前で呼んで下さいっ」

まさかそう言い返されるとは思わず、僚は一瞬身を引いた。

「……じゃあ、パティール様？……」

「なぜ、様が付いているのですか」

パティールは眉根を寄せ上目遣いに睨む。

全く怖くは無い、が、有無を言わせぬ迫力がある。

「えっと、パティール……なんか呼びにくいな……じゃ、パティ……」

「パティ……ですか」

パティールは顔を上げ丸く大きな瞳を、誰が見ても分かる程の期待を滲ませ、更に大きく見開いた。

「……パティ……いいですね、うふっ……ではこれからパティ、と呼んで下さい！」

どうやらツボにはまったらしい。

「……パティ……うふっ……」

パティールは顎に両手を添えて、何度も自分の愛称を口にしながら笑っている。

僚にはなぜ、パティールがそこまで喜ぶのか分からなかったが、王族である彼女の事を愛称で呼ぶものなど今まで居なかったのだ。

「お友達に……なつたみたい」

同年代の貴族の子女たちが、愛称で呼び合うのを羨ましく思っていた。

「いいんですか？ 俺なんかがその……友達なんて」

異世界とはいえ相手は王族、僚は距離感を掴みかねていた。

「もちろんですっ」

パーティーユは笑顔で即答した。

「じゃあ、俺の事は……」

「僚！……あっ」

パーティーユは勢いよく言った後、はっと我に振り返り顔を真っ赤にして下を向いた。

「じゃあ僚って呼んで下さい」

養護施設や学校では、僚か僚君と呼ばれていたのだから名前で呼ばれる事に抵抗は無い。

“ 僚ちゃん ” なら速攻でお断りしていただろうが。（美亜は何度やめると言っても「僚ちゃん」、と呼んでいた）

「そう言えば、今日は大活躍だったそうですね……僚……」

パーティーユの顔はまだうつすらと赤いままだった。

「そんな、大活躍ってほどじゃ」

「高科様たちから伺いましたよ、僚のお陰で無事に闘えたって」

話がかかなり盛られている様な気がして、僚は少し居心地が悪くなり頭に手をやって軽く掻いた。

「……それで、これを僚に」

パーティーユが取り出したのは、刀身が60cm程のショートソードだった。

「剣なら貰ってますよ」

実戦訓練に入る前、僚たちには王家から武器が支給された。僚が受け取ったのは直斗と同じミスリル鋼で打たれたロングソードだ。

ミスリルは魔法との相性が良く、魔力を纏わせた属性攻撃に耐えられる性質を持つ。

ただ、魔力の無い僚にとっては軽くて丈夫で切れ味の良い剣、というだけで特殊な効果は望めなかった。

それでもこの世界の騎士や冒険者からすれば、非常に高価でおいそれと手に入れる事が出来る物では無い。

「この剣には、風の魔法が付与されていて、使う人の敏捷性を僅かですが上昇させます」

パーティーユから差し出された剣を手に取り、鞘から抜いて目の前

に掲げた。

「魔力を持たない僚には、そちらの方がいいのではと思って」

僚は立ち上がり二三歩離れると、何度か剣を軽く振ってみる。

魔力を感じる事は出来ないが、確かに剣速が上がっている。それにロングソードより取り回しも良い。

「ありがとうございます、大事に使わせてもらいます」

僚が剣を鞘に納め振り向いて頭を下げると、パティールは立ち上がって僚の隣に立ち耳元に口を寄せた。

「パ・テ・ィ、ですよ」

腕にふんわりと柔らかい感触。

「す、すいません、パティ」

……色んな意味で……。



## 【第8話】経過報告とお姫様の二二二

「ではエマーシユ、報告を」

パティールは執務室の机の前に立つ二名の士官のうち、左側の女性治療術師へ言った。

「はい殿下。現在勇者様方の訓練は順調に進んでおります。十分に試練の迷宮へ挑めるかと」

「それ程ですか」

「はい、日向様はじめ高科様、葉月様、穂積様の従士方も既にそれだけの力をつけておいでです」

エマーシユは隣に立つレスターに目配せをした。  
賛同の意を込めてゆっくりそして大きく頷く。

ここにいる二名はレスターが武術の、エマーシユが魔法の、それぞれが勇者育成の責任者である。

加えてエマーシユは歴史や一般常識も担当していた。

「あの、りよ……明日見様はどんな様子ですか……」

二人の報告に僚の名前が出てこなかった為、パティールは少し不満げな声で聞いた。

「明日見殿は……」

腕を組みゆつくりと、まるで自分に言い聞かせる様にレスターが口を開く。

「私見ではありますが、明日見殿は実際の戦闘より、指揮や参謀に向いているように思えます」

「どういう……事ですか？」

僚が、それこそ血の滲む様な努力をしているのを、毎晩そばで見に来たパーティーユは、納得しかねる顔でレスターを鋭く睨み付けた。

「……常に戦闘を俯瞰出来る洞察力と、的確な状況判断。現に日向殿をはじめ従士方も明日見殿の意見を重用しておいでです」

レスターの見解はパーティーユにとっても好ましいものであった。

「……そうですか……」

パーティーユは胸元に手を添え、零れる様な笑みを浮かべた。そのしぐさにレスターは首を捻る。

「あの、殿下？」

「あつ、は、はいっ。それで他には何か……ありますか？」

パーティーユは大慌てで、話題を戻した。

レスターは気付きもしなかったが、エマーシュはそんなパーティーユを見て意味深に口元を緩めた。

「……少々気になる事が一つ」

レスターが顎に手を添え思い出した様に言った。

「気になる事ですか？」

「はい。日向殿をはじめ、未だどなたも御自分のステータスを見る事が出来ないご様子です」

勇者を含め召喚された異世界人に限り、ステータスを表示させる事によって、目の前に賢者の石板と同じ内容が浮かび上がる。

ただし、他人のステータスを見る事は出来ないし、この世界の人々にステータスやスキルの概念は無い。

つまり賢者の石板を使っても、魔力と魔力量の二つしか表示されないのだ。

「2、3回戦闘を経験すれば、本人の意思でステータスビューアーを開く事が出来るようになるはずでは……」

パーティーユは心の中で念じ、ステータスビューアーを表示させた。

“ パティーユ・エメラーダ・エルレイン ”

称号 エルレイン王国の王女 賢者

年齢 18歳

魔力 160

魔力量 680

スキル

魔法：水、風、治癒、聖

身体能力補正  
アビリティ： 魔力

異世界人だけでなく、その血を継ぐ者にもステータスが適用されている。

パーティーユのエルレイン王家も、過去の勇者の血を受け継ぐ三王家の一つだった。

「私のものは表示されますから、全体の異常では無いようです。調べてみる必要がありますね」

「そちらは殿下にお願いしても？」

レスターは申し訳なさそうにパーティーユの顔を窺う。

「ええ、任せて下さい。大丈夫ですよ、そんな顔をしなくても」

レスターはほっと胸をなでおろす。

ステータスの概念さえ無いレスターやエマーシュにとって、この問題は理解を超えるものだった。

「それから、原因が分かるまで試練の迷宮への挑戦は延期します、問題はありますか？」

「いえ」

レスターとエマーシュは揃って答えた。

「 unnecessary 危険を排除するのは私達の義務……ですから」

義務、を特に強調した様にレスターには聞こえた。

「……他に無ければ、これで終了とします」

「はっ」

レスターとエマーシユは右手を胸に当てる王国式の挨拶をして執務室を出た。

一階への階段へと続く王宮の廊下の途中で、レスターは不意に立ち止まり後ろを歩いていたエマーシユを振り返った。

「どうされました？」

エマーシユは訝しげに尋ねた。

「……パティール殿下は、明日見殿の事を随分気にかけておいでようだが……」

「その事ですか」

エマーシユは口元に手を添え、下を向いて暫くの間考える素ぶりを見せる。

「はじめは、勇者召喚に明日見様を巻き込んだのではないかと気に病んでおいででした……ですが今は……」

「今は？」

エマーシユの意味ありげな態度に、レスターは何か重要な事でも有るのかと続きを急かす。

だが、エマーシユはゆっくりと首を傾けて優雅に微笑んだ。

「それを聞くのは野暮、ではありませんか？」

レスターは一瞬何の事か分からなかったが、パティーユの顔を思い浮かべ、なるほど、と大きく何度も頷いた。

「エマーシユ、その明日見殿の事なのだが……」

微笑みを浮かべていたレスターが不意に真顔になった為、エマーシユは眉をひそめた。

「明日見様がどうかしましたか？」

「当分、目を離さぬ方がいいだろう」

レスターは目を閉じ腕組みをする。

「と、いいいますと？」

「殿下にはああ言ったのだが……」

そう前置きしてレスターは続けた。

「日向殿や他の従士の方々の成長は目覚ましいものがある。しかも、これからまだまだ強くなれるだろう」

エマーシユは頷く。

「そうですね、何者も及ばぬ程に」

「だが明日見殿はもう既に限界に近い、これ以上の伸びしろも望め無いだろう……残酷なようだが、このまま無理をさせれば待つのは確実な死だ」

レスターは一つ深呼吸をして間を開けた。

「早いうちに、他の道を示してやるべきだと思つ」

「……はい」

そう言った後二人は無言で歩き始めた。

廊下には二人の靴音だけが響いた。

【第9話】死を退ける者、その名は

森の中の開けた場所に、薄緑の煌びやかな光が立ち昇る。

それは見る者全てが、我を忘れ見惚れてしまうほど幻想的な光景だった。

唐突に現れオーロラのように揺らめき、そして現れた時と同じく唐突に消えてゆく。

「綺麗……」

誰かが溜息交じりに呟く。

その場にいた全員がその光景に見とれていた。

「あれは……龍脈の光ですね……」

治療師のエマーシュが誰に言うとも無く言ったが、彼女の目は光のあつた場所を名残惜しそうに見つめたままだった。

僚たちは午後の実戦訓練を早めに終え、帰路に就く前に休憩を取っていた。

「龍脈……ですか？」

僚がエマーシュの言葉を確認する様に聞いた。

「ご存知なのですか？」



エマーシユは少し驚く。

「あ、いえ。俺たちの世界にも龍脈って考え方があるんです、えつと……」

「風水でいう気の流れ、の事ですよね」

うる覚えの知識であった為僚は言葉に詰まるが、恵梨香がそれをフオローする様に言った。

二人は口元を緩め頷き合う。

「……気、ですか……こちらの世界と、それ程大きな違いは無いのかもしれないね」

エマーシユが顎に手を添え、少し説明します、と話し始める。

「この世界満たす、マナの事は以前お話し致しましたね」

「魔力の元になっている物質……ですよね」

直斗がかなり端折って答えたが、エマーシユは嫌な顔をせずに頷いた。

「マナは世界に数本しかない巨大な世界樹ユケドラシルによって生成されます。そしてマナの元となるのが、エーテルと呼ばれる物質です。エーテルは天の星々から絶え間なく降り注いでいて、目にも見えず感じる事も出来ませんが大地に吸収され世界樹へと流れて行きます」

そこで一旦話を切り、エマーシユは直斗たちを見渡す。

「そのエーテルの流れが龍脈です」

「それではさっきの光は、その龍脈から漏れたもの、という事でしょうか？」

恵梨香が頬の横で右手の人差し指を立てた。

「概ね正解ですね。龍脈に集められたエーテルが、空気中のマナに反応していると言われています」

「はつきりとは分かっていないんですか？」

今度は僚が尋ねる。

「ええ、残念ながら。……ただ龍脈は時折地表近くに蛇行し、龍穴というポイントを作り出す事があります。皆様を召喚した部屋は、その真上にあり龍穴からあふれ出る力を利用しているのです」

全員が納得したようにゆっくりと頷いた。

そんな中、僚は一人首を捻る。

「……エーテルか……クオーク？ いや、もしかしてダークマターの事か？ ……じゃあマナはダークエネルギーの……」

「え、何？ 明日見君知ってるの？」

僚は頭の中で考えていたつもりだったが、無意識に声に出していたようだ。

有希が僚の呟きに反応した。

「あ、いえ。ただ地球でもエーテルって物質があると考えられていた時代があるんです」

「……意外と、物知りなんだ」

上目遣いになつこりと微笑む。

「えっ、そのっ、科学には興味があつて……」

僚は焦って顔を背ける。

「学校ではそんなの習わないよねえ」

ほのかが感心して腕を組み大きさに何度も頷く。

と、その時だった。

甲高い笛の様な音が響き、直後、上空で大きな爆発音が聞こえた。

「今の音は！」

エマーシュが音が聞こえた方向を見た。開けているといつても森の中である、空は僅かにしか確認出来なかった。

「明らかに救難発信、街道の方向ですが……まさかつ」

いつもは穏やかなエマーシュに明らかな狼狽が見て取れた。

「エマーシュさんっ、何かあるんですか」

直斗がエマーシユの傍に駆け寄る。

「それが、本日パーティーユ殿下が、公務にて森の街道をお通りになるご予定なのです」

「でも、護衛は付いているんでしょう」

僚はエマーシユの向かいに立ち、不安な表情を浮かべた。

「ええ勿論、選りすぐりの近衛騎士が5名。……ですが、救難発信を撃つたとなると、不測の事態が起こった可能性が……」

「先に行きます！」

最後まで聞かず、僚は音のした先に向け駆けだした。

「俺たちも行こう！ 明日見に置いてかれるぞっ」

「うん！」

直斗たちも後に続く。

僚は枝や蔭を避けながら、全力で森を駆け抜けた。

長距離は苦手だが、能力補正された今の体力なら5、6kmは持つはずだ。

「パティ、無事でいてくれ！」

僚はペース配分も忘れたただ夢中で走った。

状況は芳しく無かった。

フォレストウルフやブルートベアであっても、10頭程度の群れなど脅威にすらならなかっただろう。

それが王族を守る近衛騎士であった。

だが今彼らを取り囲む相手はそれらだけでは無かった。

ポリポッドマンティス。

体長6m。

歩行用の2対の後ろ脚と、攻撃用の3対の鎌状の前足。

非常に硬い外骨格と3つの目を持つ昆虫型の魔物で、動きが早く3対6本の前足により広い攻撃範囲を誇る。

「何故この森にポリポッドマンティスがっ」

騎士の1人が苦虫を噛み潰したような顔つきで呻いた。

魔物はその脅威度によってランク分けされている。

上からSSS級（絶滅級）、SS級（大災厄級）、S級（災厄級）

。ここまでは、国家規模以上の軍隊での対処が必要とされている。

次にA級（大災害級）。

これには少なくとも師団規模での対処を要する。

B級（災害級）では大々中隊規模、C級（下位災害級）なら中々

小隊。

その下位にD、E、F、G級と続く。(ゴブリンやアルミラージはG級、フォレストウルフやブルートベアがF級)

そして、このポリポッドマンティスはC級である。

パーティーユを守る騎士はたったの5人。

本来ならば、最低でも30人以上で対処する必要のある相手だ。いかに選りすぐりの近衛騎士とはいえ、軽装備の彼らには荷が勝ち過ぎた。

「何とか、殿下だけでも……」

だが正面にポリポッドマンティス、そして周りを十数頭の魔物に取り囲まれた現状で、戦力を分散するのは得策では無い。しかも馬は完全に怯えてしまって馬車は使えない。

「救難発信に気付けば、日向様たちが来てくれるはずです……それまで全員で持ち堪えましょう」

周りを囲んだ騎士達に向け、パーティーユは励ましの声を掛ける。

「はっ」

盾を装備した2人が、正面のポリポッドマンティスに向かい3歩程前が出る。

残りの3人はパーティーユを中心に、左右と後方に展開する。

「我が力に呼び起されし清浄なる飛泉よ、連なる者を護り万物を退ける壁となれ……キャスケードウォール！」

呪文の詠唱を終えパーティーユが叫んだ。

ポリポッドマンティスの前に3層の水の壁が立ち昇る。

水の上位魔法。D級以下の魔物であれば完全に防ぐ事が出来るが、C級のポリポッドマンティスには足止め程度にしかないだろう。

だが、今はそれだけで十分だ。

騎士達は、襲い掛かるブルートベアを次々と切り伏せてゆく。

キャスケードウォールがポリポッドマンティスを足止めしている間に、出来るだけ魔物の数を減らし、何とか逃走の為の突破口を開く。それが出来ないまでも、日向達が来るまで持ち堪えれば、合流してポリポッドマンティスを倒す事も可能だろう。

パーティーユは更に魔力を籠める。

「……もう少し、耐えて……」

だがその願いも空しく、立ち昇る水の水の壁を切り裂いて、ポリポッドマンティスの前脚が盾を構えた騎士の1人を吹き飛ばした。

それからは、一方的な蹂躪だった。

5人全員で掛かれれば、もう少しは善戦出来ただろう。

だが、それでは魔物の群れからパーティーユを守る事が出来ない。

それはつまり、ポリポッドマンティスが現れた時点で、この場に  
いる全員の命運は尽きていたという事だった。

パーティーユの目の前に1人の騎士が吹き飛ばされて来る。前脚の攻撃を受け流そうとした剣は半ばで折れ、腕はあらぬ方向に曲がっている。

「ごぼっ、という音とともに口から血を噴き出した様子から、折れた肋骨が肺に刺さってしまったのが分かった。

それでも騎士は、折れた剣を握りしめている。

「今治療します！」

パーティーユは傷ついた騎士に駆け寄り、治癒魔法の呪文を詠唱する。

「生命の輝きよ、かの者の傷を癒したまえ……ヒールっ」

淡い光が立ち昇り、傷を癒し始める。

だが、1頭のブルートベアがその隙を見逃さなかった。

「殿下！」

声のした方に顔を上げると、1人の騎士がこちらに走っていた。

その顔は大きく目を見開き、焦った様子で何か叫んでいる。

パーティーユは後ろを振り向いた。

鉤爪の並んだ太い前脚を振り上げ、覆いかぶさる様に迫るブルートベア。



パーティーユの目にそれはスローモーションの様に見えた。

ゆっくりと迫る確実な死。

実際は叫び声さえ上げる暇のない一瞬。

パーティーユは顔を背ける。

激しい痛みだろうか。

其れとも痛みさえ感じる事の無い死、だろうか。

最後の一瞬、パーティーユはそんな事を考える。

刹那。

一陣の疾風<sup>かせ</sup>。いや風さえ追い越し一つの影が木々の間から飛び出す。

影はその猛烈な速度のまま、ブルートベアへと襲い掛かる。

そして、横倒しになったブルートベアに深く剣を突き立てとどめを刺す。

パーティーユは顔を上げて、死をもたらすはずであった者を振り向く。

剣を突き立てられ、横たわったブルートベア。

その傍らには、まさにパーティーユの死を振り払った影。

パーティーユの時間が元通りに動き始める。

そして、その影は優しく問いかける。

「遅くなってごめん、大丈夫？ ……パティ」

そのはにかむ笑顔はよく見知った顔。

「……ええ、きつともう大丈夫です。来てくれると信じていましたよ」

パティーユは感慨を籠めてその名を呼んだ。

「……僚」

## 【第10話】強敵

「皆！ 魔物から離れてしやがんで！！」

僚は、その場にいる全員に聞こえる様に大声で叫んだ。

騎士達は、その声の主が勇者一行の1人と分かると、すぐさま魔物から間合いを取って身を屈めた。

僚はパティールを庇う様に膝をつき、拳を握った左手を突き上げる。

拳を開く。

一呼吸。

大きく振り下ろす。

次の瞬間。

風を切り裂く唸りと共に、水の魔力を纏った矢と氷の槍が飛来し、次々と魔物たちを貫いて行く。

恵梨香の弓術 “ 驟雨<sup>しゅうう</sup> ” 。

ほのかの魔術 “ アイスランサー ” 。

続いて直斗の放った “ サンダースピア ” が閃き、一瞬遅れて耳を劈く轟音が響く。

淀みない一連の流れによる攻撃は、ブルートベアの群れを一掃し戦況を覆す。

「僚つ、後ろ！」

生き残ったブルートベア2頭が、僚の背後から迫るのを見てパテ  
イーユが叫ぶ。

剣は先程倒したブルートベアに突き刺さったまま、僚は武器を持  
っていないかった。

其れにも拘わらず、僚は微笑んで人差し指を立てた。

“ 1 ”

「はあああつ！ 飛龍閃！！」

有希の飛び蹴りが、1頭のブルートベアの頭を粉碎する。

続いて中指を立てる。

“ 2 ”

「くらえ！ 旋風斬！！」

残ったブルートベアを、直斗が一刀のもとに両断する。

僚はゆっくりと立ち上がり、剣を引き抜いた。

「明日見君つ、飛ばし過ぎ！」

有希が両手を腰に当てて、首を傾げる様に僚の顔を覗き込む。

「まったく、付いてくのに苦労したぞ」

直斗は軽く首を振り肩をすくめた。

「ほんと、わたしたち体力派じゃないんだよ」

「でも、間に合いましたね」

追い付いてきたほのかと恵梨香は息を切らしている。

「皆様……」

「勇者様……」

パーティーユが安堵の顔で囁き、騎士達は闘志を再興させて叫んだ。

「後は、あのでかいヤツだけか……」

直斗がポリポッドマンティスに向け真っすぐに剣を向ける。

「うわ、キモっ。」

有希は顔をしかめながら、背中に装備した2本のスティックを引き抜き、目の前で連結する。それを回転させて上に放ると、更に2本を同じく連結し素早く左手へ。最後に落ちて来たものを右手で受け、左手のものと連結させ2m40cmの棍を完成させた。

「氷結せし霊槍の穂先よ、不動なる敵を貫け……いくよ、アイスラッサー！」

ほのかの魔法を合図に、正面から直斗、右翼から有希、左翼から僚がポリポッドマンティスに向け駆けだす。

「行きます、双牙！」

恵梨香の放つ風の矢は、空中で二つに分かれ加速しながらポリポッドマンティスに迫る。

ポリポッドマンティスは躲しめせずその身に受ける。  
氷の槍も風の矢も、硬い外骨格に遮られ悉く砕け散る。

「傷一つ無しか、これならどうだ！ 雷振破！！」

直斗が剣を振り抜くと、雷を纏った衝撃波が大地を抉りながら突き進み、ポリポッドマンティスを捉える。

だが雷も衝撃波も体表を滑るように流れて行く。

「なっ、硬いだけじゃないのか」

立ち止まった直斗に、2本の前脚が襲い掛かる。

「日向さん！ まともに受けちゃだめだ」

僚が叫び、直斗は咄嗟に剣でいなす。

対処出来ないスピードでは無い。

だが、鎌状の前脚による攻撃は絶え間なく続き、躲すかいなすかが精いっぱい、それを掻い潜る事が出来ない。

「全然近づけないよっ」

有希が嘆きながらも、巧みに棍を操り攻撃をいなしてゆく。

「一旦下がって下さい！」

恵梨香が弓を番える。

「翔破！」

矢はポリポッドマンティスの足元に中り、土煙を上げて爆発した。勿論、外したわけでは無い。

「無情なる槍手の刃、その爪痕を残し、地の果てに轟け……メタルランサー……！」

ほのかの詠唱が終わると同時に、土煙からポリポッドマンティスが顔を出す。

狙いは一点。

鋼刃の槍が寸分変わらず、ポリポッドマンティスの口へと飛翔する。

最も柔らかいはずの、口の中を狙った一撃。

だが、恵梨香とタイミングを合わせ、不意を衝いたはずの魔法の槍は、左右に動く顎にガツチリと啜えられ霧散する。

「そんな……」

現在ほのかが使える中でも最大の貫通力を誇る、土魔法岩石系の上位である鉱石系中位のメタルランサー。

それがいとも簡単に止められた事に、ほのかは茫然となる。

無防備なほのかに2本の前脚が迫る。

「ほのかさん!!!」

恵梨香の声に我に返ったほのかの目に、迫りくるポリポッドマン  
ティスの前脚が映った。

その瞬間、淡紅色で透明なドーム型の壁がほのかを覆う。

ほのかの固有スキル、バリア。

一定時間、あらゆる攻撃を無効化する障壁。  
だが、ほのかの顔が苦しそうに歪む。

「え？ う、嘘……」

完全な防御を誇るはずのバリアが、僅か数発の攻撃で崩壊し始め  
たのだ。

「ほのか!」

その様子に気付いた直斗が叫ぶ。しかし直斗の位置からでは到底  
間に合わない。

「きゃああっ」

遂にバリアが完全に消失した。

顔を伏せて蹲るほのかに、ポリポッドマンティスの無慈悲な一撃  
が振り下ろされる。

鎌状の前脚がほのかを捉えるかに見えたその時。



弾丸を思わせるスピードで僚が飛び出す。

僚はそのまま躊躇わずに、体ごと激しく前脚にぶつかる。前脚は軌道を変えほのかの脇の地面を抉る。

恵梨香は目の前で起こった出来事に息を飲んだ。

「葉月さん、穂積さんっ、下がって!!」

僚は、すぐさま立ち上がり剣を構えるが、ぶつかった衝撃のせいで足元が覚束ない。

そこへターゲットを僚へと移したもう一本の脚が、横薙ぎに襲い掛かる。

躲しきれない。

僚は剣で受けるが、いなす事が出来ず吹き飛ばされる。

「ぐっ」

そのまま地面に叩きつけられ、二度三度と転がった。

「……痛っ」

直ぐに立ち上がろうとするが、胸に鋭い痛みが走り動きが止まる。

両断こそ防いだものの、肋骨が何本か折れたらしい。だが、ゆっくりしている暇は無い。僚は痛みを振り切り上体を起こす。

顔を上げた僚の目に映った更なる追撃。

「やばいつ、剣が！」

吹き飛ばされた時手放した剣が、1m程先に転がっていた。

「僚　　！！」

パーティーユの叫び声が聞こえた。

僚は顔を反らし、目を閉じる。と、同時に激しい衝撃音。

「え？」

ポリポッドマンティスの攻撃は何故か僚を逸れ、転がった僚の剣を粉碎した。

そしてもう興味は無いとばかりに、直斗たちに向き直るポリポッドマンティス。

それ以上の追撃が僚に加えられる事は無かった。

「……逸れた？……逸らした？」

僚は今起きた一連の流れを振り返り考える。

「運が良かったのか？……いや……」

今まで正確な狙いで攻撃してきた相手だ、動けない者に対して狙いを外すとは考えられない。ましてや意図的に攻撃を逸らすなどあり得るだろうか。

「待てよ……だとすると……」

何かが引つかかる。

「僚！ 大丈夫ですかっ」

パティールユが駆け寄り、僚の脇に屈みこんでそっと手をまわした。

「すぐに治療しますから」

パティールユは右手を僚の胸に添えた。

それを見た瞬間、僚にある考えが閃く。

「パティールユ！ 待って」

僚はパティールユの右手を握りしめた。

「ですがっ」

訳が分からずパティールユは困った様に眉をひそめる。

「大丈夫、痛みは我慢出来るよ」

僚はパティールユの手を放しゆっくりと立ち上がった。

「それよりパティールユ、やって欲しい事がある……」

## 【第11話】撃破！

「くっ、これじゃギリ貧じゃないか……」

直斗はポリポッドマンティスの攻撃を躲しながら、何とかその本体に剣技を浴びせようとするが近づく事さえ出来ない。

「ぐあぁっ」

騎士の1人が吹き飛ぶ。剣を盾にし辛うじて急所は外したものの、激しく地面に叩きつけられそのまま意識を失う。

気が付けば立っているのは直斗と有希だけになっていた。

騎士達が倒れた事で、ポリポッドマンティスの攻撃が2人に集中し、周りに留意する余裕すら無かった。

そこから少し距離を置いた場所。

僚は倒れた騎士の持っていた、放置されたままの剣を手取る。ミスリル製だが魔力による付与の無い普通の剣だ。

僚は一歩ずつポリポッドマンティスの側面へと近づいて行く。

今の距離はおよそ20m。

10m、9……8……7……6……。まだポリポッドマンティスからの攻撃は無い。ここからはゆっくりと。

5……4……3。唸りを上げ2本の前脚が迫る。僚は素早く後方

へ飛びそれを躲す。

追撃は無い。憶測は確信に変わった。

「日向さん！ 高科さん！ 合図したら一旦下がって！！」

直斗と有希は同意を示し頷いた。

「パティ！」

僚が叫ぶ。魔法が届くギリギリの距離まで下がっていたパティエユが、水系の魔法を発動する。

「降り注げ水流、我が力の連動に跪け。ウォーターバレット！」

十数発の水の弾丸がポリポッドマンティスに降り注ぐ。

魔法の攻撃を受けたポリポッドマンティスが、その相手を探す様に動きパティエユの方を向く。

「今です！ 2人共こっちへ！」

2人が動きだすのを合図に、今度は別の方向からほのかの火系魔法が飛ぶ。

「……フレアバレット！」

間をおかず、恵梨香が固有スキルを発動。

「バスター！！！」

敵の攻撃力、防御力を低下させる。

3人は僚の指示を受けて三角形の形に位置取り、回転する様によりによる攻撃を加えてゆく。ポリポッドマンティスの意識を、誰か1人に集中させない為の作戦だった。

「日向さん、あいつの外骨格、ぶち抜けますか？」

ポリポッドマンティスの攻撃範囲から距離を取り、近づいた直斗に僚が尋ねる。

「ああ、けど溜めの時間が欲しい。ほんの数秒でいいんだ」

「分かりました、俺がその時間を作ります。それまで高科さんと一緒に化け物の注意を引き付けて下さい。それと、バーニングは使えますか？」

味方の全ステータスを、一定時間5倍以上に引き上げる直斗の固有スキル、まともに発動すれば大幅な戦力アップになるのだが……。

「使えるけど、ほのかのバリアがあの状態じゃあ、あんまり当てにしない方がいいぞ」

そう、絶対のはずの固有スキルが何故か不安定なのだ。

「構いません。お願いします」

僚はそれだけ言うとポリポッドマンティスの側面へ向かい走り出す。パティールたちの時間稼ぎもそろそろ限界だった。

直斗と有希は正面に向け駆けだす。

「行くぞ！ バーニング！！」

僚を含めポリポッドマンティスに対峙する全員を、赤い光が包む。

「……やっぱり、安定してない。皆気を付けてくれ！」

直斗が警告の声を上げた。

僚は一度、ポリポッドマンティスから離れる方向に走る。バーニングの効果を確認するためだ。

「確かに、上がってるけど……」

ステータスを表示する事が出来ない現状では、はっきりとした数値は分からないが、今試した感覚だと精々1.5倍程度だろうか。だが、今はそれで充分だ。

僚が左手で合図すると同時に、パーティーユたちからの魔法攻撃が止む。

続いて直斗と有希がポリポッドマンティスに正面から挑む。

「ふうーっ」

僚は距離を置いた場所で腰を落とし、大きく一度深呼吸をした。剣を逆手に持ち、地面に両手を添える。足はいつもの位置へ。

そして……。

全身の力を一気に爆発させる。踏み込んだ足元が抉れ、土煙が上がり一瞬でトップスピードに乗る。

狙いはただ一点。ポリポッドマンティスがその上体を支える為の中脚、その付け根の関節。

距離を詰める。10m……5、4、3。先程確認したポリポッドマンティスの間合いに入る。前脚2本が動く。

だが、トップスピードのまま突っ込んだ僚の方が早い。

「うおおおおー！」

僚はポリポッドマンティスの中脚の付け根、関節の隙間に剣を深々と突き立てた。

グギヤアアアー！！

ポリポッドマンティスが悲痛ともとれる叫び声を上げる。

僚はそのまま関節に沿って剣を抉る。ポリポッドマンティスの体液が飛び散り僚の全身に降りかかる。そして、僚が剣を引き抜いた時。

ポリポッドマンティスの中脚が、大木が折れる様な音と共に身体から切り離される。

中脚の片方を失ったポリポッドマンティスは、上体を支える事が出来無くなりその巨体を地面に横たえる。



焦った様子でただ無暗矢鱈と前脚を振り回す、ポリポッドマンテイスの残ったもう片方の中脚も同じ様に決り取る。

完全に地に伏せるポリポッドマンテイス。

「日向さん！」

「任せろ！！！」

直斗はポリポッドマンテイスの背に飛び乗り剣を頭上に高々と掲げた。

眩い光の粒子が直斗の剣に集束する。

「くらえ！ 光牙翔曳斬！！！」

振り下ろされた剣が光の軌跡を描き、ポリポッドマンテイスの頭部を一気に切断する。

わらわらと動いていた前脚が、転がった頭部の目の光が失われると同時に地に落ち、二度と動く事は無かった。

「……………何とか、勝てたか……………」

直斗は横たわるポリポッドマンテイスから飛び降り、誰とは無しに言った。

「僚！ 大丈夫ですかっ！」

ポリポッドマンテイスの脇で、苦しそくに蹲る僚の傍にパティ―

ユが駆け寄る。

「大丈夫……夫、で……す」

僚は折れた肋骨の辺りを押えて笑おうとしたが、激しい痛みで言葉に詰まる。ふと右肩に目をやると、そこにも血が滲んでいた。ほのかを庇って前脚に体当たりした時のものだろう。それ以外にも背中や膝、体中に痛みがある。

「その怪我でよくあれだけ動けたものです」

傍らに腰を落としたパティールユが、感心した様にもとれる声で言った。

「ありがとう」

僚は額に脂汗を浮かべながらも微笑んで見せた。

「褒めてませんっ、私は怒っているのです」

パティールユは眉根を寄せて僚を睨むが、その目には今にも溢れそうなほどの涙が浮かんでいた。

「もう拒否は認めませんっ、じっとしていて下さい！」

そう言っただけで僚の正面に膝をつき、パティールユは治癒の呪文を詠唱する。

「美麗なる清き祝福の息吹よ、聖なる輝きを纏い復活の奇跡とならん……キュア！」

ヒールの上位魔法キュア。  
全身にあった痛みが引いてゆく。

「……ありがとう、楽になったよ。え？」

傷は治ったものの、パーティーユはまだ僚をじっと睨んでいる。

「あの、パーティ？ 何で……怒ってるんですか……」

僚にそう言われてパーティーユは、ふっと表情を緩めた。

「……もう、怒っていませんよ……」

パーティーユは一旦下を向き、ゆっくりと顔を上げて微笑んだ。

「あの時……もう駄目だと思いました……僚、ありがとう、あなたのお陰よ」

その笑顔は、春の日差しの中に咲き乱れる菜の花の様で、僚は身じろぎもせずにパーティーユを見つめた。

「私……お礼、言いそびれちゃったかなあ」

ほのかが頬に指を当て、首を傾げる。

「なんか、明日見君のたらしっぷりが暴走してるんだけど……」

その状況を眺め、自分も僚に助けられた事がある有希が、腕を組み眉をひそめてぼつりと呟いた。

「まあ、陸上部ですからね」

ボケたつもりなのか、ツッコんだつもりなのか、恵梨香が口元に手を添えるところと笑った。

【第12話】反省会。でも、ほのかさんは怒ってます？

ようやく追いついて来たエマーシユが未だに息を弾ませながらも、傷ついた騎士達を治療してゆく。

直斗達の到着が比較的早かった為、ポリポッドマンティスという災害級の魔物を相手に、誰も命を失わずに済んだのはまさしく幸いと言えた。

「勇者様、誠にありがとうございます」

「勇者様、殿下をお守り下さり感謝申し上げます」

傷の癒えた騎士達が次々と直斗の前に進み出て、感謝の言葉を述べてゆく。

その度に笑顔で頷いている直斗だが、何ともバツの悪い思いだった。

「……なんか、いいところ取りみたいで悪いな……」

片手で頭を掻きながら直斗は後ろに立つ僚に顔を向けるが、僚はきよとんとした顔で、

「でも、実際あいつを倒したのは日向さんですよ？」

と、さも当然の様に言った。

「で……説明してくれるんだろ？」

直斗が改めて僚に尋ねた。

「あ。あたしも聞きたいな、何か根拠があったんだよね、さっきの作戦」

有希は興味津々といった様子で、目を輝かせ僚を見つめる。

「……魔力……です」

僚はゆっくりと瞬きをしてから語り始めた。

「はつきり分かったのは、葉月さんの前へ出て吹き飛ばされた時です」

あえて庇ったとは言わなかった事に、ほのかは僅かに顔を赤くした。

「あの時……」

あの時

ポリポッドマンティスの前脚は、咄嗟に動く事が出来なかった僚を逸れて、傍らに落ちていた僚の剣を粉碎した。運が良かったと思いかけたが、それでは追撃が無かった事の説明が付かない。

閃いたのはその直後、パーティーユが治癒魔法を使おうとした時だ。

「あの剣、風の魔力が付与してあつたんです」

「えっと、なんかごめん。よくわなんない」

有希が首を傾げる。

「ヤツは、魔力を見ていたんです」

例えばサーモグラフィが、物体から放射される赤外線を画像として表す様に、ポリポッドマンティスは、生物が内包する魔力を可視化している。それが僚の導き出した答えだった。

「だからヤツは魔力の無い俺じゃなく、魔力の付与された剣を狙つたんです」

だが、それでも疑問は残る。

「でも明日見が近づいた時は、攻撃されたよな……」

直斗はその疑問を口にした。

「そうですね、3m以内に近づいた時に」

おおよその見当は付いていた。ポリポッドマンティスが剣を破壊した後、追撃をしてこなかったのは、僚の存在を認識していなかった可能性がある。ポイントはおそらく距離。

ポリポッドマンティスには合わせて3つの目がある。頭の両脇に大きな複眼が二つと、額の真ん中に赤いガラスの様な眼が一つ。多分真ん中の目はロングレンジで魔力を、両脇の複眼はショートレン

ジで実像を見ているはず。

それを確証する為に魔力付与の無い剣を持ち、あえてゆっくりと近づいてみたのだ。

そして攻撃を受けた距離が約3m。

「つまり明日見なら、俺たちが容易に近づけない距離にも、簡単に近づけたって事か……」

「いえ、それも皆がポリポッドマンティスの注意を引き付けてくれたからです」

直斗は感心した様に言ったが、僚は笑って首を振った。

「でも実際、あんなに上手くいくとは思ってませんでした」

「ん？ ん？ 今なんか気になる事言った。それって、何発かは攻撃を受けるつもりだったって事かなあ？」

何気なく口にした言葉尻を捕らえ、ほのかが少し棘のある態度で言った。

「その為にバーニングを掛けてもらったんです。2〜3発は喰らう覚悟でしたから、ほんとラッキーでした……って、え？ 葉月さん？……」

僚はここではじめて気づく。ほのかが凍りついた様な笑顔を向けている事に。

「……ねえ明日見くん。君はあの時わりと……うっん、結構酷い怪



我、してたよねえ……」

ほのかはにこにここと笑っている。笑っているが……怖い。

僚は周囲の温度が急激に下がった気がして、思わず身震いした。明らかにほのかは怒っている。だが、その理由が分からない。

見ると、恵梨香はいたずらした子供を諷める様な目を向けている。有希は、腕を組み眉根を寄せてコクコクと頷いている。

直斗は……。不穏な空気を察し、じわじわと後退りして距離を取っている。

「……あ、あの、葉月さん？ 何で怒って……」

「あそこで一発でも攻撃を受けてたらどうなってたか……分かるよねえ、僚くん。私、前にも言ったよ？」

「え？……あっ」

僚は、ここでようやくほのかが怒っている理由を理解した。

「大怪我だけじゃ済まないって……思わなかったの？」

思わなかった訳ではない、だがそれ程深く考えてはいなかった。

「……その、何とかなるかなって……」

ほのかの眉がぴくりと動き、笑顔が消えた。

「……私、感謝してるんだよ、さっき助けてくれた事……お礼も言

いそびれちゃったけど。でもね僚くん、それとこれとは話が別だよ。  
……あんな無茶しちゃダメでしょ」

ほのかはどこまでも穏やかな口調だったが、そこには何とも言えない迫力があつた。

「……葉月さん、あの……」

「ほのか」

ほのかはきつぱりと宣言する。

「はい？」

「だから、ほ・の・か」

理解していない僚に、もう一度ほのかが強調した。

さすがに此処まで言われれば、名前で呼ぶように催促されているのが僚にも理解出来た。

「……ほのかさん」

「ん？　なんか違うよ？　僚くん、姫様の事はパティって呼んでたよ」

ほのかはちょこんと首を傾げ、いつもの様に穏やかに笑っている。

……無言の圧力……。

「い、いや、さすがに先輩を呼び捨てはダメでしょう？　ね、ねえ」

日向さんっ」

直斗は無言で目を逸らした。こうなるとほのかは意外と頑固なのだ。

「いいんじゃないか、異世界だし」

異世界だとかがいいのかよく分からない理屈だったが、要するに自分を巻き込むなという、直人の意思表示だった。

「……分かりました、怒らないで下さいね……ほのか」

「うん、おっけー。これからちゃんと名前で呼ぶんだよ。それから……」

ほのかは満足げに大きく頷いた後、顔の横で人差し指を立てる。

「無茶するなどは言わないけど、今度からは前もって教えて？ そ  
うすれば私たちも上手くフォロー出来るから。ね」

お前は、言葉が足りない……。何度か言われた事がある。

ずっと陸上競技をやってきたせいか、チームワークや意思疎通と  
いったものが、実はあまり理解出来ていなかったのかも知れない。

「分かりました、今度からはちゃんと話しますね」

「うん、そうしてね。あと、庇ってくれてありがとう」

ほのかはそれまでとは少し雰囲気の違う、春の桜を思わせる様な

笑顔で僚を見つめた。

「あ、はい」

その2人の会話に有希が割り込んでくる。

「ねえねえ、あたしも有希って呼んでよ。あ、反論は受け付けませーん。って事でよろしくね。僚君」

有希は胸を張って左手を腰に当て、右手のVサインを突き出す。よく分からないポーズだが、僚に拒否権が無いのは明らかだった。

「……分かりました、有希」

「きゃー、なんか年下の男の子から、呼び捨てで呼ばれてみたかったのよねー」

自分で自分を抱きしめ、身を震わせて喜びに浸っている有希を、少し危ない人なのかな、などと思わなくもない僚だった。

「人の趣味は色々だよ、うん」

ほのかが、目をつぶり頷いた。

そんな取り留めのない話で盛り上がっていた時だ。

騎士達が準備をしていた馬車の方から、けたたましい馬の嘶きが響いた。

見ると、馬車に繋がれた馬たちが取り乱した様に暴れている。魔物の襲撃を警戒して身構える僚と直斗だったが、どうもそうでは無

いらしい。

「行ってみよう！」

直斗が僚に声を掛け、走ってゆく。

僚は、ほのかたちに此処にいるよう伝え、直斗の後に続いた。

「どうしました！」

暴れる馬の手綱を必死に抑える騎士たちに、直斗が大きな声で尋ねた。

「あ、勇者様、これはお見苦しい所を。馬たちが怯えてしまって、どうにも言う事を聞いてくれないのです」

騎士の1人が額に汗を浮かべ困った顔で答えた。

馬の扱いに慣れているはずの彼らですらこの状況だ。僚は自分たちに手伝える事があるとは思えなかった。

「ちょっと、俺にやらせて貰えますか？」

だが直斗は、そう言って右の掌を馬たちに向けかざした。

「……暗き夜を照らす清浄なる月代つきしろよ、その白銀の輝きを以て邪なる闇を打ち払え。セイクリッド・リュミエール」

銀の光が怯え切った馬たちを包む。すると、今まで暴れていたのがウソの様に落ち着きを取り戻し、大人しくなった。

おおつ、と騎士たちから感嘆の声が上がる。

「日向さん、今のは……」

僚はたった今起こった事に驚き、目を丸くして呟いた。

「ああ、本来は広範囲で闇の眷属や邪悪な者を消し去る、浄化系の光魔法なんだけどな。今みたいに極限まで魔力を絞って発動すると、心の不安を取り除いたり、精神を安定させたり出来るんだ」

「……便利な魔法ですね……」

「ただ、動物に効果があるかどうかは……」

直斗は感心する僚を横目に見て、口元を緩めた。

「結果オーライって事で」

2人は肩を震わせて笑った。

【第13話】幼馴染いろいろ。称号もいろいろ？

ポリポッドマンティスを撃退した後、僚たちはパティークの護衛に加わり王城まで帰る事になった。

重傷を負った騎士は傷こそ癒えたものの、流した血液まで魔法で補う事は出来ない為自分で歩くまでは回復せず、生き残っていた3頭の馬に分乗している。

馬車は損傷はしていたが使える状態で、パティークの他、今は有希、ほのか、恵梨香ら女性陣が乗車している。パティークは、エマ―シユにも一緒に乗るよう促したのだが、彼女は王女殿下と御一緒するなど恐れ多い、と御者席に座っていた。

馬車は詰めれば何とか6人乗る事も出来たが、僚と直斗は歩く事にした。

その方が何かあった時、すぐに対応が出来るから、と僚は理由をつけて断ったのだが、それは建前だった。

「どうぞ、隣に」

パティークとほのかと有希。僚に向けて手招きをした3人の声が重なり、その直後彼女たちの笑顔が凍り付いた。

僚には何故か、彼女たちの間に見えない火花が見えた気がして、背中に冷たいものが伝うのを感じた。

そして、最も無難な選択をしたのだった。

「それにしても……ホントによかったんですか？ ゆ……高科さんの事」

隣を並んで歩く直斗に、僚が気まずそうに尋ねた。

「え？ 有希がどうかしたか？」

直人は僚の質問の意図が分からず首を傾げた。

「あ、あの、葉月さんは兎も角、高科さんまでその……呼び捨てで呼べって」

「あーその事か。本人が言ってるんだからいいんじゃないか？ っ  
て何で俺に？」

「なんでって……あれ？ 付き合ってるんじゃないんですか？」

直斗はここで漸く、僚が大きな勘違いをしている事に気付いた。

「はははは、無い無い。俺、他に彼女いるし。有希もほのかも恵梨香も、昔っからの腐れ縁っていうか、まあ幼馴染ってやつだよ」

「そうなんですか？……」

「何でも話せるし仲はいいけど。物心ついた時からずっと一緒だったからかなあ、異性として見れないんだよ」

直斗はそう言ってもう一度笑った。



「そんなものなんですか……」

僚は独り言の様に呟く。幼馴染といっても色々なんだな、ふと美亜の顔が思い浮かび僚はそう思った。

「ただ……」

直斗は、有希たちの乗る馬車に視線を向ける。

「この世界に召喚されたのが、一緒に良かったと思ってるよ。何となく安心するって言うか心強いんだよな、あの3人といるとさ……」

ああ、そういう事か。僚は召喚された日に彼らに感じた、微妙な違和感の正体を理解した。

「それで、あんまり動揺していなかったんですね。あの時……」

勿論それだけでは無い。大災厄を乗り切れば帰還のゲートが開き、この世界の主神エターナエルの力によって、元の場所、元の時間、元の姿で帰る事が出来ると教えられたのも大きい。

「それに……何となくこうなる事が分かってた気がする……だからあの交差点で光に包まれた時、拒否しようと思えば出来たはずなのにそうしなかったんだ」

……拒否しようと思えば？ ……。

僚は召喚された時の事を思い返してみる。だが、あの光に包まれた時、そんな選択が出来たように思えなかった。

「それって、日向さんだけじゃなくて皆もですか？」

「ああ、有希たちも同じ様な事を言ってたから……。明日見もそうなんじゃないのか？」

「えっ？」

僚は言葉に詰まる。どうやら称号を持つ直人や有希たちと、称号の無い僚では召喚のプロセスが微妙に違ったらしい。

「は、はい、そうですね」

だが僚は、あえてその事を口にしなかった。余計な気を遣わせるのも悪いと思ったからだ。

「……そういえば……」

暫く黙って下を向いていた直斗が、訝し気な顔で僚に尋ねた。

「ホントに怪我……大丈夫なのか？　かなり酷かったってほのかも  
姫も言ってたけど」

治療魔法は今回も含めて何度か目にしているが、いずれもその対象は僚だった。さっきのポリポッドマンティスの攻撃は、まるで暴走する車に跳ね飛ばされたかのように直斗の目には映った。身体強化されているとはいえ、かなりの衝撃と痛みがあつたはずだ。

「そうですね、肋骨が何本かと鎖骨も折れてたみたいです。でも、脚が無事で良かったですね」

僚は笑いながら、まるで他人事の様に言った。

「おいおい、折れてたみたいって……よくそんな状態であれだけ動けたな……」

直斗が感心半分呆れ半分といった様子で肩を竦める。

「日向さんのバーニングのお陰ですよ。あれで能力値が上がりましたから」

「上がったって言っても、ほんの少しじゃないか？ 2倍にもなっていなかったし、安定もしてなかった……」

更に言えば、ステータス値を上げるバーニングで能力は強化されても、怪我を治したり痛みを緩和したりは出来ない。

「確かに、精々1.5倍ってところでした。本来なら5倍以上に引き上げるんですよね？」

「ああ……。恵梨香のバスターも、どれ位防御力を下げられたのか分からないし、ほのかのバリアはあつという間に崩壊した……」

顎に手を添えて、直斗は眉根を寄せた。

「固有スキルが十分に発揮されてないか、制限されてるって事ですよね」

固有スキルの無い僚でも、何らかの問題があるという事は理解出来た。

「……それに、未だにステータス表示が出来ないのも、原因は同じかもしれないね……」

馬車が森を抜ける頃、日は大きく傾いていた。

ポリポッドマンティスとの闘いから明けて翌日。

賢者の石板により、何回目かのステータスの確認が行われた。

「……これって……」

直斗は前回の確認時には無かった、ステータスの異常を示す項目に眉根を寄せる。

“ 日向 直斗 ”

称号 勇者 世界に勇気を与える者 魔法剣士

年齢 18歳

魔力 1600(1725) \*制限

魔力量 4820(5008) \*制限

固有スキル バーニング：味方の全ステータスを一定時間5〜10倍に上げる

スキル

魔法：火、水、風、土、雷、無、空間、光

属性攻撃：火、水、風、雷、光  
剣術、槍術、聖剣技  
身体能力補正

アビリティ：魔力、霸力、理力

\* 状態異常 各ステータスが制限 固有スキルに大幅な制限  
(原因排除後に回復)

“ 高科 有希 ”

称号 従士 勇者と共に在る者 闘士

年齢 18歳

魔力 915(1012) \*制限

魔力量 3050(3160) \*制限

固有スキル バースト：敵一体の魔法効果を無効化  
スキル

属性攻撃：火、風、土

拳闘術、棒術、?術

身体能力補正

アビリティ： 魔力、霸力

\* 状態異常 各ステータスが制限 固有スキルに大幅な制限  
(原因排除後に回復)

“ 穂積 恵梨香 ”

称号 従士 勇者と共に在る者 弓術士

年齢 17歳

魔力 1110 (1207) \*制限  
魔力量 3070 (3150) \*制限  
固有スキル バスター : 敵一体の攻撃力、防御力を下げる  
スキル  
属性攻撃 : 風、水、火  
弓術、短剣術  
アビリティ: 魔力、霸力  
\*状態異常 各ステータスが制限 固有スキルに大幅な制限  
(原因排除後に回復)

“ 葉月 ほのか ”

称号 従士 勇者と共に在る者 魔導士  
年齢 18歳  
魔力 1900 (2070) \*制限  
魔力量 5930 (6111) \*制限  
固有スキル バリア 任意の味方に一定時間、物理・魔法による  
攻撃を完全に無効化する障壁を展開する  
スキル  
魔法: 火、水、風、土、雷、無、空間  
身体能力補正  
アビリティ: 魔力、理力  
\*状態異常 各ステータスが制限 固有スキルに大幅な制限  
(原因排除後に回復)

“ 明日見 僚 ”

称号 ？？？ 想定外の異世界召喚者 異世界の旅人

年齢 17歳

魔力 0

魔力量 0

固有スキル

スキル

身体能力補正

アビリティ：

ギフト：生々流転

僚を除く勇者及び従士の称号を持つ4人が、能力を制限される状態異常に侵されていた。

「……そんな、一体何故……」

パーティーは口元に手を添え、蒼白な顔で呟いた。

召喚の儀を執り行う前、準備のために王国に残る数多くの文献を読破した。その内容は儀式の詳細な方法だけでなく、歴代勇者たちの戦いの様子を記したのもや、勇者本人たちの手記など多岐に渡った。

だが、能力を制限する状態異常に4人全員が侵されるなど、どの文献にも記されてはいなかったのだ。

「……それで、日向さんのバーニングも、ほのかのバリアも安定し

なかつたんですね……」

僚は腕を組み、小さく何度も頷いた。4人全員に同じ項目が現れているという事は、原因は一つだけと考えていいだろう。

「排除すべき原因を突き止めればいいって事ですよね」

パーティーユは、僚の言葉に厳しい表情を浮かべ顔を上げた。

「そうですね。可及的速やかに原因を調べ対処致します……」

そして、4人の顔をゆっくりと見渡した後、表情を緩めて微笑んだ。

「ですから、安心して待っていて下さい」

心を照らす様なパーティーユの笑顔に直斗たちは無言で頷く。

その様子を何処か冷静に見つめていた僚は、その場の空気を読んで決して口には出さなかったが、

「……異世界の旅人ってなんだよ……」

自分のステータスに心の中でツッコミを入れたのだった。



【第14話】どっちを選ぶの？

「……ごめんね、僚ちゃん。約束、守れなくて……」

消え入りそうな声で美亜が言った。

僚はもう殆ど力の入らない美亜の右手を包む、自分の両手に力を籠める。まるでそうする事によって、命の力を吹き込むかの様に。

「なんで謝るんだよ……美亜が元気になれば、ちゃんと約束守れるよ……」

それは、僚が美亜についた最後の嘘。

美亜は笑った。病の苦しみに歪んだ顔では無く、最愛の人に自分の笑顔を覚えておいてもらう為に。

「僚ちゃん……やっぱり僚ちゃんは優しいね」

美亜の命の火は、既に消えようとしていた。

「ねえ僚ちゃん。お願い……もし生まれ変わっても、また私と出会ってね……また私を好きになってね……私も僚ちゃんを探すから、絶対さがして、そして好きになるから……だからお願い……」

美亜はその目に最後の力を込めて僚を見つめる。

「ああ約束する。絶対、絶対、美亜を探すから、だから……」

「……………ありがとう……………僚……………ちゃ……………ん」

僚の掌に包まれた美亜の手が、握り返してくる事はもう無かった。

中庭を見下ろす廊下の窓枠に手を置き、僚はぼんやりとそこから見える景色を眺めていた。

人工的な中庭の造形と遠くに見える山々との対比は、まるで現実と幻想の中で揺れる自分の心を映している様で、そして何故か懐かしいものを見つけられる様な気がして、飽きさせる事が無かった。

だがいつまで眺めても、探す答えを見つけられる筈もなく、僚は大きな溜息を零す。

「考え事ですか？」

不意に聞こえた背後からの声に振り向くと、そこには書類の束を小脇抱えたパーティーユがにっこりと笑っていた。

「パーティー……………」

「はいっ、おはようございます。久しぶり？ ですね、僚」

久しぶり、と言えるかは微妙だが、確かにこの3日程顔を合わせていなかった。それによく見るとパーティーユの目の下には、化粧で

隠してはいるものの薄っすらとクマが浮かび、どこか疲れた様に見える。

「大丈夫？ パティ。あんまり寝てないんじゃない……」

あれからパティーユは、勇者たちに掛けられた状態異常を解除する為、それこそ不眠不休で原因の解明にあたっていた。

「平気ですよ、これでも徹夜には慣れて……」

と、勢いよく胸を張ったとたん、軽い眩暈がしてよろけてしまう。

「パティ！」

僚は慌ててパティーユの両肩に手を添え支えた。

「本当に大丈夫？ 少し休んだ方が……」

パティーユは返事をせず、そつと僚の胸に顔を埋める。

「あ、あの……パティ？」

「……暫くこのままで……大丈夫、誰も見ていません……」

そう言ってぴったりと身を寄せるパティーユと、突然の状況にどう対処していいのかわからず、ただあたふたと焦るだけの僚。

それから1〜2分が過ぎただろうか、パティーユはそつと身体を離し顔を上げた。

「はあ、3日振りに僚の顔も見られたし、これで元気になりました……」

パーティーユは上目遣いに僚を見つめ、

「でもね僚……こういう場合、両手は背中にまわすものです」

僅かに頬を染めていたずらっぽい笑みを浮かべる。

「……え？」

「まあいいです。今日はこの後皆さんで街を見に行くのでしょう？ ゆっくり楽しんで来て下さいね」

パーティーユは書類の束を胸に抱え直し、ぱたぱたと走り去って行った。

それは彼女の照れ隠しであったのかも知れないが、僚がそれに気付く事は無かった。

エルレイン王国をはじめ、三大家と呼ばれるアルフォロメイ王国、ビクトリアス皇国の礎を築いたのは、1200年前の4代目勇者であると言われている。

現に各王家には4代目勇者の手記が数多く残されており、それが事実である事を証明していた。

ただ、それ以前である3代勇者までは、紙が発明される前という事もあり、石板等に刻まれた碑文しか残っておらず、故に、彼らの存在ははっきりとせず、神話やお伽話で語られるのみであった。

今回、パティエーユがエマーシユに命じたのは、遺跡から集められた碑文の解読であった。

エルレイン王国で発見された遺跡は、生活にかかわる建物跡や生産にかかわる製鉄遺構、更には神殿や祭祀遺構など信仰にかかわるものなど、他国に比べると数も多く良好な状態で残されていたが、本格的な発掘や調査などは行われておらず、ほぼ手付かずのままだった。

数多くの碑文の中で、エマーシユが着目したのは3代目勇者に関する記述であった。

“ 神と戦った勇者 ”、あるいは“ 神を滅ぼした勇者 ”

神と戦い、神をうち滅ぼしたと伝えられる3代目勇者はその行いから、“ 反逆の勇者 ” と呼ばれる事もあり、異彩を放つ人物であったとされる。

ただ彼が戦った神とは、異形の悪神だとする伝説も残されていて、そもそも實在さえ怪しまれている存在の1人である。

エマーシユにも確証があった訳では無い。

研究棟に持ち込まれたまま、埃にまみれ無造作に積まれた碑文の解析にあたって3日。遂にエマーシユは探していた答えを見つけた。

「……これはっ……」

但しその答えは、望んでいたものとは真逆の、受け入れ難い事実だった。

「……ご、これでは……殿下は……あまりに……」

人目につかないよう、ひっそりと王城を出た直斗たちは、王都の中心にある貴族街を商業区のある東へ向かって歩いていった。

森での訓練の時はいつも馬車なのだが、今日はみんなでゆっくり散策する為、馬車での送迎を断ったのだ。

「すごいね……こんなお家住んでみたいよ」

有希が貴族街でも一際豪華な屋敷を眺めて、溜息まじりに呟いた。

「ここは確か、エストラウド公爵家のものですね」

恵梨香が、以前移動中の馬車の中で聞いた説明を思い出して言った。

意匠を凝らした立派な門構えに屋敷を取り囲む装飾を施された塀は、現代の日本では見る事のない優雅さを醸し出している。

「どれもこれも、俺の住んでる養護施設の何倍もひろいですよ」

僚は驚きを通り越し、呆れ半分と言った様子で肩を竦めた。

「王城の俺たちの部屋なんて、広すぎて未だに落ち着かないからなあ」

「ほんと、ファンタジーだよなあ」

直斗は誰に言うともなしに呟いたが、ほのかがそれに答える様にくくくくと頷いた。

綺麗に舗装された石畳の道路に整然と並んだ街並み。

均等比率左右対称に建てられた建築物は、整数比率の正方形と丸型を基調とし、バイフォレイトと呼ばれる双子窓が並んでいる。

「わたしたちの世界で言う、ルネサンス様式に似てますね……ああ、バッテリーが残ってれば……」

恵梨香が残念、とばかりに溜息を漏らす。

こちらに来て3週間、もう既にスマートフォンのバッテリーは空になっていた。

「写真、撮りまくっちゃったもんね……」

有希はがっくりと肩を落とす。

物珍しさに、皆躍起になって写真や動画を撮りまくった。そして気付いた時には全員のスマートフォンがバッテリー切れで使用不能になった。もう少し冷静になっていれば、と思ったものの後の祭り

である。

なんとか魔力で充電出来ないかあれこれとやってはみたが、今のところ上手くいっていない。

「あ、ほら。門が見えてきたよ」

ほのかが、その場の空気を変える様に指さした先に、貴族街と商業区を分ける門が見えた。

華麗な装飾が施された門は華奢な造りではあるが、緊急時には魔力による障壁を張る事が出来る。

その門をくぐった先の商業区にある広場で、ささやかなお祭りが開催されている。直斗たちの今日の目的はそのお祭りだった。

いや、直斗たちの、と言うより女子たちの、と言った方が正しいだろう。実際僚も直斗も祭りにはそれ程興味は無く、彼女たちへの付き添いぐらいの感覚だった。

「ほら僚くんっ。今日は楽しもうね」

「珍しい屋台も出てるらしいよ、行こ、僚君」

それぞれほのかと有希に左右の手を取られ、駆けだした2人に引きずられる様に走る僚。

「ついにあの2人にも春が来たか……」

直斗が、3人の様子を眺めしみじみと呟いた。



「明日見さん、どっちを選ぶでしょう」

恵梨香は頬に手を添えて首を傾げる。

「……うん……っというか、まだそんな段階じゃないだろ」

「それもそうですね、今はまだ、楽しめればいいですね」

直斗と恵梨香はお互いの顔を見て、まるで子供の成長を見守る両親の様な笑みを浮かべた。

5人はつかの間の休息を心行くまで楽しんだ。

## 【第15話】パティークの愛、そして罪

今からおよそ1500年前。

神と戦い神を滅ぼし、のちに“ 反逆の勇者 ” と不名誉な名で呼ばれる3代目の勇者。

だが彼がうち滅ぼしたのは善なる神などでは無く、この世界の生きとし生けるもの全てを絶滅せんとする、史上最悪の“ 魔神 ” であった。

元は人であったかの神は人として抹殺されたが、その激しい恨みと憎しみによつて魂が蘇り、あるうことが大災厄をも取り込み魔神となり復活した。

魔神の力は大災厄を遙かに凌駕し、その戦いは苛烈を極めた。

かの神を漸く滅ぼした時、戦いに参加した自然界の力を司る青龍、白竜、赤龍、黄龍の神龍4柱のうち青龍を除く3柱が失われ、2人の従士が命を落とし、世界の半分が壊滅した。

世界の復興にはその後の4代目勇者を待たねばならず、2000年といわれる神龍の復活には未だ遠い。

新たな魔神の誕生を防ぐ手立ては……………。

「儀式、ですか？」

直斗は確認する様に聞き返した。

「はい。建国前の遺跡から発掘された碑文を調査した結果、今回と同じ事が過去にもあったようです。どうやら皆さまの状態異常は呪いの一種である事が判明しました」

パティークは一つ一つの言葉を噛みしめる様に、ゆっくりと淀みなく話した。

「呪い？」

有希の顔に恐怖の色が浮かぶ。

「心配はいりません、呪いと言っても力を制限するだけで、命に係わる様なものではありませんから」

パティークの言葉と向けられた笑顔に、有希はほっと胸を撫でおろした。

「ですが放っておいては、その……十分に力を発揮出来ません。情けない話ですが、この世界には皆様のお力が必要なのです」

パティークは強い意志を籠めた瞳で直斗たちを見渡した。  
直斗たちも、それは既に納得済みだと言わんばかりに頷く。

「ありがとうございます。ではエマーシユ」

パーティーユに促され、脇に控えていたエマーシュが一步前に進み、普段よりも恭しく説明を始める。

「皆様におかれましてはこののち、午後より召喚の間の下層、龍穴の間において解呪の儀をお受け頂く事となります。儀式の性質上お一人様ずつ順番となりますがご容赦下さい。解呪につきましては皆様全員の儀式が終了したのち、速やかになされると記述されております」

「俺も……ですか？」

特に状態異常見受けられなかった僚が右手を上げる。

「はい。どうやら明日見様のステータスもこの呪いの影響を受けている様です」

「って事は、解呪されれば俺も何かスキルが使える様になるんですか？」

エマーシュが僚を見つめ大きく頷いて微笑んだ。

これで足手まといにならずに済む。そう思い僚の口元が自然とほころぶ。

直斗は僚の肩をぼんっと叩いた。

「それでは皆様、お時間になりましたらお呼びいたしますので、それまではどうかご自分の部屋でゆっくりお寛ぎくださいませ」

パーティーユがそう言って、エマーシュと共に深くお辞儀をした。

僚たちが部屋を出るのを静かに見送った後で、パティールはまるで魂まで抜ける様な深い溜息を零した。

「殿下、本当に良かったのですか？ 何も今日でなくとも明日、いえ2〜3日後でも……」

パティールは目を閉じ首を振った。

「いえ、後になれば……耐えられそうにありません……」

「ではせめて、私かレスター殿に……」

「それはなりません……これは……私の責任、私の罪……私が受けるべき罰なのです……この世界を守る為の」

パティールは言葉を詰まらせ、

「……でも、な、なぜ今なの……どうして……わたし……の、時代……に……」

そして大粒の涙をぼろぼろと零し、はばかり事なく泣きじゃくった。

僚は自分に与えられた部屋のソファーに横たわり、パティールの顔を思い浮かべていた。

どことなくいつもの明るさが影を潜め、少しやつれた様に見えた。

「疲れてたんだろっな、忙しそうだったし……」

スキルが使える様になれば、力になれる事も増えるだろう。

昼食の後、そんな事を考えながら、僚は自分の順番が来るのを待っていた。

コンコン。

ドアをノックする音が響く。

「明日見様？ 宜しいでしょうか」

僚は身を起こしドアを開ける。そこに立っていたのはパーティーユ付きの侍女の1人だった。

「では、ご案内致します。どうぞこちらへ」

侍女が一礼して歩き出し、僚も彼女について部屋を出る。

「日向さんたちはもう終わったのかな？」

僚は前を歩く侍女に尋ねた。

「ええ。明日見様が最後となります。皆様別室で待機なされておいでですよ」

「……なんか緊張してきたな……」

もし儀式を受けても何も変わらなかつたら、そんな思いが僚の胸をよぎる。

「ご心配には及びません。きっと上手くいきますよ」

侍女は軽く振り向いて微笑んだ。

「……そうだね、今更ビビったってしょうがないか」

召喚の間の地下へ続く階段を降り、大きな扉の前で侍女が立ち止まった。

「こちらが龍穴の間となります、中で姫がお待ちです。それでは……」

侍女はそう告げると、一礼してもと来た廊下を戻って行った。

「ほんと、緊張するな……」

僚は扉に手を掛けゆっくりと引いた。

大きさの割に軽い事に驚きながら部屋の中へ入ると、奥に祭壇がありその後ろから薄緑の光が立ち昇っている。

一見して森で見た龍脈の光と同じ物である事が窺える。

その祭壇の前にパティークが一人で立っていた。

「待っていました、僚」

パーティーユの向けた笑顔は、いつもと変わりない様に見えた。

「あれ？ パーティ1人？」

「はい。もつと仰々しいものだと思いました？」

少なくとも召喚の時ぐらいの規模だろうと予想していた為、僚は何となく拍子抜けした気分だった。

もちろん、パーティーユと2人だけという事で、緊張せずに済むのはありがたかったが。

「奥にあるのが、龍穴？」

緊張がほぐれた事で、僚の好奇心が刺激された。

「ええ。覗いてみますか？」

パーティーユに促され、僚はそつと龍穴近づく。3m四方で穴が穿たれ、周囲には1m程の高さの囲いがある。

囲いに手を掛け覗いてみるが、中は非常に明るくて底を窺い知る事は出来なかった。

「気を付けて、落ちたら大変です」

「え？ あ、ああ」

パーティーユに注意され、気付くと僚は大きく身を乗り出していた。



「落ちたら……どうなるんだろう」

「そうですね……龍穴に落ちた場合、その身も意識も魂さえ星に取り込まれ、命の輪廻からも永遠に外れてしまおうと言われてます」

宗教的な考え方だろうか。僚はその手のものが得意では無かった。

「つまり、どういう事？」

「簡単に言うと、2度と転生する事も復活する事も出来ない完全な消滅、でしょうか」

完全な消滅、それが死とどう違うのか僚には分からなかったが、とりあえず頷いて見せた。

パーティーユはそんな僚に気付いたのか、にっこりと笑った。

「綺麗、ですね……」

パーティーユが龍穴から立ち昇る光を見上げて囁く。

僚も同じように見上げた。

「このまま少しお話を聞いて下さい」

僚は光に目を向けたまま頷いた。慌てる必要はないだろう。

「僚……1500年前の3代目勇者の話は聞いていますよね……」

「元は人間だった魔神と戦った勇者だよね」

僚は何故その話が、この儀式と繋がるのかがよく分からずにいた。

「実は、その勇者も今と同じ呪いを掛けられていました」

パティールは僚の後ろにまわり、背中にそつと頬を寄せた。

「呪いを掛けていたのは、のちに魔神となったその人だったのです」  
なるほど。それで全てが繋がった。だがまだ分からない事もある。

「何故その人は、呪いをかけたんだろう？」

世界を救う勇者に呪いを掛ける、その理由が想像出来ない。

「正確には、呪いを掛けたのでは無く、その人の存在自体が呪いだ  
つたのです。勿論、その人の意思とは関係ありませんでした」

パティールは僚の服の袖をぎゅっと掴んだ。

「僚……ああ、僚……私は……この時間がずっと……ずっと続いて  
欲しいと……」

「パティ？」

その時。

激しい痛みが背中から自分の胸を貫くのを感じた。

「パ……ティ……何……を」

僚は自分の胸を貫いた剣の刃先を見つめ、その痛み顔に顔を歪めた。

「ごめんなさい……」

僚の背後で剣を握りしめたパーティーユの頬を涙がつつたう。

「許して下さいなどと……身勝手な……事を、言っつもりは、ありません」

パーティーユの声は悲しみを堪える様に、ときれときれで震えていたが、涙に濡れたその瞳には強い決意が秘められていた。

「……私にはこの国と世界を守る義務があります」

パーティーユは僚の心臓を貫いた剣をその背から引き抜く。

足に力が入らず僚はその場でよろめく。

「……なん、で……」

僚は血の流れる胸を押さえ、絶る様な目でパーティーユに問う。

「呪いを解く方法は、その人を抹殺する以外なかったのです。そして……その人は……僚、あなたと同じ5人目の召喚者だったのです」

パーティーユは大粒の涙を拭う事もせず叫んだ。

「曇りなき荘重なる氷壁よ、戒めとなりかの者を捕らえよ。アイスブリズン！」

氷の牢獄が僚を取り囲み宙に浮かぶ。

「俺……が……」

僚は氷の壁に手を添えパティールを見据えた。

血は止まらない。心臓を貫かれたのだ、助からない事は理解出来た。だが、納得出来る事では無い。

「未だ3柱の神龍も復活していません、あなたを……魔神にするわけにはいきません……もちろん呪いを放っておくわけにも……ごめんなさい僚。あなたを龍脈に落とします」

「日向さんたちは……この事……」

パティールは無言で真つすぐに僚を見つめた。

「……そういう……事、か、そうか……完全に……消滅……パティ、俺、は……」

僚の身体から一気に力が抜け次の言葉は続かなかった。

パティールは涙でぐちゃぐちゃになった顔で笑った。

「僚、これは私の身勝手、私の責任、私の罪……全てが終わったら私も必ずそちらに行きます……」

パティールは両腕を大きく振り上げる。

僚を捕らえた氷の牢獄が、龍穴の真上へ動く。

「……愛しているわ……僚……」

パーティーユが両腕を振り下げ、そして僚は龍穴へと深く深く落ちてゆく。

その瞬間、直斗たちの状態異常は解除された。

【第15話】パーティーユの愛、そして罪（後書き）

今回で第1章終了です。

ここまで少し長くなりましたが、次話から第2章。主人公復活とチート、無双炸裂の始まりです。

ヒロインも登場します。

よろしかったら、ブックマーク、感想をお願いします。

第16話は明日、2月23日22時頃投稿予定です。

【第16話】いつか何処かで

そこは眩い光の奔流。

何処へともなく流され徐々に溶け込んでゆく。

自分がもう死んでいるのだと自覚出来る不思議な感覚。

既に痛みも苦しみも無い。

手足の先から少しずつ消滅しているが、恐怖も無い。

やがて身体は完全に消えて無くなり、意識だけが漂う。

「……結局、この世界でも要らないヤツだったのか……」

両親に捨てられ、元いた世界に捨てられ、やって来たこの世界にも捨てられた。

「……なんか、くだらない人生だったのかな……」

思えば、陸上でもこの世界でも何とか頑張ってきたのは、偏に誰かから必要とされたかったから。誰かに必要だと言って欲しかったから。

「要らないんじゃないかって……いちゃいけない存在なんて……」

だが悲しみもない。

それを感じる事ももう出来なくなっているのだろう。

「どつでもいいか……」

空が見える。海が見える。森が、草原を渡る動物たちが。

いくつもの光景が同時に見えている。

既に星の意識に捕らわれ始めてるのだろう。最早どこからが自分の意識で、どこまでが星の意識か、その堺も曖昧になってきた。

「このまま……消えるのも、悪くないか……」

もう考える事さえ出来なくなりそうになったその時だ。

“ いけません！ ”

それは、聞いたことの無い女性の声。

涼やかで透きとおる様な、嫺やかな、それでいて何処か力強い声が意識に直接響いた。

「誰か知らないけど……もうほっといてくれ……俺は……もう消えるんだ」

“ 駄目です！ 貴方が消えてしまったら、貴方の大切な人もまた



消えてしまっ”

「……俺以外にも……覚えている人は……いるさ」

“ いいえ、貴方でなければ意味は無いのです。貴方が生きてこそ意味があるのです”

「俺の……意味……」

“ 貴方は約束した筈です”

「……そう……だったな……」

“ ならば生きて！ 生きて下さい！”

「生きて……いい……のかな……」

“ 当然です、いいに決まっています！”

もう既に身体は無かったにも拘わらず、涙が頬を伝うのを感じた。

「ありがとう……誰か知らないけど……でももう遅いよ。俺は死んでるし……身体も消滅したんだ……」

“諦めないで！ 強く自分を意識するのです。自分の手を、脚を、目を、耳を、自分の存在を強く強く。貴方にはそれが出来る筈です。それが貴方の真の力”

「ああ、そうか、それが俺の……」

唐突に理解した。

それは真理の力。

消滅した肉体を再構築してゆく。

骨を筋肉を皮膚を内臓を。何故か全てが分かる。頭からつま先、一つ一つの細胞に至るまで、意識を集中させる。

“……………”

きらきらと、声が笑った気がした。

“いつか、何処かで……”

「うん。いつか……何処かで」

光の奔流の中を突き進む。もう流されてはいない。

何かに導かれる様に細い流れに入り、やがて小さな、だが確かな点を見つける。

「あれが龍穴か……」

一気にその龍穴へと飛び込んだ。

さわさわと木々を揺らし、温かい風が通り抜ける。

生を謳歌する小鳥たちの囀りが、そこかしこから聞こえて来る。

草の上に立膝をついて佇む少年は、まるで時の流れに取り残された彫像の様に微動だにしない。

やにわに目覚めを促す光風が頬を掠め、少年は目を開く。

一体何時からこうしていたのだろう。

もう何年も過ぎてしまった様な気もするし、ついさっきの様にも思えて時間の感覚がよく分からない。

「……俺は……」

誰だったのか……。

自分の名前が咄嗟に出なかった事に戸惑いを覚える。

「僚……そう、明日見僚……」

その瞬間に記憶が蘇る。

だがそれは、空っぽの器に明日見僚としてのデータがダウンロードされた様な、奇妙な違和感を感じさせるものだった。

「……俺、死んだはずじゃ……」

背中から刺され、龍脈へ落とされ肉体は完全に消滅した筈。そこまでは覚えているのだが、その後どうやって復活したのかが思い出せない。

何か大事な事があったような気がするのだが、肝心な部分は霧が掛かり、霞んでしまっってはっきりとしない。

それはまるで、目覚めた瞬間に思い出せなくなる夢に似て、考えれば考える程遠く過ぎ去ってゆく。

「……まあ、いいか」

何かをきっかけに思い出せるかも知れないし、そうでないかも知れない。

それよりも今こうして生きている事実と、これからどうするかを

考える事にした。それには先ず現状の把握からだ。

「ここ、どこだ？」

僚はゆっくりと立ち上がり、周りを見渡した。

「……森、か……」

ここがシャルルの森だった場合、このまま留まるのは得策といえるだろうか。

心臓を貫かれたのだから一度死んだのは間違いない、ならば勇者たちの呪いは解呪されたとみていいだろう。だがそうで無い場合。

生きていると知られれば……追われてもう一度殺されるのか……。

血に濡れた剣を握りしめ、涙でくしゃくしゃになったパティエユの顔が浮かんだ。

「……パティエ……」

その瞬間、焼け付く様な激しい痛みが僚の心臓を襲う。

「かはっ、ぐっ」

全身の力が抜けて足元から崩れ落ちる。

「はあっはあ……はあ……」

僚は胸を押さえて蹲り、何とか落ち着こうと荒くなった息を整え

る。

「くそっ……な、んだよ……」

おそらく刺された時の記憶と共に、その痛みも再現されたのだろう。シャツのボタンを外すと、丁度心臓の真上に大きな傷跡が残されていたが、幸い心臓はしっかり脈打っている。

「……そうか、生きてるんだ……」

生き延びて、どうなるのか。今はまだ分からない。だが、嘔き出す血と一緒に命が流れ出すあの感覚。あれを味わうのは二度と御免だった。

「とにかく、逃げよう」

早急に森を抜け、エルレイン王国を脱出する。

僚は立ち上がり、森の出口を目指して歩き始めた。

あれからどれ位歩いたのか。

「なんだろう、全然進んだ気がしない……」

行けども行けども、景色は殆ど変わらない。そもそも真っすぐ進

んでいるのかさえ怪しくなってきた。

「……疲れた……？」

ふと口をついて出たものの、実際にはただ歩くのに飽きただけで、全く疲れが無い事に気付いた。

「どうなってるんだ？」

獣道を通り、草木を掻き分け、彼此4〜5時間は休みなく歩いている。それなのに、疲れないどころか空腹を感じる事も無く、汗一つかいていない。

「ま、悪い気分じゃないから、気にしないでいいか」

其れよりも差し迫った問題。もう随分日が傾いているし、このままだと野宿は避けられない。

「日が暮れる前に森を抜きたいけど……木の上からなら出口が見えるかな？」

僚は木々を見上げ、登るのに手掛かりになりそうな枝を探す。

「あれなら、届くかな」

4 m程の所に横に張り出した枝を見つけた。全体的な枝ぶりから登り安そうでもある。強化されている今の体力なら十分届く筈だ。

僚はその場に深く沈み込み、腕を振り上げるタイミングに合わせて、思い切り脚を踏み込んだ。

大きな爆発音を伴い足元の地面が爆ぜる。

耳に聞こえる空気の唸りは、怪物の叫び声すら生ぬるく、最早ジエット戦闘機の爆音に近かった。

「え？」

ほぼ一瞬の間に、森の樹頭を遥かに超えた上空に到達していた。

上昇が止まり、下降を始める。

「わっ、ちょっと待っ」

高さの感覚が掴めないが、明らかに100m以上はある。この高さから落ちれば……、想像はしたくない。

僚は落下しながら、無意識に足を踏み込んだ。

体育館の床を蹴った様な鈍い衝撃音が響き、再び上昇する。

「何だ？ 今、足場が出来た様な……」

僚はもう一度、今度は意識して脚を踏み込む。

そのタイミングに合わせて足元がひかり、透明な足場が一瞬構築され更に上昇する。

【固有スキル、翔駆を獲得しました】



「ええっ？」

いきなり目の前に文字が表示された事に驚き、僚は手を伸ばすが触れる事が出来ない。どうやら網膜に直接投影されているか、脳内で視覚として処理されているようだ。

未だにステータスは表示されないようだが、スキルを獲得出来た事に僚は思わず口元を緩めた。  
が、すぐに真顔に戻る。

「……………どうするんだこれ……………」

上昇速度は緩やかになってきたが、今や雲を突き抜け数千m。此処まで来ると落下と言っより墜落である。

やがて上昇が止まり下降に転じる。

「うわああああ！」

徐々にスピードが上がってゆく。

「まてっ、落ち着けっ、何か、方法がっ……………」

だがゆっくり考える暇は無い。猛烈な勢いで地面が迫る。

「……………そうかつ、階段だっ」

上昇した時は踏み込みに力を入れ過ぎて、言わば階段を2段飛ばしに昇った様なものだ。ならば、階段を下りる感覚でゆっくり踏み込めば……。

僚は、つま先をつく様に踏み込んだ。

足元がひかり、足場が構築され若干落下速度が落ちる。

「よしっ、思った通りだ」

右脚、左脚と繰り返すうちに徐々に速度が緩まり、5 m程の所からはそのまま着地する。

「……上手く行った……」

僚は地面に座り込むと大きな溜息を零した。

「次からは……慎重にいかないと……」

スキルを獲得出来たのは素直に嬉しい、だが自分の中で何か、いや自分自身が変わっている。

僚にはそれがいい事なのか悪い事なのか、分かりかねていた。

## 【第17話】発動！

辺りには夕闇が迫っていた。

結局、日没までに森を抜ける事は出来ず、適当な場所を見つけて野宿する事にした。

覚えたてのスキル、翔駆を試してみたのだが、垂直方向は兎も角水平方向はコントロールが難しく、自分の意識した方向に全く進めないうえ、何度も地面に激突した。

「いたたっ……以前なら折れてるよな、これ……」

火を起こすための枯れ枝を集めていた際は、左肩をさすりながら呟いた。身体のうちここに痛みがあるが、幸い折れたり動かさなくなったりした所は無い。

「……ええと……」

集めた枯れ枝を纏め、火を付けようと腰を下ろして気が付いた。

「……どうやって、火を付ける？」

マッチもライターも無い。いや、そもそも今持っているのは身に着けた衣服と靴だけ、武器は勿論ナイフさえ無い。

サバイバル系のテレビ番組で、枯れ木を使って火を起こすのを見た事はあるが、それもナイフである程度加工してやる必要があった。

僚は真剣に集めた枯れ木の山を、空しい気持ちでじっと見つめた。

「……魔法……使えればなあ……」

何度か見た事がある着火の生活魔法。

森での訓練中、ほのかが昼食や休憩時に使っていたのを思い浮かべる。

「……確か……アリュマージュ……」

その時、ぼんやりと眺めていた枯れ木の山が一気に燃え上がった。

「うわあっ!」

あまりの火の勢いに、思わず大声を上げ身体をのけぞらせる。

「どういう事だ？ 今の魔法……だよな……」

何故魔法が発動したのか。呪文も詠唱していない、ただ頭の中でイメージしただけだ。

それに、アリュマージュの火は精々指先程度のもので、言ってみれば蝋燭の炎だが、今はまるでキャンプファイヤーだった。明らかに規模がおかしい。

「……着火って言うより……放火だよ……」

僚は毛先の焦げた前髪をいじり呟いた。

変わっていたのは、身体や身体能力だけでは無かったという事だろうか。

今のところステータスを表示させる事が出来ていない為、詳しい内容は分からないが、以前は生活魔法でさえ使えなかったのだ。

「魔法が使える様になっただけマシだよな……」

僚は木の根を枕に横になった。

木々の間から覗く星空をぼんやりと見上げ、この世界に来てからの事を思い返す。

「……何でこうなっただろ……」

だがすぐに考えるのを止めた。

「それより、これからの事だな……」

勇者たちに見つかれば、きっと命を狙われるだろう。ならば人里離れた場所で、隠者生活を送るか……。

「却下。退屈で死ぬるな」

隙をみて反撃して、復讐を果たす？

「うん、それも100パー無しだな」

その選択肢は確実に魔神への道に一直線だ。

それに復讐したいと思う程、恨みがある訳でも無い。

そこは僚自身不思議だったが、おそらく龍脈から復帰した事で身体に変化があった様に、心にも何等かの変化があったのだろう。

「後は……そうだなあ、冒険者でもやって地道に生活していくか……」

今の身体能力なら冒険者としても、そこそこ生活していけるぐらいは稼げる筈だ。

「とりあえず、街に入ったら冒険者登録しよう」

僚は目を閉じ、ゆっくりと眠りに落ちていった。

夜も深まった時分。

ふと目を覚ました僚は、ちろちろと燃える焚火の先に、背筋の凍る様な気配を感じ慌てて半身を起こした。

炎の先の暗闇をじつと凝視する。

ゆらり、と闇自体が揺れた様な気がした。

“ やばいつ ”

心の奥で、本能が叫びを上げる。

僚は咄嗟に地を蹴りその場から飛び去った。

刹那、暗闇から放たれた塊が焚火の炎を掠め、今まで僚の居た場所に降り注いだ。

「液体？ 何だ？」

木の陰に隠れ、様子を窺う。

だが、どんなに目を凝らしてみても、星明り程度ではその正体を見つける事が出来ない。

「……どこだ？ くそっ」

この場に留まるのは危険だ、だが下手に動くのはそれ以上に危険だと、僚の本能が告げる。

気ばかり焦って、冷静に対応が出来ない。これではまるで肉食獣に追い詰められた獲物だ。

「狩られてたまるかっ」

そうは言ったものの、この闇の中では敵を見つける事も容易ではない。それに対して、相手からは自分の姿が見えているのだろう。

「……夜行性の魔物……暗視が出来るって事か……」

せめて月が出ていてくれれば……、そう思った時。

【暗視モードに移行します】

「は？」

翔駆の時と同じ様に文字が表示され、同時に辺りが昼間の様になるくなった。

「な、何だこれっ？」

僚は突然の出来事に思わず声を漏らす。

通常、暗視装置の画像は緑色に調整されている。それは可視光の中間の波長の色が緑で、最も知覚しやすい為であるのだが、今見えているのは、太陽光の下と全く同じ色だった。

戸惑いはあるものの、これで少なくとも視界に関しては対等だ。



「居た！」

こちらからは見えていないと思っっているのだろう。それは何の警戒も疑念も持たず、ただ怯えて動けない獲物を捕らえようと、真っすぐに走り寄ってくる巨大な……巨大な……。

「きもっ！」

胴体部分だけで2 m、脚を広げれば8 m以上はありそうな巨大なクモ。8本の長い脚をわらわらと素早く動かし、非常識なスピードで向かって来る姿に、僚は総毛立つ思いだった。

だがじっとしている場合では無い。相手がクモなら、さつき飛んできた液体は毒か消化液だろう。まともに喰らえば動けなくなる可能性がある。

「それならっ！」

僚は巨大グモに向かって一気に駆け出す。

クモが液を吐いた瞬間、左に躲して飛び着地と同時に右へ切り返す。毎晩の訓練で身に着けた動き。その速さは巨大グモのそれを遙かに凌駕していた。

一瞬、獲物の姿を見失い無防備になったクモの横腹に、全開の速度を乗せた飛び蹴りを放つ。

ブーメランの様に回転しながら吹き飛んだクモは、巨木に叩きつけられ体液をまき散らし四散する。

「何とかなったな……」

僚は思ったよりも簡単に片が付いた事に、ほっと胸を撫でおろす。

「そうだ、あいつの魔核を売れば……」

魔物の体内からは一体につき一つ、魔核と呼ばれる色の付いた水晶状の物体が獲れる。魔核は魔法具を動かす燃料として、また装備を強化する素材として需要が高い。

「魔物のランクが上がれば上がるほど、良質な物が獲れ値段も上がる。」

「一撃で倒せた相手じゃ、大した値段にはならないかな……」

それでも、一文無しの現状からすれば比べるまでも無い。身体から素材になりそうな物を剥ぎ取ればそれも幾らかになる筈だ。

そのためには解体する必要があるが……。ナイフも無しで。

覚悟を決め巨大グモの死体に近づこうと歩き出した時、僚は背後に迫る圧迫感に気付いて振り返る。

その瞬間、ぱしゃんっ、と水風船が弾ける様に、粘着性のある液体が僚の胸に当たった。

「……何……」

濡れた部分に触れようとしたが、腕が上がらない。液体の飛んできた方向を見ようとすると、顔も上げられない。

辛うじて動く目線を向けた先にそいつはいた。

「ま、さ……もう、1……匹」

先程倒したものより更に一回り大きなクモ。

ならば、この液体は速攻性の毒だろう。急激に身体力が抜けてゆき、僚は糸の切れた操り人形のように仰向けに倒れる。

“ ヤバい、ヤバい、ヤバい！ ”

僚は心の中で何度も叫んだ。最早声を出す事も出来ない。

毒が効いて僚が動けないのを確信したのか、巨大クモはゆっくり、ゆっくり焦らす様に近づいてくる。

“ 冗談じゃない ”

心臓を刺され一度死んで、龍脈から復活したその日に、クモの化物に生きながら喰われて死ぬ。

“ ふざけるなああああ！ ”

恐怖よりもこの理不尽に対する怒りが爆発的に込み上げる。

“ 何でもいい！ 魔法をつ ”

その時、ほのかが使った最も初歩的な攻撃魔法が、雷光の様に脳裏をよぎる。

“ 快速の矢、瞬け！マジックアロー！！！！ ”

殆どやけくそだった。

なんの確信も根拠も無い。

ただ叫んだ。心の中で必死に叫んだ。

僚の頭上に青白い光が輝く。

その光から、空気を割る衝撃波を伴い透明の鏃が撃ち出された。

音速を超えた鏃は轟くような大音響を生み、巨大グモの頭と胴体の半分を吹き飛ばし、更に森の巨木を十数本なぎ倒して消えた。

その直後。

【麻痺毒をレジストしました】

身体感覚が完全に戻り、動ける様になった。

「……………なんか、色々ツツコむ必要……………あるかな？」

戦いの後の惨状を眺め、僚はぽつりと呟いた。

**【第17話】発動！（後書き）**

次の更新は3月3日土曜日22時頃を予定しています。

【第18話】食べちゃイヤ！（前書き）

一週間ぶりの更新です。

タイトル変更しました。

H30/03/04 0:36

改稿はサブタイトルの脱字の修正  
です。

## 【第18話】食べちゃイヤ！

「……とりあえず、魔核と素材を回収しとくか。あんまり気は進まないけど……」

僚は、マジックアローで倒したクモの傍に立ち大きく溜息をついた。

間近で見ると、全身鳥肌が立つ程気持ち悪い。

「魔核は……良かった無事だ」

吹き飛んだ胴体の残骸から、黄色の魔核が見えていた。

「それにしても……」

マジックアローは発動が早く、必要な魔力も少なくてすむ。その分攻撃魔法としては威力も小さく、おもに牽制の為数発を同時、又は連続で使用する。

「威力、おかしいだろ」

これでは、アローと言うよりもミサイル、いや胴体を吹き飛ばしながら貫通し、幹の直径が2mはある木々をなぎ倒した威力は、さながらレールガンと言ったところか。

とにかく使い方を考える必要がありそうだ。



「さてと、この脚は使えるかな？」

短い毛の生えた身体の割に長く太いクモの脚に、嫌々ながら指先で触れた時。

【ガイアストレージに保存しますか？ YES / NO】

またしても例のメッセージが表示された。しかも今度は選択肢付きだ。

「ええええ？ ガイアストレージ？ 何？ 説明は？」

色々な事が、次々と起こり過ぎて、最早キャラ崩壊寸前だった。

【ガイアストレージ：星の保管庫。生きているもの以外を収納出来ます。数量、質量に制限無し。有機物については時間経過無し。無機物については自動修復機能有り。直接手で触れる事で収納、メニューもしくは直接アクセスする事で取り出しが出来ます】

何の前触れも無く解説文が表示された。

「なんか……凄い……凄いけど、メニューって何だ……いや、今は

やめとこう」

魔物の死体を放って置くと、その匂いに惹かれて他の魔物が集まって来る。

今の状態でそれは避けたかった。

僚はとりあえずYESを選んだ。すると巨大なクモの死体が跡形も無く消えた。

【ハンタースパイダーをガイアストレージ、新規フォルダー『魔物素材』に保存しました】

「……ハンタースパイダーって……もうツツコむ気も起きない、後でゆっくり考えよう……」

僚は一旦考えるのを放棄し、もう1匹のクモ、ハンタースパイダーに向かった。

こちらは、思い切り蹴り飛ばし木に激突した衝撃で、脚の何本かが千切れたうえ、腹の部分が裂け薄黄色の体液が溢れていた。簡単に言うと更に気持ち悪い。

「うえええ、さっさと収納してしまおう」

僚が胴体の残った脚に触れようと近づいた時、溢れ出た体液の中

で何かがもぞもぞと動いた。

「うわあああ！ も、燃えろっアリユ……？」

一気に燃やしてしまおうと叫んだ着火の魔法を、僚は途中で止めた。

「う、くっ……」

動く物体から、鈴のように澄みとおった、甘く可愛い呻き声が聞こえたのだ。

恐る恐る近づいてよく見ると、それは小さな小さな……。

「人？ ってこれピクシーか？」

僚は汚れるのも構わず、そのピクシーをそつと両手で掴む。

クモの体液で汚れてはいるが、人形の様に愛らしい顔には赤みが差し、息に乱れも無い。

「生きてる……ええと、そうだ」

生活魔法・洗淨。エマーシユや他の魔術師が使った時の事を思い浮かべる。

一度見た魔法なら使える、ここまで来るとそう考えるのが妥当だ。

但し、大雑把なイメージでは無く、あくまでも優しく、丁寧に、そして慎重に……。

淡い水色の光が、僚と僚の手の中で眠るピクシーを包む。洗淨の魔法が発動し綺麗に汚れを落としてゆく。

「うっ……んっ……」

ピクシーは掌の中で小さく身悶えした。

「話には聞いてたけど、初めて見たな……」

体長は20cm程で、背中に4枚の透明な羽があるが、姿は人間の女性とほぼ変わらない。尖った耳に、腰まである透きとおる様な碧の髪と水着の様な服。

【解析を実行しますか？ YES/NO】

「……解析？」

【固有スキル 解析：事物の構成要素を理論的に調べることにより、その本質を明らかにします。生命体についてはその能力をステータス化して表示、工芸品等については構成素材、年代、作成者、作成地、真贋等を判断します】

「……………どうぞ、YESで……………」

もう、驚く気も起きなかった。

“ 種族：ピクシー ”

固有名 無し

年齢 132歳

魔力 80

魔力量 8 / 350

スキル 幻惑 姿消し

魔法 精霊の加護 空間

アビリティ 魔力

状態 気絶

「何気に魔力量多いな……………気絶って事は、起こしても大丈夫だよな」

ピクシーは、その希少性から不可侵対象になっていた筈だ。このまま連れて行けば罰せられる可能性があるし、かと言って此処に放つて置けば、目覚める前に魔物に喰われるかもしれない。

「おい、起きなよ」

僚は眠るピクシーの頬を、指先で軽くつついた。

「ん……………」

ピクシーはゆっくりと目を開けた。

瞳は髪の毛と同じ綺麗な若竹色だ。ただ、起きたばかりで状況が掴めていないのか、目の焦点が合っていない様に見える。

それからぴくんつと身悶えすると、思い出したかの様にいきなり叫び声を上げた。

「いやあああ！ 食べちゃいやあ！ 食べないでええええ！！」

おそらく、ハンタースパイダーに喰われる寸前の恐怖が蘇ったのだろう。頭を抱えて大泣きし始める。

「もう大丈夫だよ落ち着いて。君を食べたクモはやっつけたから、怖がらなくていい」

僚はパニックになったピクシーをこれ以上脅かさないうちに、いつもより1オクターブは高い声で、優しく静かに語り掛けた。

「…………え？…………ひっく…………ニンゲン？」

ピクシーは顔を上げ、丸い瞳を更に丸く見開いて僚を見つめた。

「…………言葉分かるの？」

「ん？ ああ、そうだね。ちゃんと分かるよ」

僚の掌の上で半身を起こし、不思議そうにちよこんと首を傾げたピクシーだったが、すぐにまた眉根を寄せ、不安げな表情になった。

「……ニンゲンは……わたしたちを捕まえて、籠の中に閉じ込められて聞いたの……」

「ああ、それで……」

僚も聞いた事がある。

捕獲が禁止されているピクシーだが、好事家の間では高値で取引される為、違法な捕獲が後を絶たないらしい。

「大丈夫。君を捕まえたりしないよ」

「ほんと？」

僚は微笑んで大きく頷いた。

「いじわるしない？」

「しないよ。ほら、飛べるかい？」

僚はそつと掌を開いた。

ピクシーはパタパタと羽を動かしてほんの少し浮き上がったが、すぐにまた掌の上に降りて力なくへたり込んだ。

「……まだ、上手く飛べないの……」

さっきまでクモの腹の中に閉じ込められていたのだ、体力も魔力も戻っていないのだろう。

「暫くそこにいて」

僚はピクシーを自分の肩に乗せ、空いた手をハンタースパイダーに向けた。

「それ、死んでる?」

僚の髪をがっしりと掴み、ピクシーが震えた声で尋ねた。

「大丈夫、死んでるよ」

横たわるハンタースパイダーを軽く蹴り、何の反応も無い事を怯えるピクシーに確認させる。

「……ね」

ピクシーは納得したように頷いたあと、きよろきよろと辺りを見渡した。

「他に誰もいない……一人でハンタースパイダーをやっつけたの?」

「そうだけど、どうして?」

ピクシーは驚いた顔で、僚を見つめた。

「すごい。普通、ハンタースパイダーをやっつけるにはパーティー? を組んで何人かで一緒に戦うの」

「へえ、そうなんだ」



僚は口元を緩め答えたが、ピクシーの言葉を真に受けてはいなかった。

龍脈から復活した後、身体能力が強化されたとは言え一撃で倒せた相手だ。

それでも小さなピクシーからすれば、怪獣みたいなものなのだろうが。

「さ、とりあえず此処を離れようか」

僚は、ハンタースパイダーをガイアストレージに収納した。

「空間魔法……マジックボックスを使えるの？」

「えっと、ああそうだね」

「わたしも使えるの、でもこんな大きいのは無理なの」

ガイアストレージが果たして空間魔法なのか、僚にはよく分からなかったが、説明も面倒なのでそう答えておくことにした。

「じゃあ行くよ、しっかり掴まってて」

ピクシーが僚の肩でこくりと頷く。

僚は未だ深い夜の闇に包まれた森の中を、しなやかな野生動物の様な身のこなしで駆け抜けた。



【第19話】俺の名は……君の名は？（前書き）

H30/03/03

本日2話目の更新です。

【第19話】俺の名は……君の名は？

「この辺りでいいか」

10分程森の中を走り、適度に開けた場所を見つけた。夜明けまではまだ時間があるだろう。

色々とあり過ぎて完全に目が冴えてしまったが、ゆっくり考える時間が欲しかった。それに【暗視】があるにしても、これ以上魔物に遭遇するのも面倒だ。

僚は腰を下ろし集めた枯れ枝に火を着けた。相変わらず、ガソリンに引火した様な炎が巻き上がる。

「今の……アリュマージュなの？」

ピクシーが炎の勢いに驚いて目を丸くする。

「え？ ああ、そうみたい。ま、気にしないで」

ピクシーは僚の肩から、膝の上にひらりと移動し、上目遣いにと見つめた。

「不思議なの、貴方からは魔力が感じられないの。それに暗闇の中をあんなに早く走れる、まるで見えてるみたいなの」

「それも、気にしないでくれると助かるかな」

実際、自分でもよく分かっていない。

ピクシーはちょこんと頷いて、僚の膝に腰を下ろした。

「夜明けまでまだ間があるから、暫く眠るといい」

僚は何気なく言ったのだが、ピクシーは急に眉根を寄せ不安げな表情を浮かべた。

「……寝てる間に……どっかに行っちゃわない？」

一人にされるのが、よっぽど怖いのだろう。あんな目に合えば当然と言えば当然だが。

「大丈夫、何処へも置いていかないよ。明るくなるまでは一緒にいるから安心して」

僚の言葉に安心したのか、ピクシーは自分の腕を枕に横になり、暫くすると可愛い寝息を立て始めた。

「さてと……」

僚は、ピクシーが眠ったのを確認すると、【暗視】を解いた。

辺りが夜にふさわしい闇に包まれる。

「まずは、メニューから……」

【メニューをひらきますか？ YES/NO】

僚は迷わずYESを選んだ。

【メニュー】

『ステータス』

『固有スキル』

『スキル』

『魔法』

『アビリティ』

『ガイアストレージ』

『ギフト』

メニューの文字の後に、パソコンやゲーム画面の様なタブが並んでいる。

「とりあえず、ステータスかな」

『ステータス』

“ 明日見 僚 ？ ”

称号 ？？？ 龍脈からの帰還者 異世界の旅人

年齢 17歳

魔力 0

魔力量 0

固有スキル：翔駆 ガイアストレージ 解析 完全再現 抵抗

スキル：無詠唱 並列思考 麻痺耐性 暗視

魔法：火、土、雷、光、無、生活

アビリティ：真力

ギフト：生々流転

「……また、初っ端おかしなの出たぞ……」

色々と変わってはいる、が。

「名前の後ろのひょってなんだよ……」

【特定に時間を要します。任意に変更が可能です。回数制限無し】

「え？ 俺の特定に時間が掛かる？ なんで？」

それにもう一つ。

「変更可能って、名前を自由に換えられるって事か……こっちは便利かも」

勇者たちから逃げるなら、偽名を使い別人に成りすます方がいいだろう。

「あと……うん、称号はどつでもいいな」

相変わらず魔力、魔力量共に0。

どうやって魔法を発動しているのか分からないが、ここまでくるともう気にしたら負けだ。

そう思った。

「うん、気にしたら負けだ」

翔駆、ガイアストレージ、解析は使ったから分かる。

『固有スキル』

【完全再現：一度見た魔法・特殊技能を再現出来ます。但し魔法は発動の過程まで見たものに、特殊技能は攻撃を受けたものに限ります】



す】

「それで……魔法が使えるようになったのか……それはいいとして、特殊技能は攻撃を受けたものって……覚える前に死ぬんじゃないか？」

【抵抗：魔法・特殊技能及び状態異常の攻撃を受ける事によって、その攻撃に対する耐性を得る事が出来ます】

ゲームの様に即死系とか、腐食系とかあったらどうなるのか。

「だから、死ぬって」

『スキル』

【無詠唱：魔法を詠唱無しで発動する事が出来ます。詳しくは『魔法』の項目を参照して下さい】

【並列思考：幾つのも思考を同時に行う事で、別系統の魔法を同時多発的に発動します】

【麻痺耐性：麻痺攻撃を完全にレジストします。魔法・薬物・ガス等攻撃の種類は選びません】

『魔法』

イメージ、又はメニューから発動する事が出来ます。

【火：フレアバレット】

【土：メタルバレット】

【雷：サンダースピア】

【光：セイクリッドリュミエール】

【無：マジックアロー】

【生活：洗淨 着火】

確かに一度見たものばかりだ。だがおかしな点もある。

聖系統である治癒魔法がリストに無いのだ。

「何度も体験したのに、なんでだろ？……ま、そこまで万能じゃ無  
いて事かな」

これだけでも十分チートと言える。最初に比べれば大変な進化だ。

『アビリティ』

【真力：魔力・霸力・理力を同時に行使出来ます。但し霸力については現在未修得です】

そしていよいよ一番知りたい項目の番だ。

『ギフト』

【生々流転：世の中の全ての物は、次々と生まれ時間の経過とともにいつまでも変化し続けていく】

「……………それ……………四字熟語の説明ですよね……………」

まるで辞書そのままだ。能力については、一切説明する気がないらしい。

「自分で答を探せって事かな？」

溜息交じりに呟いてはっと気が付いた。

「……って、これ誰が解説してるんだ？」

【セクレタリーインターフェイスです】

「……そうですか……」

つまり、スマートフォンとかの音声ガイドみたいなものだろう。

「後は、身体能力補正と……覚醒が消えてる……」

最後に賢者の石板で確認した時、覚醒の項目が消えていた。その時はあまり気にしなかったのだが、何か意味があるのだろうか。

「呪いの覚醒だったのか……まさか魔神の覚醒とかじゃないよな」

【覚醒については不明です。身体能力補正については、現在五感を含む体力、筋力、耐久力、持久力等の身体能力が超強化されているため消失しています】

「……超……」

僚は握った右の拳をじっと見つめた。

「……なんかもう、人間かどうかわ怪しくなってきたな……」

まるで、40年以上続く変身ヒーローの様だ。

冒険者として生きる為、勇者たちから逃げる為には都合がいい訳だが。

「これ以上考えるのはよそう……」

気が付くと、東の空が白み始めていた。

辺りがすっかり明るくなり、朝を告げる小鳥の音が響き渡る。

ピクシーは目を開けると、半身を起こして大きく伸びをした。

「目が覚めた？」

ピクシーはきょろきょろと周りを見渡し、僚の顔を見上げた。

「……おはようなの。もしかして、ずっと起きてたの？」

「ああ。また魔物に襲われたら困るからね」

何でもない事のように笑う僚の姿に、ピクシーは僅かに残っていた警戒心を解いた。

この人は信用出来る……。

ピクシーはふわりと羽を広げ、僚の顔の前に浮き上がった。

「貴方はニンゲンだけどいい人なの。助けてくれてありがとうなの、です」

ペこりと頭を下げる仕草と変な敬語が妙に可愛い。

「気にしないでいいよ。偶々倒した魔物の中に君が居ただけだから僚はゆっくりと立ち上がって、木々の間から見える空を見上げた。

「いい天気だ、俺はもう行くからお家にお帰り。魔物に気を付けてね」

背を向けて歩き出した僚の目の前に、ピクシーは慌てて回り込んだ。

「待つの、ピクシーは受けた恩には必ず報いるの」

確かに、そういう話は聞いた事があった。この世界に来てからか、元の世界で何かの本で読んだのかは、はっきり覚えていないが。

「ははは、返して貰う程の事じゃないさ。さつきも言ったけど偶々だしね。もしどうしてもって言うなら、そうだな。いつかまた会った時、俺が困っていたら手を貸してよ」

ピクシーは少し考えて、ぶるぶると首を振った。

「ダメなの、ここで別れたらきつともう会えないの。だから何でも一つ、望みを言っただけなの」

「え？ 何でもって、そんな事が出来るの？」

僚は思った疑問を素直に口にした。

どう見てもこの小さなピクシーに、人の望みを何でも叶えるような力があるとは思えない。解析でもそんな能力は表示されていないかった。

ピクシーは俯いてもじもじと膝をすり合わせる。

「……………今は……………ムリなの……………で、でも、ユルティーム・ピクシーになればきつと出来るのっ」

力説するが、そのユルティーム・ピクシーとやらになるのに、どれ位時間が掛かるのだろう。

「えっと、じゃあ一緒に来るかい？」

「いいのっ？」

ピクシーは咲き誇る花のような笑顔を浮かべた。

「ああ。俺も一人で退屈してたところだし。それに、旅は道連れって言うしね」

「ありがとうございます。あの、名前を教えてくださいの、です」

「俺は、あす……」

このピクシーが信用出来ない訳では無い。だが、これからは別人として生きていく方がいいだろう。

「アスカ、シリユー・アスカだよ。宜しく」

【固有名をシリユー・アスカに変更しました】

セクレタリーインターフェイスさん、相変わらず仕事が早いですね。

「えっと、君の名前は？」

「ピクシーに固有名はないの、貴方が付けてくれたら嬉しいの」

僚改めシリユーは、ピクシーを姿に目をやった。

透き通る様に輝く翠の髪と瞳。美しく整った顔にギャップのある可愛い話し方。



「じゃあ、翡翠、ヒスイって言うのはどつ？」

「ヒスイ……いい名前なの」

名前を付けて貰ったのが余程嬉しかったのか、ヒスイはきらきらと星を振り撒く様に飛び回った。

「ヒスイは頑張つてユルティーム・ピクシーになるの、です。それまで精一杯ご主人様にお仕えするのです！」

「うん、今なんか、不穏な事言つたね。何？ お仕えするつて。それとなんでご主人様呼びになった？」

意味不明は、生々流転とセクレタリーインターフェイスだけで充分いっぱいだった。

ヒスイはちょこん、と首を傾げた。

「ご主人様はご主人様なの、です！」

何故か、ヒスイが力強く宣言した。それ以外の選択肢はあり得ない、とばかりに。

「うん、なんかもういいや……」

喜びいっぱいヒスイを肩にのせ、シリューは森を抜ける為歩き始めた。



【第20話】素敵です！ ご主人様

「フレアバレット！」

シリユーの放ったラグビーボール大の炎の塊が、逃走しようとするゴブリンの背中に命中し、その上半身を跡形も無く消し去る。残った下半身はそのまま数歩進み、やがて力なく倒れた。

「随分慣れて来たけど……」

朝から2時間程歩いただろうか。

時折現れる魔物を魔法の練習がてらに倒しながら、シリユーは森の中をさまよっていた。

「すごい。フレアバレットは初級魔法で普通あんな威力ないの。ご主人様のはおつきくてすごく激しいの、です」

「うん、ヒスイ。言い方おかしいからそれ」

だがヒスイの言う通りだった。

通常フレアバレットは拳程の大きさで、ゴブリン等最下級の魔物でも倒すのには数発が必要となる。

桁外れの魔力を持つ葉月ほののなら、一撃で倒せる威力を出せるが、それでもゴブリンの身体を穿ち燃え上がらせる程度だった。

所詮初級魔法とはそのレベルなのだ。

いやそのレベルの筈なのだ。

なのにシリユートのフレアバレットは、その常識を大きく逸脱していた。

最初に発動した時、その夕日の様な赤い火の玉は直径3mを超え、危うく森林火災を起こすところだった。

そもそも魔力の無いシリューには、魔力の調整はおろか魔力そのものが理解出来ていない。

それでも何度が魔法を使い、試行錯誤の結果ようやく分かってきたのは、繊細なイメージを創り上げるといふ事だ。

おかげで最初は直径3m以上の赤い炎だったものが、バランスボール並みのオレンジ色、そして今はラグビーボール大の白に近いオレンジ色と、随分小さくする事が出来る様になってきた。

「…………でも、威力がなあ…………」

どうやら魔法一発の大きさは小さくなくても、エネルギーの総量自体は変わらないらしい。

結果、エネルギーが圧縮された分、高温・高密度となり、ゴブリンの上半身を魔核ごと消し去る程の威力になった。なってしまった…………。

「これじゃあ、売れる素材も残らないよ…………」

シリューは下半身だけになった、ゴブリンの死体を眺めて溜息をついた。

「もつと練習しないとダメだな」

大きさ、威力に加え、命中精度にも問題があった。

静止している標的でも僅かにずれるうえに、標的が動いている場合の命中率は3割程度だ。フォレストウルフ相手にはほぼ当たらなかった。

目線の動きと魔法の発動のタイミング。おそらく、それが命中精度に関係している筈だ。

「次からはその辺を意識してみるか」

役に立ちそうもない、ゴブリンの死体をガイアストレージに納め、何となく歩き出したシリューは、ふと思いついた事をヒスイに尋ねる。

「ねえヒスイ。君は森に詳しいんじゃないのか？」

ピクシーは別名、森の妖精とも呼ばれている。彼女に聞けば、この森が一体何処なのか分かるのではと思っていたのだ。

「……ここは、ヒスイの居た森じゃないの、です」

「え？　じゃあ、他の森からきたのか？」

シリユートの肩に立ち上がって、ヒスイはじつくりと辺りを見渡した。

「ヒスイはアストワールの森のピクシーなの。……でもここは、多分エラールの森……なの」

匂いや直観でその森の名前が分かるのは、ピクシーに備わった能力らしい。

「……ヒスイは、どうやってこの森に来たんだ？ やっぱりその羽で飛んできたのかい」

翔駆を使った時に確認したが、この森はかなり広大な面積を持っている。

アストワールの森との位置関係は分からないが、ピクシーの小さな身体と薄い羽根で移動出来る距離とは思えなかった。

ヒスイはぶるぶると首を振った。

「……ワームホールに飲み込まれたの」

「ワームホール？」

ヒスイの言葉から、いきなり興味を惹かれる単語が出た。

「ニンゲンやエルフは、“森の扉”と呼んでるの」

ヒスイの説明によると、ワームホールは大きな森の中で極々稀に起こる魔力現象で、別々の森を結ぶトンネルの様なものらしい。

原理は分からないが森の中にその入口が突如として現れ、付近にいるものを大きさに関係なく飲み込む。飲み込まれたものは、遠く離れた別の森の出口から吐き出される。

トンネルは一方通行で出口から入る事は出来ず、生物を飲み込んだ瞬間に消えてしまう。

前兆も予兆も無く予測も出来ない為、遭遇した場合まず逃れられない。そして、飲み込まれた者の大半に待つのは、死である。

それもそうだろうかと、シリューは思った。

いきなり勝手の分からない見知らぬ森に飛ばされるのだ、余程の運が無い限り生き残るのは難しいだろう。

シリューは肩に乗るヒスイを横目に見た。するとヒスイは何かを察した様に舞い上がり、シリューの目の前に飛びそれからちよこんと頭を下げた。

「ヒスイはとても運が良かったの。ご主人様がいなかったら、ヒスイはきつと死んでたの。だから、改めてありがとうなの、です」

シリューはくすりと笑った。何とも律儀なピクシーだ。

「さつきも言ったけど偶々だし、そんなに恩を感じる事ないんだけどなあ」

「違うのっ、これはきつと運命なの、ですっ」

ヒスイが胸の前で両手の拳を握り、興奮ぎみに力説する。

「……なんか、段々大げさになっていく様な……」

それにしても興味深いのはワームホールである。

ヒスイの話を書く限り原因や規模は別としても、現象自体は元の世界のものとほぼ同じに思えた。

魔力が絡むのか、重力が絡むのか……。機会が出来ればぜひ研究してみたいものだ。

そんな事を考えていた時だ。遠くから微かに聞こえてくる音に気が付いた。

「ん？ ヒスイ……今音が聞こえなかった？」

ヒスイは手を添えじつと耳を澄ます。

「……なにも聞こえないの……」

「気のせいかな……」

そうでは無く、おそらく超強化された聴力のせいだろう。意識しなければ聞こえ方は普通と変わらないが、非日常的な音や警戒が必要な音は敏感に拾う。

シリューは目を閉じ、聞こえてくる音に集中する。



鳥の声、木々のきしみ、風が揺らす枝葉や草。雑多な音の中から、目的の音だけを選び探り出す。

そして。

「やっぱり聞こえる」

狂った様に疾走する馬車の車輪の音と、それを追い掛ける馬の蹄の音。

「誰か、襲われてる？」

数も状況も詳しくは分からない。

かなりの速度が出ている事から、馬車は森を抜ける街道を進んでいるのだろう。

そして、集団に続く音が聞こえないという事は、魔物に追われて集団で逃げている訳では無く、逃げる馬車を馬に乗った一団が追い掛けていると思われる。

この場合一番考えられるのは。

「野盗に襲われてるのか……」

放っておくという選択肢もある。気付かなければそれでもいいだろう。

だが気付いてしまった。

気付いた以上、自分に出来る可能性があるのなら、やらないという選択肢は無い。陸上でもこの世界に来てからでも、シリユーはずつとそうして来た。

偽善者……。何処かの誰かからはそう呼ばれるのかもしれない。

「……何でもいいさ。俺は、やりたい事をやるだけだ」

ただ、困った事が一つ。音が遠すぎてはつきりした方向と距離が掴めないのだ。

「参った、闇雲に走ってもなあ……」

そう思った時。

【固有スキル、探査による探知・測距を行いスコープに表示します。対象を設定して下さい】

いきなりの新スキルに少し驚く。が、ぐずぐずしている暇は無い。

「対象は音の発信源だ、頼むぞ」

すると、視界の右上部に円形画面が表示され、その画面の左上に黄色い輝点が現れた。

これは、自分の位置を中心として、探知した目標を鳥瞰的に表示する、リーダーのPPIスコープそのままだ。

【前方11時の方向に対象物。距離5・283km】

約5km、間に合うかどうかギリギリのところだろう。

「ヒスイ！」

「は、はい、です」

真剣な顔で名前を呼ばれた事に、ヒスイはびくんと肩を震わせた。

「全力で走るから、ここに入ってて」

シリューに促され、ヒスイは胸のポケットに身を潜める。

「狭いけど、暫く我慢してくれ」

指先でヒスイの頭を撫でると、シリューは全力で目標に向かい走りだした。

「……真剣な顔のご主人様も……素敵なの……」

ポケットから顔だけ出したヒスイは、凄まじい勢いで流れて行く風景を眺めながら囁いた。

【第21話】絶望を覆す！ 思いは今

「止まるなっ、走れ！」

豪華な装飾の施された馬車の御者台で、必死に手綱を取りながら、騎士のクリスティーナは生き残った者たちに叫んだ。

「何としてもナディア様をお守りするのだ！」

油断があつた訳では無い。

だが、たかが野盗と侮つてはいなかったか？

野盗など我々の敵では無いと。

そんな思いがクリスティーナの頭を過る。

電撃的、と言える襲撃だった。

4台車列で進んでいた先頭の馬車が、突然攻撃を受けた。

護衛兵一個小隊20人のうち10人が、ものの十数秒で命を落と

した。

攻撃方法はおそらく、雷系の特殊技能による集中砲火。賊に魔物使いが混ざっているのだろう。

それ程広くない街道で先頭車両が止められた事により、続く3台も停止せざるを得なくなった。

4台目の馬車から、10人の護衛兵が素早く展開。だがこれは悪手だった。

雨の様に降り注ぐ矢に隊列を乱された兵士たちは、その直後、左右の森から飛び出して来た野盗の集団によって、殆ど抵抗も出来ぬまま壊滅した。

事ここに至って、漸くクリスティーナは痛感する。

これは、ただの野盗の集団などでは無い。

訓練され、軍隊並みに統率されたゲリラ兵団なのだ。

半年程前から、このエラールの森に凶悪な野盗団が出没するようになった。

話は聞いていたし、注意喚起もされていた。

その為に今回の任務では、一個小隊20人の兵士と、クリスティーナを含む騎士6人を護衛として随行させたのだ。

数では、いや、戦力でもクリスティーナたちが上回っていた。

しかしそれは広い戦場において、軍同士が正面から対峙した場合である。

今回の様な見通しもきかず、十分な陣形もとれない森の中でのゲリラ戦では、数や戦力差はそれ程問題にならない。

倍の数の兵士がいたら……。

クリステイーナは他の騎士たちと共に、賊を切り伏せながら思った。

だが、例えそうであったとしても、戦況はさほど変わらなかっただろう。

問題は、想定外だった魔物使いだ。

「がっ……」

「っは、ぐ」

2人の騎士が身体を激しく痙攣させながら倒れた。

一瞬、クリステイーナの目に映った雷光。

「やはり雷系……エレクトロキューション殺撃放電か」

だとすれば、敵の使う魔物はかなり上位のものだ。しかも1頭や

2頭では無い。

クリステイナーを含め騎士たちは、魔法防御力の高いミスリルの鎧を身に着けている為、普通なら致死性のエレクトロキューションでも、一撃だけなら気を失う程度には耐えられる。

クリステイナーは倒れた騎士たちに目をやる。

一緒に訓練を受け、一緒に戦ってきた仲間たち。

「すまない」

目を背け、仲間たちへの思いを振り払い命令を下す。

「撤退する！ 騎乗！ 騎乗！ ナディア様を守れ！」

心臓に矢を受け、絶命した御者を押しつけ御者台に座ったクリステイナーは、守るべき主人を乗せた馬車を即座に発進させる。

「がっ」

騎士の1人が走り出した馬から落ちて動かなくなった。

「星月夜に輝く瞬刃の火炎、緋色に染まり、かの敵を貫く槍となれ……フレアランサー！」

クリステイナーは行く手に立ち塞がる野盗に、炎の中級魔法を放つ。

僅か20歳で騎士団第3隊の隊長に任命された彼女は、剣と槍以



外に、魔法使いとしての才能にも恵まれていた。

「いくぞ！ 続け！」

森を抜けるには、全力で馬車を走らせても1日は掛かる距離だ。

それまで馬たちが持つ筈がない。

「くっ。快速の矢、瞬け、マジックアロー！」

何度か道を塞ぐ野盗達を、魔法でやり過ごし馬車は疾走する。

どれ位走ったのか、時間の感覚も麻痺している。

クリスティーナが振り向くと、既に仲間の姿は無く、後方を追いつがる野盗達が見えるだけだった。

クリスティーナは俯き、ぐっと唇を噛みしめる。

「……………私は……………諦めないっ……………たとえこの身が裂けても、任務を全うする……………」

もとより命を惜しむつもりは無い。

騎士として主に忠誠を誓った時、守るべき者の為に命を捧げる覚悟を決めた。

「そんなっ、行き止まりか！」

クリスティーナは慌てて手綱を引き、馬車を止めた。

街道を走っていた筈が、いつの間にかこの開けた場所に誘導されていたらしい。行く手には木が生い茂り、道は消えていた。

万事休すだ。

クリスティーナは馬車を降り、追ってくる野盗達に向き合い剣を抜いた。

「ナディア様、私が戦端を開きます。その際にお逃げ下さい。どうかご無事で」

それは最早、単なる望みであつた。

事此処に及んで、生き残る術がある筈もない。

いや、女である以上、戦って死んだ方が苦しみは少なくて済むのかもしれない。

「……私も……ナディア様も……」

だが、クリスティーナは首を振り、その考えを切り捨てる。

「私は絶望なんてしないぞ……」

こうなったら、1人でも多く道連れにしてやるぞ。

「こいつ下郎ども！ 鬪志の炎、十六夜の……っ！」

クリスティーナの思いは、誰にも届かなかった。

呪文を唱えようとした彼女を遮ったのは、見えない位置からのエレクトロキューション。

「あ、くっ……」

だが彼女は倒れない。

膝をつき、剣を杖代わりに身体を支え、近づいて来る男をねめつける。

「ほう、女か……。こりゃあ思わぬ収穫だぜ」

馬を降り剣を抜いた男は、その凶暴な顔をいやらしく歪める。

「クリスティーナ！」

クリスティーナはその声に見開き動揺する。

ナディアが事もあるうか、駆け寄って来たのだ。

「い、いけませんナディア、様……は、はや、く、お逃げください」

ナディアは、そっとクリスティーナの肩を抱き首を振った。

「貴方はよくやってくれました。もういいのです。……ね」

ナディアの視線はそつとクリスティーナの剣へと移る。

クリスティーナは理解した。

それは主の望み、そして最後の命令。

ゆつくりと頷いたクリスティーナは、剣を握る手に力を籠める。

「おいおい、そつはさせねえぜ！」

男が、2人の意図に気付き走りだす。

その時。

凄まじい轟音と共に焼け付く様な熱風が、クリスティーナとナディアの頬を薙いだ。

クリスティーナは目を開きゆつくりと顔を上げる。

そして、しっかりと自覚した。それが、今この状況を、迫りくる運命の全てを覆す、力そのものだという事を。

クリスティーナの思いは、届いていたのだ。

今そこに立つ、その人に。

彼女の目の前には、燃え上がる炎を背に、涼やかな笑みを浮かべた少年が立っていた。

「間に合って良かった」

少年は絶望と希望とを隔てた、その炎に向かって飛び込んで行った。

【第22話】参上！

間に合うかどうかギリギリの所だった。

馬車を見つけた時、シリユーの目に飛び込んで来たのは、剣を手にした男が、馬車の横で蹲る2人へ近づいて行く光景だった。

どちらを倒すべきかは一瞬で判断がつく。だが、走っても間に合わない。

魔法は、駄目だ。今の命中精度では、助けるべき相手も巻き込む恐れがあるし、例え相手が野盗とはいえ人を殺す覚悟は無い。

そう思った時、またしても、セクレタリーインターフェイスのガイドが表示された。

【ターゲットスコープ（光像照準システム）を起動します。目標の座標をセットして下さい】

考えている暇は無い。シリユーは二人の男の真ん中に赤いマークを目線で移動する。

【ロックオン、魔法発動可】

「いけえええ！ フレアバレット！」

バランスボール大に調整した炎が、寸分変わらず目標の位置に着弾し、一気に人の背丈の3倍以上の火柱を上げる。

剣を持った男は、炎の勢いに押され後ずさる。

「なっ、魔法使いかつ、何処だ！」

「ここだよ」

声と同時に、燃え盛る炎の中から影が飛び出し、男を打ち据える。男は何が起きたか理解出来ぬまま吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「何だっ」

「誰だてめえ！」

野盗の仲間達は次々と馬を降りて剣を構える。数は12人。

吹き飛ばされた男も、起き上がりその列に加わった。殺さない様に加減したのだが、少し力を抜き過ぎた様だ。

「今ので1人は潰しておきたかったんだけどな……」

シリユートの眩きは、野盗達には聞こえなかった。

「お前、誰だ……」

先程シリユートが殴り飛ばした男が口を開く。どうやらこの男が一団のリーダーらしい。

「……正義の味方ってとこかな……」

野盗達から一斉に笑い声が上がった。

「正義の……ぷぷっ」

「こいつ、馬鹿じゃねえのか」

「くくっ、腹いてえ、くくくっ」

シリユートはその様子に眉をひそめる。

「あ、やっぱ、正義の味方は無いか……」

リーダーの男が歩み出る。

「大方馬車の中に、もう一人護衛が潜んでやがったんだろ。だがミスったな？ さっきの魔法の隙に逃げ出してりゃあ、生き残る事も出来たろうに」

男はニヤニヤと下卑た笑い浮かべる。自分達が圧倒的有利な立場にいると確信しているのだろう。



「……だな。お前らが」

シリューは右の口角を上げて笑った。あからさまに相手を挑発する態度だ。

「ちっ、殺せ」

リーダーの男は手下たちに顎でしゃくり指示した。

野盗達は剣を振り上げ一斉に襲い掛かる。

だが遅い。

ポリポッドマンティスやハンタースパイダーに比べれば、まるでスローモーションだ。

シリューは正面の男が剣を振り下ろす前に懐に入り、鳩尾に掌底突きを打つ。さっきよりほんの少し力を入れるように。

男の足が衝撃で宙に浮く。1人目。素早く切り返し右の男を蹴り飛ばす。2人目。

男が飛んで行く先にいるもう1人の脇腹へ、左フック。3人目。身体を回転させ、右脚で思い切り踏み切る。

今度は左へ。

僅か1歩で間合いを詰め、右の縦拳を放つ。これで4人。勢いをそのままに5人目を体当たりで弾き飛ばす。

そして、1人目の男が地面に転がった時、シリューは初めに立っていた位置に戻り、大きく息をついた。

全ては一瞬。

リーダーの男は、たった今起きた出来事に目を剥く。

「……な、何だ、今は……」

男の目には、ただ影が流れたようにしか見えなかった。

「ザルツの旦那……どうします」

リーダーの隣に立った男が、目に明らかな怯えを映して聞いた。

ザルツは冒険者崩れで粗暴な男ではあったが、決して無謀でも馬鹿でも無かった。

今、目の前で涼し気な笑みを浮かべているこの少年が、自分達より遙かに強い事を認められるくらいには。

「……お前、魔法使いじゃ無かったのか……」

「あれ？ 正義の味方って言わなかったっけ」

シリューはわざと惚けて見せた。

「さてと、で、どうする？ 大人しく捕まるか、それとも……」

一旦言葉を切り、シリユーは倒れて気を失っている男達を見渡す。

「こいつらと並んで昼寝するか、好きな方を選んでいいよ」

「ほう、随分とお優しいじゃねえか……」

それには答えず、シリユーはじっと男を見据える。

ザルツは剣を鞘に納めると、指を咥え口笛を鳴らした。

「けどな……悪いが俺達はどっちも選ばねえよ」

そう言っつて右腕を高く掲げ、人差し指を立てた。

そして、ゆっくりと腕を下ろし指をシリユーに向ける。

妙に芝居がかったその行動に、シリユーは眉を潜めた。

「さあ！ エサの時間だぜえ！」

ザルツが叫んだ瞬間、唸りを上げて迫る灰色の影がシリユーに襲い掛かった。

【第23話】戦闘開始！ スキル変化！

クリステイーナは驚愕した。

目の前で起こった信じられない様な出来事に。

魔法による炎が消えた時、少年は剣を構えた野盗達と、武器も持たずに対峙していた。

そして、瞬きをする程の僅かな間に、5人の男達が宙を舞った。

何が起こったのか、少年が何をしたのか、騎士であるクリステイーナでさえはつきりとは分からなかった。

だが、クリステイーナが本当に驚くのはこれからだった。

「ぐっ！」

シリユーは咄嗟に腕で顔を覆い、辛うじて頭への直撃をガードしたが、それでも軽く10mは吹き飛ばされる。

完全に不意を衝かれた。

いやそれこそ、ザルツと呼ばれた男の狙いだったのだろう。男の芝居がかった仕草に気を取られ、周への警戒を怠ってしまった。

「な、なんだ……」

地面を2回3回と転がった後、半身を起こしシリューは襲ってきた相手を見据える。

灰色の体毛に黒い斑点。猫科の猛獣思わせる姿。頭に二本の縦に並んだ角を持ち、大きさはフォレストウルフの倍以上あり成牛並みだ。

「あ、あれは、グ、グロムレパードっ」

クリスティーナは声を震わせ呟いた。

自分達を壊滅に追いやった魔物。それがよもやグロムレパードだったとは。

単体でもブルートベアより上位のE級。

1体につき最低その3倍の人数で対処すべき魔物、それが群れをなしている。

「くはははっ、お前の相手はこいつらだ！」

ザルツが高々に叫ぶ。

周りはいつの間にかグロムレパードだらけ、20頭はいるだろう。

先程シリューを襲った個体が、未だ立ち上がっていない獲物に止めを刺そうと地を蹴る。

ハンターズパイダーを上回る速さ。

一瞬で間合いが詰まる。

グロムレパードは人の頭程もある鉤爪の生えた前脚を、雷光の如く振り下ろす。

人の身体など粉碎してしまう程の一撃。

だがシリューは体勢の整わないまま、左腕一本で受け止めて見せた。

「悪いな、そう何度も喰らってやれないんだ」

渾身の力で、グロムレパードの顎に右アッパーを放つ。

下顎もろとも、頭の殆どが吹き飛ぶ。

知覚もないまま、一瞬のうちに命を刈り取られたグロムレパードは、どさりと崩れ落ちる。

「……それに、魔物相手なら手加減は必要ないしね」

シリューは立ち上がり、取り囲んだグロムレパード達をねめつけた。

「ヒスイ」

「はい、なの」

ヒスイがぴよこりとポケットから顔を出す。

「姿消しを使って、空の高い所に逃げておいて」

負ける気はしないが、ヒスイに気を遣う余裕までは無いだろう。

「はい、です。ご主人様。気を付けてなの、です」

相変わらずの変な敬語で、ヒスイは姿を消し、すうっとポケットから抜け出した。

同時に、1頭のグロムレパードが、牙を剥いてシリューに迫る。

シリューは土煙を上げ駆け出す。

危険を察知したグロムレパードは淀みない動きで右へ。

シリューは透かさず追隨し、左前脚の付け根を狙い貫手を打ち込む。

皮膚を裂き、肉を抉り、心臓を穿つ。

「ゴアアアアッ……」

断末魔を上げて倒れるグロムレパード。

シリューは半ばまで埋まった腕を抜き、血を払う。

「きゃああー！」

叫び声に振り返ると、2人の女性に向かって1頭のグロムレパードが飛び掛かるうとしていた。

【ロックオン 魔法発動可】

「マジックアロー!!」

轟音を上げて飛翔する透明な鏃が、グロムレパードを撃ち落とす。

威力は抑えたつもりだが、まだまだオーバーキルだ。

「大丈夫ですか？」

シリユーは2人を背後に庇う位置を取り、振り向いて声を掛けた。

「は、はい、な、何とか」

ナディアがクリステイーナの肩を抱いたまま応えた。

「……数が多いな……」

シリユーが呟いた通り、グロムレパードの数は残り17頭。しかも、3頭が瞬く間に倒された事で警戒を強め、今はあからさまに距離を取っている。こちらから動けば、その隙に後ろの2人を襲うだろう。



グロムレパードを倒せたとしても、それでは本末転倒だ。

「くらえ！」

1頭にロックオンし、マジックアローを放つ。

「な、躲した？」

だが、音速で迫る鏃をグロムレパードは事も無げに躲してみせた。

「これならどうだ！」

今度は、十数発を立て続けに撃つ。応援の太鼓の様に、周期的な発射音が響く。

しかしグロムレパード達は、右に左にとしなやかな動作で躲してゆく。

「って、見えてるのかっ」

見えているとして、そう簡単に躲せるものなのか。いくらグロムレパードが早いと言っても、音速を超える様な様なスピードで動いている訳では無い。

そんな事を考えている時、何頭かのグロムレパードに変化が起る。それはほんの一瞬だったが、シリユウの目がはつきりと捉えた。

グロムレパードの頭にある2本の角が光った。

次の瞬間。

全身を壁に叩きつけられた様な、激しい痛みと痙攣が襲う。

「かつ、はっ」

声を出す事も出来ない。それどころか呼吸もままならない。

“ ヤバい…… ”

さっきグロムレパードの角が光った事が関係しているのだろう。

恐らく魔法か特殊技能。

“ それにしても…… ”

【エレクトロキューションによる感電をレジストしました】

【特殊技能、エレクトロキューションを獲得しました】

「遅いよ……」

漸く痛みと痙攣から解放されたシリユーは、大きく息を吸ってあたかも目の前にいるかの様に、セクレタリーインターフェイスにツッコんだ。

「何で、痛いとか苦しいとかはレジストに時間がかかるんだよっ」

【攻撃の特性と種類、及び身体に対する影響の分析に僅かに時間が必要となります】

「……………あ、そう。時間がね……………。結果出る前に死ななきゃいいけど……………」

【心配は不要です。ギリギリで間に合います】

言い切られた。

「ギリギリかい……………」

呟いた自分の言葉に何かが引つ掛かった。

「……………ギリギリ？……………えっと……………」

その時、再びグロムレパードの角が光るのが見えた。

シリューは咄嗟に横に跳んだ。一瞬遅れて、青白い幾つもの光の筋が、シリューの居た場所に降り注ぐ。

1本1本が致死性の放電現象。

「避けて良かった。耐えられるけど痛いのは……うん、無しだな」

そして、今ので分かった事がある。

【ロックオン、魔法発動可】

「マジックアロー！」

刹那、頭上に光が輝きマジックアローが放たれる。

そしてまさに、その光が現れた瞬間、グロムレパードが動いた。

シリューがエレクトロキューションを避けた時と全く同じだ。

難しく考える必要は無い。

つまり、魔法や特殊技能は、発動前に必ず前触れが起こるのだ。

要は、その前触れが見えた瞬間に動けば、躲すのはそれ程難しく

無いという訳だ。

勿論それを見極める目と、実行出来るスピードがあつてこそだが。

「さてと、どうするかな……」

魔法を使ったところで、状況は変わらない。

ならば、イチかバチかで特攻を掛けるか。だが、助けるべき相手が死んでは、此処へ来た意味が無い。

「待てよ、魔法を滅茶苦茶に撃つて、その隙に……いや駄目だ、牽制は意味ないな……くそ、せつかくロックオン出来るんだ、ミサイルみたいに飛んでくれれば……」

そして、またしても突然。

【マジックアローに自動追尾機能が追加されました。ホーミングアローに変化します】

「……なに……それ……」

【発射後に目標を追尾・撃破します】

「いや、分かるけど……そうじゃ無くて……うん、まあいいや」

じわりじわりと包囲網を縮めるグロムレパード。

そのうちの1頭に狙いを定めロックオン。

「いくぞ！ ホーミングアロー！」

マジックアローより若干遅い速度で、魔法の鍬が飛翔する。

目標のグロムレパードは余裕でこれを避ける。が、鍬はそこから角度を変え、一度は避けたグロムレパードを捉えた。

「つぎっ！」

2発目のホーミングアローが、正確に敵を補足・撃破する。

「いけええ、っ……」

グロムレパードが一斉に動いた。次々と角を光らせる。

「まずいっ」

シリューは反転し背後に庇った2人の傍らに立つ。

「伏せて！」

2人は言われた通り地面に蹲る。

そこへ、一斉に放たれたエレクトロキューションが降り注ぐ。

「ぐっ」

右手を高く掲げ、避雷針の様に全ての放電を受ける。

痛い。ものすごく痛い。だがそれだけだった。今度は、身体が痙攣する事は無かった。

「いったいけどっ」

シリューは、グロムレパードの学習能力の高さに驚く。

これではここから動く事が出来ない。

しかし、ホーミングアローで1頭ずつ倒しては間に合わない。

グロムレパード達は何頭か犠牲になっても、確実にシリュー達を殺す方法を選んだ。

それは普通では考えられない行動だった。おそらくは魔物使いによって、強力な支配を受けているのだろう。

「くっそ、やられてたまるか！」

【ターゲットスコープ（光学照準システム）がストライク・アイ（統合目標指定システム）に変化しました。複数のターゲットを同時にロックオンする事が可能です】

「え？」

またしてもスキルの変化だ。

最早、驚きも超音速で通り過ぎて行く。

ただ、呆けている暇は無い。

【ストライク・アイ、起動】

視界に映る全てのグロムレバードに赤いマーカーが表示される。視界に入り切らないものはPPESコープ上でマーキングされた。

【ターゲットロックオン、マルチブロー（同時複数発射）での魔法発動可】



迷っている場合でも無い。

シリユーは即座に魔法を発動させた。

「いっけええええ！ マルチブローホーミング！」

シリユーの頭上に15の光が輝く。

「ファイアー！！」

一斉に放たれた魔法の鏃がミサイルの様な軌跡を描き、それぞれ捉えた獲物をほぼ同時に屠ってゆく。

後に残ったものは静寂。

倒れた5人の男。

蹲る2人の女性。

20体の物言わぬ魔物。

そして、ただ1人風に吹かれた髪を揺らし立ちすくむ少年。

「……ここまで来ると、戦闘機かイージス艦ってとこだな……俺ってホントに人間？ だよな……」

シリユーは、自分でも信じられない光景に、茫然と佇むしかなかった。

血の匂いを漂わせ、静かに風が吹く。

【第24話】驚きが……止まりません

「あ、あ……」

クリスティーナもナディアも地面に膝をついたまま、ただ茫然とするばかりだった。

5人の男達を一瞬のうちに打ち倒したその動き。

剣を極め、騎士団で3本の指に入る程の腕を持つクリスティーナにも、はつきりと捉える事はかなわなかった。

その上あの魔法だ。

マジックアローと思われるが、威力は常識外。しかも、避けた相手を追尾するなど見た事も聞いた事もない。

更には15頭ものグロムレパードを瞬殺……。

「……い、意味が分からない……」

最悪の事態は避けられた、それは理解出来る。

だが今ここで起こった事は、最早理解の範疇を超えていた。

「あの……大丈夫ですか？」

シリューが首を捻りながら、固まったままの2人に声を掛ける。

先に立ち上がったのは、ドレス姿の女の子の方だった。

「あっはいっ、大丈夫ですっ、お陰でたしゆかつ、助かりました」

……噛んだ。

シリューは聞こえなかった振りをしたが、女の子は顔を真っ赤にして俯いた。

金髪に丸く大きな目、小柄だが出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる。歳は15くらいだろうか。

余程恥ずかしかったのだろう、しばらく下を向いていた彼女は、思い出した様に顔を上げシリューを見つめた。

「も、申し遅れました。私はナディア・アントワヌ。この度は危ないところをお助け頂き、誠にありがとうございます」

ナディアは片足を斜め後ろの内側に引き、もう片方の膝を軽く曲げるカーテシーで挨拶をする。

その優雅な所作と名乗った家名から、何処かの貴族の子女だといふ事が窺えた。

「私は……つつ……」

赤い髪を揺らし、無理やり立ち上がるうとしたクリスティーナが、整った顔を歪め膝をつく。

「あの、無理しない方が……」

シリユーが手で制すが、それでもクリスティーナは立とうとする。

「いや、主の恩人を前に……座ってなど……」

騎士としての矜持なのだろうが、傷ついた者を立たせるのはシリユーの望むところではない。

「気にしないで、ってか、俺が気にします。ですからそのままです」

ナディアがクリスティーナの肩にそっと手を添える。

「さあクリス、この方もそうおっしゃっています。ね」

「は、はい……」

クリスティーナは腰を下ろし居住まいを正した。

「こんな姿で申し訳ない。私はクリスティーナ・フェルトン。貴殿のご助力に感謝する」

「俺はシリユー・アスカ。間に合って良かったです」

クリスティーナとナディアは、涼やかなその笑顔に思わず引き込まれてしまう。

2人の脳裏に、あの絶望の時、風のように現れ炎を背に微笑む姿が浮かび、目の前の少年の姿へと重なってゆく。

「……正義の……味方……」

2人が同時に呟く。

「いや、改めて言われると恥ずかしいから止めて」

あの時はついついノリで啖呵を切ったが、今思うとそれ程カッコよくは無いです。

明らかに黒歴史になりそうだった。

「ご主人さまああ」

姿消しを使い上空に隠れていたヒスイが、透明の羽をばたばたと羽ばたかせシリューの前に飛んできた。

随分と興奮している様子だ。

「すごいっ、すごいっ、ご主人さまあ！こんな初めてえ！」

「うん、ヒスイ。誤解を与える言い方はやめようか。」

何が琴線に触れたのか、ヒスイはきらきらと星を振りまく様に飛び回る。

前にも一度披露してみせたが、どうやら嬉しさを表現するダンス

みたいなものらしい。

クリスティーナとナディアが目を丸くして固まった。

「そ、それ、ピクシー……ですか？」

2人が驚くのも無理はない。

用心深いピクシーが、人前に姿を見せる事は稀だ。

ましてやこれ程人に懐くなど、クリスティーナもナディアも聞いたことが無かった。

「彼女はヒスイ。昨日知り合ったばかりなんだ」

ヒスイはシリューの肩に座り、ちょこんと首を傾げた。

それから夕方までかかって、襲撃現場の処理に当たった。  
シリューが倒した野盗の5人は、全員が心臓を刺され息絶えていた。

口封じの為に殺されたのは明らかで、身元を確認出来る物も所持していなかった。

身に着けた装備から単なる野盗では無く、元はそこそこのクラス  
の冒険者だったとクリスティーナは推測した。

それから、生存者は女性騎士、男性騎士が1名ずつ、護衛兵3名、  
御者2名の計7名。それにナディアとクリスティーナの合わせて9  
名だった。

ナディア以外いずれも重傷だったが、回復薬ポーションと女性騎士の治癒魔  
法で今は動けるまでに快復している。

馬車は最初に襲撃を受けたもの以外は無事で、荷物も殆ど手付か  
ずで残されていた。これはシリユーが、グロムレパードを瞬く間に  
殲滅したお陰で、荷物を運び出す時間が無かった為だろう。

1台の馬車に兵士たちの亡骸を乗せ、クリスティーナが氷結の魔  
法で凍らせてゆく。

その光景を見て、シリユーはどうにもいたたまれなくなり、思わ  
ず目を背けた。

余程酷い顔をしていたのだろう。クリスティーナが心配そうにシ  
リユーの顔を覗き込んだ。

「……どうかされたか？ 顔色が良くないようだが」

「……いえ……ただ、俺がもう少し早く……」

人の死に立ち会った事はあるが、これ程多くの死者を見るのは初  
めての事だ。



「貴殿が気に病むご事は無い、皆覚悟を持って任務に当たっていた。……そもそも貴殿が来てくれなければ、間違はなく全滅していたんだ。本当に感謝している、ありがとう」

クリスティーナはそう言って深々と頭を下げた。

「あ、いえ、はい。でも偶々通りかかっただけですから、気にしないで下さい。……じゃ、俺は魔物を回収して来ます。いいんですよ？」

どうも、女性に改まって挨拶や感謝されると、どう返していいのか分からず焦ってしまう。

身体能力が強化されてもこういうメンタルは元のままのようだ。

シリューはさっさと話題を切替えた。

「勿論。全て貴殿が倒したんだ。貴殿にはその権利がある……」

クリスティーナはそこでふと疑問をに思った。

「……でも、どうやって？」

大きさが成牛並みのグロムレパードは、400kg以上の重さがある。

それを20頭、合わせて8トン以上になるのだ。

「えっと、マジックボックス？ かな」

シリユーは誤魔化す様に笑って、その場を離れた。

クリステイーナはその後、今日何度目になるか分からない驚愕の光景を目にする事になる……。

**【第24話】驚きが……止まりません（後書き）**

次回更新は3月20日21〜22時頃の予定です。

【第25話】お礼を言うべきです？

「いや、いやいやいやっ。おかしいだろうっ」

クリステイナは、目の前で行われる信じられない光景に、半ばパニックに陥っていた。

原因は勿論シリューだ。

20頭ものグロムレパードをどう回収するのか、状況を考えれば魔核<sup>コア</sup>だけを抜き取り、マジックボックスに収納するのが現実的なところだろう。

素材にしても、馬車の空いたスペースに幾らかは積む事が出来る。

恩人に対して、それくらいはするつもりでいた。

ところが……である。

1頭目。丸ごと収納してしまった。およそ400kgだ。

「ほう、随分容量のあるマジックボックスだな……」

空間魔法の使い手は少なくないが、400kgの容量となるとかなり重宝される。

2頭目。

「……800kg すげいな……」

この容量となると、国中探しても10人といないだろう。

3頭目。

「ち、ちょっと待て……1トン超えたぞ、どうなってる？」

4頭目。

「おい……」

5頭目、続けて6頭目。

「おいおいおい」

粛々と回収作業を進めてゆくシリユ。そして10頭。

「……ねえクリス……私はおかしくなったのでしょうか。それとも夢でも見ているのでしょうか……」

いつの間にかナディアが、クリスティーナの隣でぽかんと口を開いて立っていた。

「大丈夫です……私も同じものが見えています……」

更に回収は続き、遂には20頭全てが収納されてしまった。

「いやっ、いやいやいやいやっ。おかしいだろうっ、いやいや絶対

おかしいっ。絶対……ぜつたい……あは、あははは……」

「パニックの後、茫然となるクリスティーナ。」

「……現実を受け止めましょう、クリス……うふっ」

だが、ナディアの目は虚ろで焦点が合っていない。

「ど、どうしたんですか2人とも、大丈夫ですか？」

回収を終えて戻って来たシリューは、まるで蠟人形のように固まるナディアとクリスティーナの顔を訝し気に覗き込んだ。

自分が原因だとは、少しも思っていないようだ。

「どうしたもこうしたもっ。き、貴殿のマジックボックスは一体どうなっているんだっ」

未だ状況に対応しきれしていないクリスティーナが、シリューに詰め寄る。

「あの、く、クリスティーナさん、近いです……」

シリューにそう言われて、クリスティーナはハッと我に返った。

身長はほぼ同じ位のシリューの顔が、それこそ息も掛かる程近くにあったのだ。

しかも迫って行ったのは自分から……。

「……大胆です……クリス……」

隣でポツリとナディアが呟く。

「ち、ちがつ、違うないけど、そうではなくてっ」

クリスティーナは顔を真っ赤にして、ぷるぷると首を振った。

「クリス、かわいい」

「ナディアさまっ、からかわないで下さいっ」

クリスティーナの顔が更に赤くなる。

きつと主従関係よりももっと深い繋がりがあるのだろう。2人のやり取りを見てシリューはそう思った。

「ですが、私も知りたいですねシリュー殿？」

ナディアが頬に指を当て小首を傾げる。

「えっと、どついう事でしょう？」

シリューには質問の意味が理解出来ていなかった。

そもそも、シリューが使ったのはガイアストレージでマジックボックスでは無い。

「容量の事だよ。1トンを超えるマジックボックスなど聞いた事が無いっ」

クリスティーナがほんのりと赤味の残る顔で腕を組んだ。

「え？ マジックボックスって容量に限界があるんですか？」

「え？」

シリユーの疑問に、ナディアとクリスティーナの2人は目を丸くする。

「……普通なら……多くても数百キロといったところなんだが……まさか、その、無制限……」

「あ、じゃあ、これで限界でいいです」

「ええええっ？」

ナディアとクリスティーナ、2人の声が重なる。

「今、じゃあ、って言ったっ？ 何そのあからさまな誤魔化し方っ」

クリスティーナが再び、興奮気味にシリユーに詰め寄る。

「く、クリスティーナさん、話し方変わってませんか？ あと顔、近いです……」

「そ・ん・な・事・よりっ！ あの体術とっ、あの魔法とっ。それからマジックボックスっ！ あと、エレクトロキューションを何発も受けて平気なところとか！ 君は一体何者っ？」



今日、クリスティーナの中で色んな常識が崩壊した。

「ひゃっ」

更に詰め寄ろうとしたクリスティーナは、足元の木の枝につまづきよろけてしまう。

シリューは、クリスティーナ支えようと伸ばしかけた手を、一瞬躊躇して止めた。

今、クリスティーナは鎧を着けていない。

触れてはいけないものが、そこに迫っていたからだ。

その結果。

ぼふんっ。

シリューの胸の辺りに、はつきりと柔らかい感覚……。

クリスティーナの赤い髪が、シリューの頬をくすぐる。

ほぼ密着状態で、傍からみれば完全に抱き合っている様にしか見え  
ない。

「あ、あの、クリスティーナさん……」

「あああああ、あのっ、こ、これはっ、ごめんなさいいっ!」

クリスティーナは慌てて突き飛ばす様に、シリユーから離れる。

「い、いえ、俺の方こそ、すみませんっ」

何故かシリユーも謝っていた。

いつもは比較的冷静なシリユーだが、こつゆつ事態には免疫が無かった。

「きつ、気にしないでっ! いや気にしてっ、じゃなくて、あああ、失礼しゆるっ」

噛んだ。

この主従は焦ると噛む癖があるらしい。

頬を真っ赤に染めたクリスティーナは、両腕で自分を抱きしめ踵を返すと、逃げる様にその場を去って行った。

「は、はい、えっと」

対するシリユーも茹蛸の様に赤くなっている。

「クリスったら、意外に純情なんですから……。完全に素が出ていましたね」

クリスティーナの後ろ姿を見送り、ナディアが穏やかな声で言った。

「それにシリユー殿？」

「え？」

ナディアはいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「あそこは謝るのではなく、むしろお礼を言うべきでは……？」

「おっさんかつ」

シリユーは思わずツツコミを入れた。

どうも、このナディアという女性の性格が掴めない。

「冗談ですっ」

だがシリユーの目にははっきりと映っていた。

「……木の枝……凄いいタイミングで蹴りましたよね……」

「冗談です」

シリユーが横目に見ると、ナディアはしてやったりという顔でこころと笑った。

【第25話】お礼を言いつなぎです？（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

次の更新は3月23日（金）21～22時頃の予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n5658eo/>

---

最強チートで異世界無双！ ~ 勇者召喚に巻き込まれたけど気が付けば世界最強。美少女ヒロインに囲まれて英雄認定されました ~

2018年3月20日23時03分発行